



屋本城原牛歸

—— 繩文中期末葉の集落を中心とした ——

昭和51年度喬木村歸牛原地区農業構造改善事業
埋藏文化財発掘調査報告書

1977.3

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

帰牛原城本屋

— 縄文中期末葉の集落を中心とした —

昭和51年度喬木村帰牛原地区農業構造改善事業
埋蔵文化財発掘調査報告書

1977.3

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

序

農地の生産基盤を造成し、経営の近代化、団地化等により農業振興を図るための第2次農業構造改善事業が埴牛原地区において昭和52年度事業として実施されることになり、これに関連して発掘調査をすることになりました。埴牛原地区はかねてより、縄文弥生時代の埋蔵文化財包蔵地として、埴牛原中原、南原、城本屋遺跡の存在が確認されておりますので、文化財保護の見地から農業構造改善事業の工事実施に先だち発掘調査を行なったものであります。

今回は工事用地内の城本屋遺跡を重点に発掘調査を行ない、城本屋より東側については立合調査によって進めましたが、予想以上の多量の住居址、土器、石器の出土をみることができました。中でも住居址は、3段4段の複合住居址であり、祭祀場とも思われる場所も発見され、この城本屋地区が縄文中後期に住みよい集落として栄えていたことは想像される事実を確認できたことは非常に大きな成果でありました。

報告書出版にあたり、7月、8月、9月という炎熱炎天の下に汗を流し、文化財保護のために御尽力をいただいた佐藤甦信調査団長を始め、発掘調査にあられた調査員、作業員、構造改善実行委員会、地主の各位に衷心より厚く御礼申し上げる次第であります。

昭和52年3月

喬木村教育委員会

教育長 下 岡 輝 男

例 言

1. 本書は昭和51年度第2次農業構造改善事業に伴う埴牛原城本屋遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は報告書作成の期限があり、このため調査結果について十分な検討・研究がなされず、資料提供に重点をおかざるを得なかった。
3. 編集及び執筆は今村の所見をいれて佐藤が担当した。
4. 遺構・遺物の作図・写真は佐藤が担当し、製図は遺構を中平一夫、遺物を田口さなゑに労をわずらわした。
5. 遺構実測図のうちピット内、または横に記してある数字は床面からの深さを cm であらわし、縮尺は図示してある。
6. 遺物は喬木村教育委員会資料館に保管してある。

目 次

序	1
例 言	2
目 次	3
遺物図目次	4
I 環 境	5
1. 自然的環境	5
2. 歴史的環境	8
II 発掘調査経過	9
III 発掘調査結果	13
(I) 遺構・遺物	13
1. 住居址	14
(1) 縄文中期末葉	14
(2) 縄文後期	38
(3) 弥生時代	40
(4) 平安時代	40
2. 柱列址	41
3. 貯蔵穴	42
4. 土 壇	42
5. 祭祀址的遺構	44
IV 城本屋遺跡縄文中期末葉の集落と土器・石器の様相	45
1. 集 落	45
2. 縄文中期末葉の土器	47
3. 石 器 (城本屋石器一覧表)	47
V まとめ	52
調査組織	53
遺物図	55
図 版	I 遺跡 II 遺 構
	III 遺物 IV 発掘スナップ
おわりに	103

遺 物 目 次

図37	城本屋遺跡1号住居址出土遺物(1:4)	55
図38	城本屋遺跡2号住居址出土遺物I(1:4)	55
図39	城本屋遺跡2号住居址出土遺物II(1:4)	56
図40	城本屋遺跡2号住居址出土遺物III(1:4)	57
図41	城本屋遺跡2号住居址出土遺物IV(1:4)	58
図42	城本屋遺跡2号住居址出土遺物V—石皿(1:6)	59
図43	城本屋遺跡2号住居址出土遺物VI(1:4)	60
図44	城本屋遺跡4号住居址出土遺物(1:4)	60
図45	城本屋遺跡3号住居址出土遺物I(1:4)	61
図46	城本屋遺跡3号住居址出土遺物II(1:4)	62
図47	城本屋遺跡5号・6号住居址出土遺物(1:4)	63
図48	城本屋遺跡7号住居址出土遺物I(1:4)	64
図49	城本屋遺跡7号住居址出土遺物II(1:4)	65
図50	城本屋遺跡8号住居址出土遺物I(1:4)	66
図51	城本屋遺跡8号住居址出土遺物II(1:4)	67
図52	城本屋遺跡9号・10号住居址出土遺物(1:4)	68
図53	城本屋遺跡14号住居址出土遺物(1:4)	69
図54	城本屋遺跡15号住居址出土遺物I(1:4)	70
図55	城本屋遺跡15号(II), 16号(I)出土遺物(1:4)	71
図56	城本屋遺跡16号住居址出土遺物II(1:4)	72
図57	城本屋遺跡11号・17号・18号住居址出土遺物(1:4)	73
図58	城本屋遺跡19号住居址出土遺物(1:4)	74
図59	城本屋遺跡20号・21号・24号住居址出土遺物(1:4)	75
図60	城本屋遺跡23号住居址出土遺物I(1:4)	76
図61	城本屋遺跡23号住居址II, 25号・27号住居址(I)出土遺物(1:4)	77
図62	城本屋遺跡27号住居址出土遺物II(1:4)	78
図63	城本屋遺跡29号住居址出土遺物(1:4)	79
図64	城本屋遺跡26号・30号・31号・33号・34号住居址出土遺物(1:4)	80
図65	城本屋遺跡36号・42号住居址出土遺物(1:4)	81
図66	城本屋遺跡45号住居址出土遺物(1:4)	82
図67	城本屋遺跡35号・37号・38号・39号住居址出土遺物(1:4)	83
図68	城本屋遺跡40号・41号・43号・50号・51号住居址出土遺物(1:4)	84
図69	城本屋遺跡47号・49号(I)住居址出土遺物(1:4)	85
図70	城本屋遺跡49号住居址出土遺物II(1:4)	86
図71	城本屋遺跡49号住居址出土遺物III(1:4)	87
図72	城本屋遺跡52号住居址出土遺物I(1:4)	87
図73	城本屋遺跡52号住居址出土遺物II(1:4)	88
図74	城本屋遺跡48号住居址出土遺物(1:4)	88
図75	城本屋遺跡土壇1号・3号・7号・11号, 貯藏穴, 祭祀址? 出土遺物(1:4)	89
図76	城本屋遺跡出土石皿(1:6)	90
図77	城本屋遺跡出土土製品, 小形石器類I(1:3)	91
図78	城本屋遺跡出土土製品, 小形石器類II(1:3)	92

I. 環 境

1. 自然的環境

埴牛原城本屋遺跡は長野県下伊那郡喬木村埴牛原3090番地他に所在する。

長野県飯田・下伊那地方は東に赤石山脈が連なり、西に木曾山脈が聳え、その中間を天竜川が南下して、その両側に見事な段丘が発達している。天竜川の東岸 — 竜東地区は背後には赤石山脈の前面に中山性の伊那山脈が大西山 (1741 m)・鬼面山 (1889 m)・氏乗山 (1818 m)・金森山 (1702 m) となって赤石山脈と並走している。伊那山脈の東面は急峻な断崖をなすが、西面は数列の断層による起伏をもちながら段丘面に達し、天竜川の氾濫原へとさがっている。天竜川の西岸 — 竜西地区に比し山麓からのびる扇状地は狭小で段丘面の幅員も全般的には狭いが、豊丘村から喬木村にかけての段丘の発達は著しく、特に北から豊丘村の三次原・田村原・林原・伴野原・喬木村の城原・埴牛原・伊久間原、さらに飯田市下久堅の中尾・庚申原と続く中位段丘面の幅は広く典型的な段丘地形を形成している。

遺跡の所在する埴牛原は東西に近い方向 (段丘面の中心線はN70°Wを指す) に連なる段丘で標高 490 ~ 530 m の伊那谷第 5 段丘面⁽¹⁾で、洪積中位段丘に位置づく。北には加々須川が流れ、西は天竜川の氾濫低地をのぞみ、南は小川川の支流の鞍馬沢が流れており、川との高距は35 m ~ 77 m に達し、段丘形成後の浸蝕の盛んであったことを物語っている。東方は伊那層よりなる丘陵となり、その一部が十万山として南側の鞍馬沢の浸蝕谷に沿って西にのびてきている。丘陵地と段丘面の境界あたりに部落埴牛原が立地しており、段丘面の東西は1700 m、南北の最大幅は550 m を測り、台地のほぼ中間部は、くびれて狭くなり南北幅 250 m となる。このくびれ部の北東が城本屋遺跡である。この中間部のくびれ部より東側に水田が発達し、西側は中央にやや低い地帯が東西に走り、ここが水田化されている以外は桑園と野菜畑であり、最近になって梅、梨の果樹園化がすすんできている。

城本屋遺跡は、北は加々須川の浸蝕谷 (比高70 m) に、南西は埴牛原段丘面にえぐりこむ崖端浸蝕による滝ノ沢の深い谷によって切られる独立した舌状の小台地面に立地している。標高509 m ~ 512 m、東西300 m、南北100 m に広がる遺跡である。微地形をみると、東から南東は扇状地形が丘陵地から伊那山地の山麓へと続いているが、他は加々須川と滝ノ沢の浸蝕崖に接し、北から西は急傾斜の崖となっている。南側は谷も浅く、緩い傾斜をもちながら谷に落ちている。この傾斜面に段々の水田が作られておりここが今次調査の対象地域である。

滝ノ沢は現在埴牛原用水の落とし水による沢であるが、その名の示すように滝があり、堅い基盤がここで崖端浸蝕をはばんでいる。滝ノ沢はかつては自然の流路であったもので、砂と泥の深い堆積が調査地域の南側にみられ、これが縄文中期末の住居址を切っている状態で発見され、縄文中期末以後の氾濫堆積を物語っている。

遺跡の地層は水田造成の際動かされ、不定であるが、残った層序をみると30 cm 前後の耕土と黒色土、10 cm 前後の褐色土があり15 cm ~ 20 cm のローム層があって地山の礫層となる。地山の礫層は伊那山地よりの崩落によるもので角礫の花崗岩である。

注1 松島信幸「伊那谷の段丘」1966 下伊那地質資料No.2

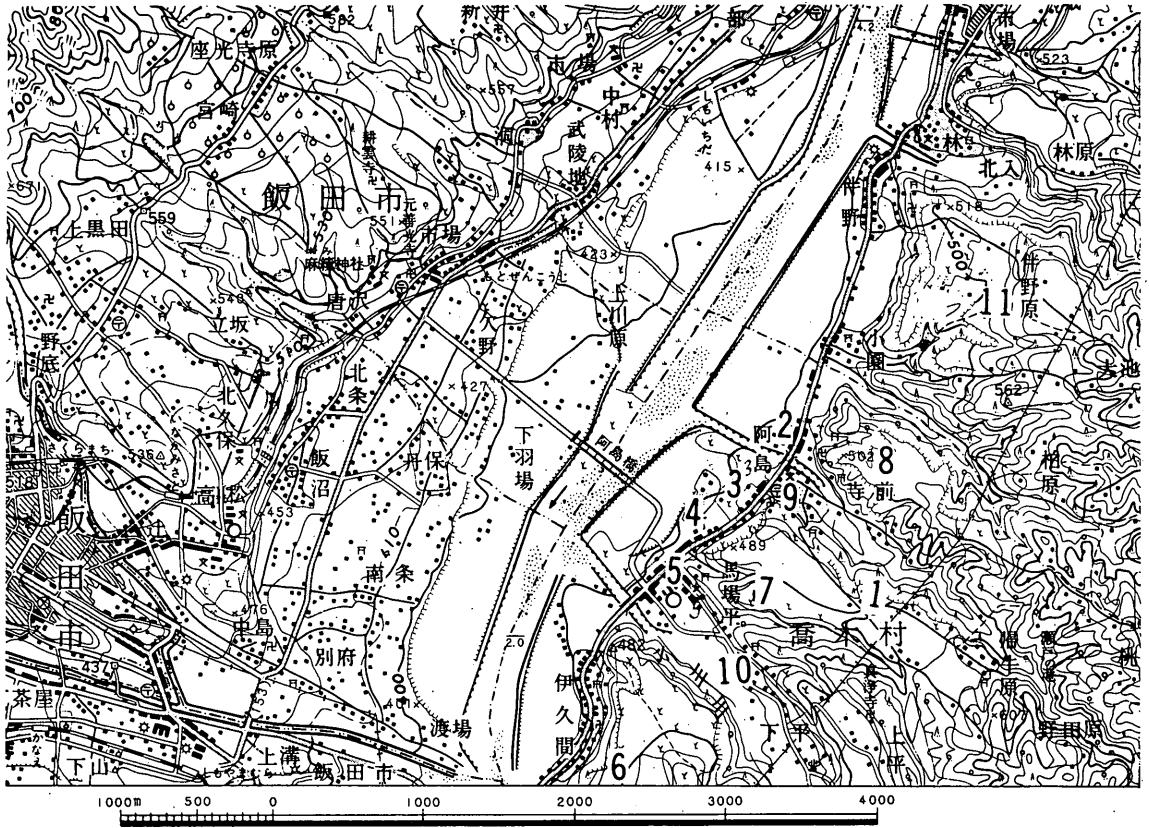


図1 婦牛原城本屋遺跡位置図

- 1 婦牛原城本屋 2 阿島 3 加々須川以南 4 里原 5 馬場平
 6 伊久間原 7 婦牛原南原 8 城原 9 郭 10 田本平 11 伴野原



- A 第1号古墳
- B 第5号古墳
- C 中原2号古墳

図2 中野原城本屋遺跡地形及び周辺遺跡図
(1 : 15,000)

2. 歴史的環境

城本屋遺跡は縄文中期加曾利E式、後期城之内式の遺跡として知られており、弥生後期の土器片も採られている。埴牛原台地面での調査は1970年の農道用地調査で、中原では方形周溝墓2基、十万山西裾部では縄文中期（勝坂式）住居址2、弥生後期住居址1、弥生中期（阿島式）土壇1を発掘⁽¹⁾し、南原では1972年喬木第一小学校建設用地調査で方形周溝墓5基を発掘調査しており⁽²⁾、埴牛原段丘面上の広範な範囲に縄文・弥生・平安時代にわたる集落が展開されているものと予想されている。台地の西端部に中原2号墳があり、径7m、高さ2mの墳丘が現存し、ここより埴輪片・直刀・須恵器が出土したと「下伊那史第3巻」⁽³⁾は述べている。この近くに中原1号墳があったが崩され、その跡はない。

埴牛原周辺の遺跡を概観すると、同位段丘面では、北にある城原遺跡は弥生後期の土器が瓦土を採る際に多くの出土をみており、その台地の先端部には中世の城原城跡がある。つづく伴野原は1977年調査では約90の住居址が発掘され、縄文前、中期、弥生後期、平安時代にわたって調査され、特に縄文中期末の環状集落の存在が確かめられ、バン状炭化物の出土で注目をあびて⁽⁴⁾いる。それより北に続く林原・田村原遺跡⁽⁵⁾では1975・1976年の調査で縄文・弥生後期・古墳後期・平安時代の遺構が発見され、特に田村原の畑灌工事に伴うパトロール⁽⁶⁾で各時期にわたる遺構・遺物が発見され、大遺跡であることが確かめられた。

埴牛原の南の同位段丘面では鞍馬沢を距て小川の場合遺跡があり、未調査地であるが縄文中期・弥生後期の遺物が発見されており、さらに南の伊久間原遺跡は、昭和27年農道開設時に縄文中期末住居址3、古墳時代後期住居址9が調査され⁽⁷⁾、また、旧石器ともみられる石器をはじめ縄文時代、弥生中・後期、古墳時代の遺物が多く表採され大遺跡として知られている。

埴牛原段丘崖下の遺跡には、北西の旧喬木第一小学校跡（現保育園）の郭遺跡では縄文中期末の完形土器の出土をみ、後期堀之内式土器の多くの出土をみており、1976年保育園建設時調査で弥生中期寺所式の住居址、阿島式土器を伴う土壇が発見されており、この西端部に竜東地区唯一の前方後円墳郭一号墳があり、段丘崖の中腹に顔花形円筒埴輪⁽⁸⁾の出土をみた郭5号墳が僅かに跡を残している。郭遺跡より一段下がった加々須川北岸の低位段丘面の阿島遺跡⁽⁹⁾は弥生中期阿島式土器の標準遺跡である。加々須川南岸の低位段丘面には加々須川以南下段地域遺跡があり、古い須恵器・和泉式の土師器の出土をみており、未調査地域であるが弥生・古墳・平安時代にわたる主要な遺跡と予想される。埴牛原の西の崖下に里原遺跡があり、馬場平遺跡・田本平遺跡とつづき、縄文・弥生・古墳・平安時代の遺物の出土をみており、特に馬場平遺跡では縄文前期から中期・後期・晩期、弥生中・後期、古墳時代の遺物の多くが中学校建設時に出土している。

喬木村の富田地区を除く古墳は37墳、そのうち16基は低位段丘面にあり、郭・里原・馬場平付近にあり、その他は段丘上、段丘崖腹にある。現在残存する古墳は少なく、郭1号墳は前方部を欠き、小川塚穴6墳は封土は崩され石室を露出しており、里原1号墳・杉立古墳は墳丘を僅かに残す状態である。大原段丘端にある奴山古墳群は6基の古墳があったが1・3・4号墳が残存しており、古墳群の形態を残すものとして注目される。消滅古墳をふくめこれら古墳より形象埴輪片・円筒埴輪・鏡・玉類・刀剣・金銅装馬具類の出土をみたものもあり、竜東地区の古墳文化の中心地であったであろうことも推測される。

注1 大沢和夫・佐藤 「埴牛原」1971 喬木村教育委員会

注2 佐藤 「埴牛原南遺跡」1973

- 注3 市村威人 「下伊那史第3巻」
- 注4 豊丘考古学研究室 「伴野原遺跡概報」1977
- 注5 佐藤・今村正次・酒井幸則他 「田村原遺跡」1974 豊丘村教育委員会
 ” 「田村原・林原遺跡」1975 豊丘村教育委員会
- 注6 今村正次 「田村原遺跡パトロール概報」 豊丘村教育委員会
- 注7 大沢和夫・今村善興「長野県下伊那郡喬木村伊久間原住居址」 信濃4ノ12
- 注8 市村威人 「郭5号墳」 下伊那史第3巻
- 注9 宮沢恒三・佐藤 「喬木村阿島遺跡」1967 長野県考古学会誌第4号

II. 発掘調査経過

昭和51年度、喬木村の農業構造改善事業は埴牛原段丘面のほぼ中間部から東側23.6haについて実施されることになった。この工事区域内に城本屋遺跡の中心部の南側が含まれており、このため工事着工前に発掘調査をなし、記録保存することになったのが本次調査である。

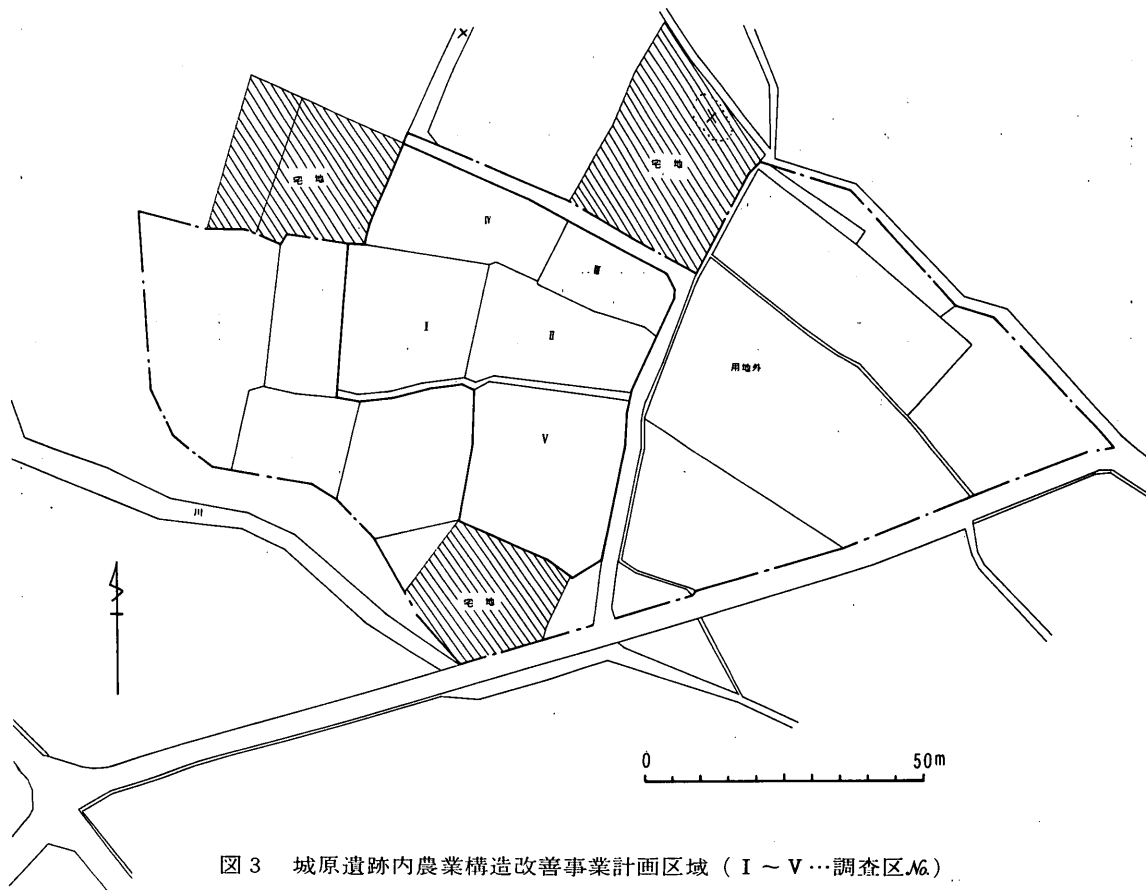


図3 城原遺跡内農業構造改善事業計画区域（I～V…調査区No.）

×印は以前工事中に遺物出土地

調査区域の大部分は水田であり、工事との関係で、中心部1300㎡を休耕田として夏に行かない、他を稲刈後に調査することにした。

第1次調査は昭和51年7月22日から9月6日までに1300㎡を、第2次調査は11月8日より11月19日までに1200㎡、計2500㎡の全面発掘を行なう。調査は水田ごとを1調査区とし、1～Ⅲを第1次、Ⅳ・Ⅴを第2次に行なう。西の境界の直線を基準に南より北へa・b…、西より東へ1・2…の2m×2mのグリッドを設定した。

広面積にわたる農業構造改善事業のため、城本屋遺跡以外の地域については工事中パトロールを行ない遺構遺物の調査を行うことにした。

発掘調査日誌

月日	天候	日誌
5.13	くもり・雨	午前、教育長と現地を視察
7.13	雨	教育長・佐藤・今村で調査打合せ、22日より調査を決め、準備。
20	くもり	発掘調査委員会 — 農業改善事業関係者と話し合い。
22	はれ	器材運搬、テント張り、草刈、グリッド設定、1列調査にかかる。 土壇1号・2号の検出掘り上げ
23	はれ	1号住居址検出 土壇1・2号実測
24	くもり 朝小雨	調査 2号住居址検出 土壇3号検出・掘り上げ j・e列3-5-7調査遺構なし
25	はれ	日曜日休み
26	はれ	完掘・測量 調査・覆土に遺物多し 土壇5-6号検出、完掘、測量
27	はれ	3号・4号住居址検出 床面へ遺物多し
28	はれ	調査 4号完掘測量
29	はれ	調査 床面へ調査 → 東側の排土作業
30	はれ	測量にかかるが南に広がりをもち調査
31	はれ	完掘 完掘、測量 5号・6号・7号・8号・9号住 土壇7号検出
8.1	はれ	日曜日休み
2	はれ 午後雨	5号住・6号住・7号住調査 10号住検出 土壇8号検出 完掘、測量 測量
3	くもり・雨	10号住調査 排土作業 午前で作業中止
4	はれ	掘り上げ測量 8号・9号住調査、土壇9-10号検出 掘り上げ、測量 11号・12号住を検出掘り上げ
5	雨	土器整理
6	くもり	8号住調査 13号・14号住検出、13号住完掘。11号・12号・13号住、土壇7号測量
7	朝大雨 午後はれ	午前土器整理 午後作業 8号住床面まで掘る。遺物多し 7号住調査
8	はれ	日曜日休み

月日	天候	日誌
8. 9	くもり・雨	午前作業 床面調査 調査
10	くもり 時々雨	完掘・調査 床面調査 14号住調査
11	はれ	15号住検出 6号住は土壇11となる。5号住完掘、掘り上げ 5号・7号・14号住測量
12	くもり・晴	調査 → 14住を切り、15住の一部は張り床、その東側に16住検出…掘り上げ 土壇11調査掘り上げ — 後期深鉢出土。午後II調査区ブルトーザで表土排除
13	はれ・くもり	午前中作業 II調査区のブル排土跡の調査…17号～29号住の存在をたしかめる
14 ↓ 16	盆	盆のため休む
17	はれ 午後 にわか雨	30号住検出、17号・20号住掘り上げ。水田造成時に壁はけずられる。20号住埋 ガメあり。 19号・21号住調査
18	はれ	調査覆土中の遺物多し。22住の調査、31号・32号住を検出、壁はなく、炉址と 柱穴のみ。掘り上げ。20号・22号・30号・31号・32号測量 31号埋ガメあり。
19	はれ	完掘 25号・28号住掘り上げ測量 33号住検出 調査
20	はれ	朝水路の水が全面に流入、ポンプで排水 17号住掘り上げ 19号・21号・17号住測量 20号・31号住埋ガメ断面調査
21	はれ	34号住検出 27号住と切りあい調査 18号・33号住完掘、測量
22	はれ	日曜日休み
23	はれ	27号住・34号住掘り上げ（ともに張床）
24	くもり 朝小雨	27号住の下に29号住を検出。21号住の南に24号住があり、壁は削られる。 掘り上げ、測量。24号住を切って23号住、さらに21号・27号住が切るを検出。 26号住を検出、掘り上げ、測量
25	はれ、 くもり	29号住調査（埋ガメ、東と北に検出）掘り上げ測量 23号住調査。複雑な住居址の切りあい関係に苦勞する。
26	くもり、雨	テント移動。35号住、23号住の調査。午後作業中止、土器整理。
27	はれ	29号住埋ガメ断面調査 掘り上げ測量 — 36号住を検出、調査 III調査区をブルトーザで表土排土
28	雨	婦牛原発掘調査の今年度、来年度計画を産業課と話し合い
29	はれ	日曜日休み
30	くもり、雨	36号住完掘。III調査区の調査。37号住検出 午後雨で作業中止。土器整理
31	はれ	測量、III調査区の全面排土作業、37号住、38号住検出掘り上げ
9. 1	はれ	39号住、40号住検出、掘り上げ。36号住の北に41号住・42号住検出 III調査区の西側は耕作で荒れる。
2	はれ	41号住調査、43・44号住検出調査。44号住に切りあう29号住に周溝をもつを検出、 再調査。掘り上げ実測。切りあいと地層の複雑さに苦勞。大沢和夫(午前)・矢亀 勝俊(午後)両先生の視察、矢亀先生より地層の指導

月日	天候	日誌
9. 3	くもり・雨	41号・42号・43号住掘り上げ測量
4	雨・くもり	午前土器整理, 午後作業 44号住調査, 45号住を36号住の下に検出調査
5	はれ	日曜日休み
6	はれ	44号・45号住掘り上げ測量 1次調査を終える。 午後テント徹収, 器材の整理, 運搬
7		1次調査終了。以後遺物の整理, 復元をなす。
第2次調査		
11.8	はれ	器材運搬, テント張り, IV調査区にグリッド設定 午後ブルトーザで表土排除 IV・V調査区 土壇12号検出, 掘り上げ
9	はれ・くもり	46号・47号・48号住, 柱列址Iを検出調査。土壇12号測量 ブルトーザでV調査区の表土排除(午前)湿地状でねばる。
10	くもり 小雨	46号・47号・48号住掘り上げ, 測量 柱列址I調査, 柱列址IIを検出 4号住に埋ガメ検出。貯蔵穴検出 土壇13・14号検出完掘
11	雨	作業不能
12	はれ	祭祀址?検出 断面調査掘り上げ 掘り上げ, V調査区にかかる, 49号住 49号住検出
13	くもり	IV調査区測量完了 50号・51号・52号住検出
14	雨	日曜日休み
15	はれ, 朝僅かに凍る	49・50・52号・24号(一次調査部)住調査 52号住覆土集石調査 48号住カマド調査
16	くもり, 寒い	49号・51号・52号上部集石調査測量。52号住埋ガメ検出。47号住埋ガメ調査
17	くもり	完掘, 測量にかかる
18	雨, はれ	前夜からの雨で遺構水びたし, 排水作業。49号・50・24号・51号・52号住測量
19	はれ	52号住埋ガメ調査, 49号住, 52号住を切る沼状堆積の調査, V調査区 東から南, 西にかけて泥と砂の堆積となる。 テント, 器材の徹収, 現場作業終わる。
11.21 12.20		現場作業終了後, 工事地域のパトロールを12月まで行うが遺構はなく, 僅かに縄文中期末の遺物を調査区面の水田で採集。他の地域になし。

その後遺物整理, 実測, 製図をなし, 報告書の作成にとりかかる。

III. 調査結果

(I) 遺構・遺物

城本屋遺跡で発掘調査した遺構は次のようである。(図4)

住居址 51

縄文中期末45、縄文後期3、弥生時代2、平安時代1

柱列址 2

土壇 14

貯蔵穴 1

祭祀址状遺構 1



図4 埴牛原城本屋遺跡遺構図

調査区域は南西の傾斜地に水田を造成したため、東側と北側は削られ、西と南側は埋立てられ、このため削りとられた区域の住居址は炉址と柱穴を残すのみとなり、埋立地は30～50cmの埋土があって水田造成前の地面がみられる状態で調査は苦勞した。また、縄文中期末葉の住居址の切りあい関係は複雑を極め、建替え、建増しもあり、遺物の時間的差も顕著にみられず、その前後関係の把握も容易ではなかった。

発掘調査による遺構の分布は、縄文中期末葉では、住居址は調査区のⅠの南半分、Ⅱの全面に、Ⅴでは北の一部にあって南から西にかけては砂と泥の堆積で切られており、Ⅳでは北西端部に1軒がみられたのみで、Ⅰ調査区からⅣにかけて僅かに土壇が検出され、Ⅲにおいては、この期の遺構はみられなかった。縄文後期の遺構はⅢ調査区に住居址が、ⅠとⅣに土壇がみられ、昭和41年度「新産都市開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査」の際には、調査区域の北の畑よりこの期の遺物が多く採集されている。弥生時代の住居址は北の道路にかかってあり、一部分の調査に終っており、石鍬の出土をみるが、決め手となる土器の出土はなく、時期を決めることができない。平安時代ではⅣ調査区に住居址1と柱列址2があり、住居址に隣接する貯蔵穴も同時期と考えられるが、覆土中の出土土器は縄文後期である。大きな岩の周囲に溝を掘る祭祀址的遺構？については、時期・性格については十分な把握のできないものであった。

Ⅰ. 住居址

(Ⅰ) 縄文中期末葉

Ⅰ号住居址(図5)

第1グリッドに発見され、二重構造をなし、外周は南北3.88m×東西3.5mの円形で、20cm、内周でそれより10cm低くローム層に掘りこむ小形の竪穴住居址である。主柱穴は5こ、外周壁に沿って整った配置にあり、炉址は西側の内周壁に接してあり、石囲炉であったが、はずされ僅かにその痕跡を残す。その東に炉址ともみられる浅い掘り凹みがあり、木灰が多くみられたが焼土はなく、また周囲にみられた石は地山の石で炉址とは認め難いものである。

遺物(図37) 土器は少なく小破片のみで、当地方における加曾利E期の深鉢形土器であり、2は東海地方との関連をもつもの、6は吊手土器の吊手部である。石器の量も少なく、打石斧、横刃形石器、凹石、石錘と石鍬(図77の1)がみられる。

2号住居址(図5)

Ⅰ号住居址の南2mにあり、南は5号住居址を切っている。南北5.7m×東西5.3mの楕円形、褐色土層からローム層に深さ60cm掘りこむ竪穴住居である。床面は堅く、主柱穴は4こ、炉址は中央よりやや北に寄ってあり、深さ40cmの掘りこみで石囲炉とはみられない。南のテラスに方形に掘りこむ出入口が設けられている。

遺物(図38～43、図77の2～18)には、土器・石器・土製品の出土量は多く、土器は下伊那地方加曾利E期のやや新しい要素をもつもので、キャリバー形の深鉢が主体をなし、浅鉢に図39の11・12があり、

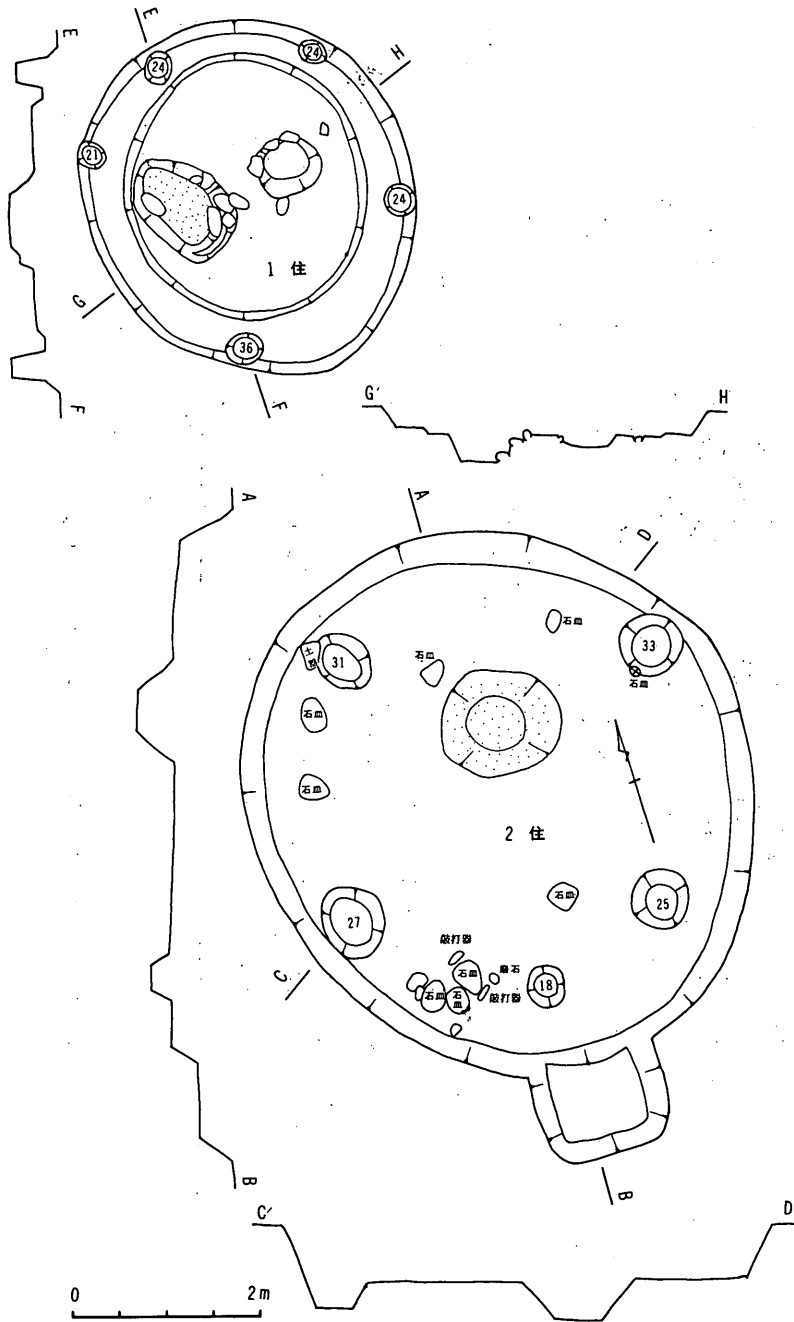


図5 城本屋遺跡1号・2号住居址

13は吊手土器とみられる。土器の文様は口縁横帯文の渦巻文つなぎが多く、胴部は縄文の地文を縦の沈線が区画し、縦走する波状文を施すのが一般的である。石器は打石斧50、磨石斧5（小形ノミ1）、敲打器4、台石1、横刃形石器16、磨石5、砥石1、石錐1、剥片石器2、石匙2、凹石1、石錘5、石鏃5、大形打石斧1、石皿9があり、100こを越す量と器種も多様であり、石皿9この出土は注目される。土製品には図77の2～7の耳栓と8のミニチュア土器がある。

3号住居址（図6）

I調査区の東端に発見されより東は旧水田境石垣（図4参照）までは2回にわたる水田造成で荒らされている。西は4号住居址を僅かに切る状態である。南北4.7m×東西4.6mの円形、ローム層に約25cm掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く、支柱穴は6こ、炉址は中央よりやや西に寄っており、深さ35cmの掘りこみである。これより東60cmに炉址があり、内部の焼土は

少ないが、木灰が多量につき、焼土が床面上より東壁上にまで続いており、3号址より新しい住居址が水田造成時に削りとられたものとみられる。

遺物（図45・46・76の1・77の19・20）は比較的多く、土器は頸部のくびねは小さく、口縁部の湾曲の少ないキャリパー形の深鉢を主体とし、下伊那地方加曾利E期の新しい時期とみられる。図45の1は大形の深鉢で口径52.8cm、雄大な渦文まわしは見事である。2の深鉢は口縁部にS字状文を中心に二種の楕円文を並べ内部を斜行沈線で飾り、頸部から胴部は2段の長楕円の区画文が付き、刷毛状器具による細

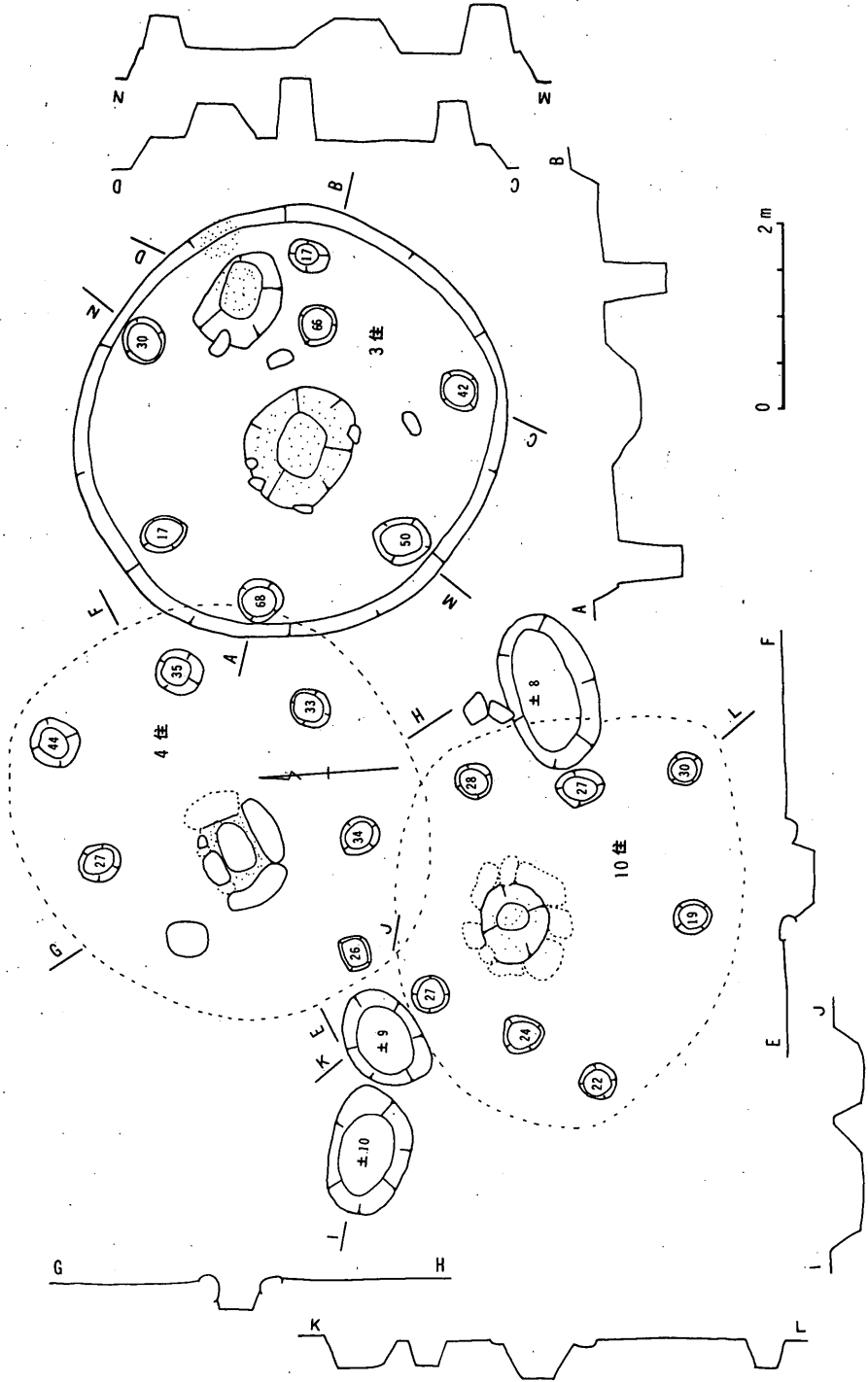


图6 城本屋遺跡3号・4号・10号住居址，土坑8号・9号・10号

い斜条線が全面にみられ、1・2共に当地方では類例の稀なものである。8は無頸甕、覆土出土の図46の10の吊手土器の吊手部、9の浅鉢がある。石器はいずれも覆土下層出土で打石斧22、磨石斧3、横刃形石器4、磨石2、石錘1と石皿1があり、土製品に図77の19・20のミニチュア土器底部と耳栓の出土をみている。

4号住居址（図6）

東の一部を3号住居址に切られる状態であるが、その上に構築されていたかは把握できなかった。南は10号住居址と接しあっているが、その新旧については遺構では区別しがたい。石囲炉の発見によって住居址の存在が確かめられ、柱穴を検出し、その規模が推定された。径約4.5mの円形、竪穴住居址であったとみられる。

遺物（図44・76の2）は、床面に残ったものと、炉址、柱穴内の出土である。土器は少なく、下伊那地方で加曾利E期の一般的なものである。石器には打石斧7、横刃形石器4、石錘2と石皿1がある。

5号住居址（図7）

2号住居址の南にあり、北の一部は切られている。南側2分の1以上は水田のため調査不能。水田造成の埋立が深く地表下135cmに床面がある。東西径5.1mの円形、深さ48cmローム層に掘りこむ竪穴住居址である。炉址は方形の石囲炉であり、西と南側の石ははずされ、その痕跡を残す。柱穴は2こ検出されているが、その配置からみて4ことみられる。

遺物（図47の1～14）は少なく、1の深甕は頸部に粘土紐のはり付けによる波状文をめぐらす他は無文である。深鉢は小破片で器形は明確でないが文様からみて下伊那地方の加曾利E期で、やや古い要素をもつとみる。石器は打石斧2と横刃形石器1と僅かである。

6号住居址（図7）

5号住居址と7号住居址の間にあり、一部床面を検出し、遺物の出土をみたが、縄文後期の土坑11号が掘りこまれ、南は水田となり、調査不能のため、不十分な調査に終わった。

遺物（47の15～26）土器にはまとまったものがあり、頸部のくびれの少ないキャリパー形の深鉢が主体となる。15は口縁帯文が渦巻文つなぎで、その間を楕円区画文がつき、内部を沈線で飾り、頸部から胴部は無文となる。16は口縁部は渦文をはさんで縦の荒い条線、胴部は縦の隆帯と荒い綾杉文を施す。17は内部に刺突文の二重楕円区画文が口縁部をめぐり、頸部に横のワラビ手文、胴部は縄文の地文に懸垂文がつく。下伊那地方の加曾利E期の一般的にみる土器である。石器は打石斧・横刃形石器各2この出土をみているにすぎない。

7号住居址

西に8号住居址、北に10号住居址があり、東は9号住居址を切り、南に6号住居址と複雑な切り合い関係にあって、そのプランをはっきりさせている住居址で、5.3m×5mの円形、ローム層に30cm～50cm掘りこむ竪穴住居址である。周溝が北東と南西は壁より70～80cm内側にあり、楕円形にめぐらされ、柱穴がその外側に掘られるものもあり、炉址に新・旧2こがあり、建替の住居卦とみられる。床面は堅く、主柱穴は6ことみる。炉址は中央より北によってあり、石囲炉の石ははずされて、その痕跡を残す。この南に接して古い掘りこみの炉址がある。東テラスに長方形に出入口の掘りこみが付く。

遺物（図48・49、図76の4、図77の21～25）には土器、石器、土製品の出土は多い。土器は頸部のく

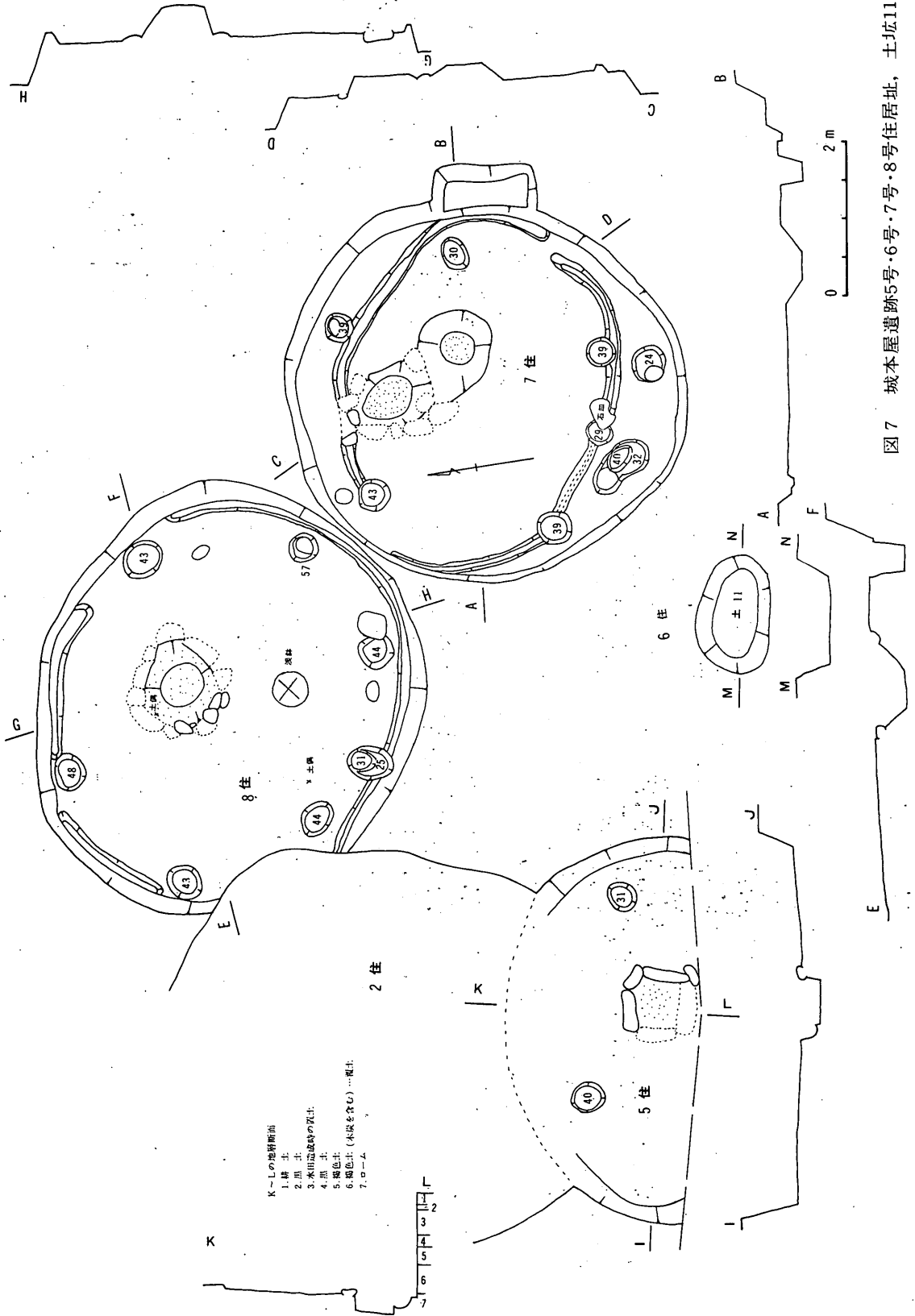


図7 城本屋遺跡5号・6号・7号・8号住居址、土坑11号

びれの比較的強い深鉢が主体で、口縁部が内湾する図48の1・7、直行して開く2・4があり、口縁帯文は内部を沈線、刺突文の円の区画文で飾るが一般的で、胴部まで同一文様で飾る7があり、胴部を沈線の区画と綾杉文、斜行沈線を施す1・2がある。縄文の地文に浅い沈線による懸垂文で飾る3があり、覆土下層出土の渦文を主体とする把手をもつ8～11がある。

図77の21の吊手土器の吊手部は小形であるが、装飾は立派で、二重になる手は中央で一つになってそこに顔面がつく。23も吊手部である。土製品に22の土偶胴部が、24・25は大形の耳栓がある。

図48の3は東海地方に関連する土器とみられ、他は下伊那地方の加曾利E期の一般的にみられる土器群である。

石器の出土は多く、打石斧、磨石斧、横刃形石器、敲打器、石皿があり、打石斧に図47の19・20・25・26の大形がみられ、石皿（図76の4）は8号住居址床面出土の半壊と一つになったもので注目される。

8号住居址（図7）

西側は2号住居址に一部を切られ、南東は7号住居址と隣接している。南北5.1m×東西5.6mの円形、北壁で45cm、南壁で23cmの深さにローム層に掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く、支柱穴は6ことみる。周溝が壁に沿って北側では3この柱穴をはさむ状態で切れ、東から南は連続して掘りこまれている。炉址は中央より北に寄っており、石囲炉の石がはずされた痕跡を明らかに残している。

遺物（図50・51・76の4・77の26～34）は多く、土器には深鉢・深甕・器台・浅鉢・台付土器がある。深鉢には頸部のくびれの強く、口縁部の内湾するキャリパー形と、くびれをもたぬものがある。文様は口縁部は無文・縦の条線・ワラビ手文があり、円の区画文はみられない。把手は多く、渦文、ワラビ手文で飾る。胴部には隆帯と斜行沈線がみられる。浅鉢（図50の2）は口辺部を欠くが、床面に据えられた状態はこのまま使用していたものとみる。器台（図50の27）は両側に4孔ずつをもち、縦の押引沈線で飾る。台付土器には図51の11・12の脚部がある。図50の25は東海系の土器であり、他は下伊那地方の加曾利E期の新しい要素をもつ土器群とみる。

石器（図51・77の31～34）には打石斧25、横刃形石器6、磨石斧1、敲打器3、凹石2、石皿1、不明石器1、石鏃4の出土をみている。石皿は7号住居址と一つになったものである。50の不明石器は南壁より

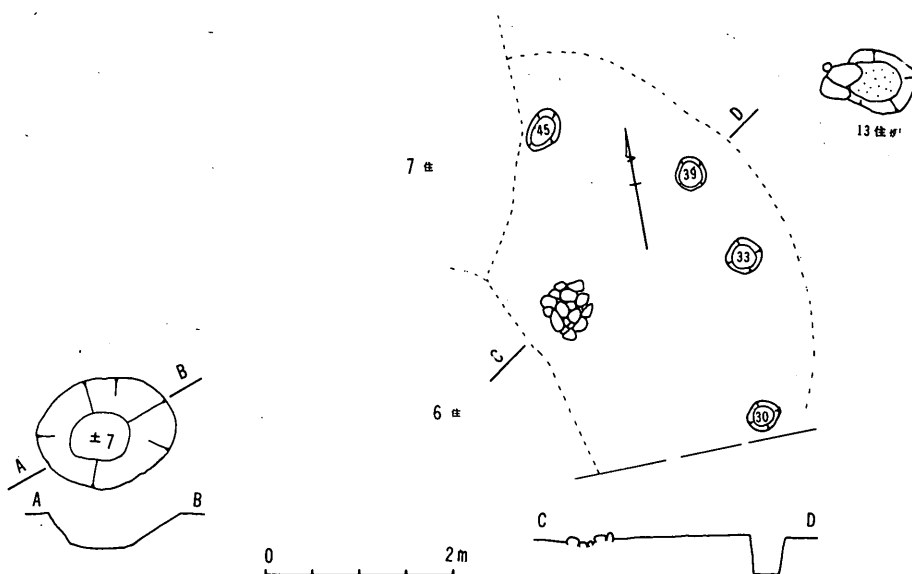


図8 城本屋遺跡 9号住居址、土坑7号

の出土で石棒とも考えられる。

土製品には図77の26～29の4個体の土偶の出土をみており、ミニチュア土器に同図30がある。

9号住居址（図8）

西は6号・7号住居址に切られ、東は13号・14号住居址と重なりあう。小形石組炉の発見により、その存在が確かめられた。壁は削りとられ、柱穴4こが検出され、円形の竪穴住居址と推定された。

遺物（図52の1～27）土器は頸部のくびれの少ないキャリパー形の深鉢が主体で、口縁部は渦卷文まわし、胴部は縦の沈線区画とその間を綾杉文・沈線の波状文が施される。1は大形の深甕で頸部から下を太い隆帯で飾る。下伊那地方加曾利E期のやや新しい要素をもつ土器群である。

石器には打石斧10、横刃形石器2、敲打器1、凹石、石錘1が検出されている。

10号住居址（図6）

北は4号、西から南に8号・7号、東に14号住居址と重なりあい、さらに東側は土壇8号が掘りこまれている。壁は完全に削りとられ、炉址の発見で住居址を認めたもので、柱穴7こが検出されたが、他遺構との重なりもありはっきりしないが、その配置からみて主柱穴は5この円形の竪穴住居址と推定される。炉址は石囲炉があったが石ははずされ、その痕跡を残している。遺物（52の28～34）は僅少で土器には30の器台があり、加曾利E期の新しい土器とみる。石器には石匕1、横刃形石器1、石錘1が検出されている。

11号・12号住居址（図9）

西に11号、東に12号と接しあい南に8号住居址がある。12号は東は4号住居址と重なり、南に土壇9

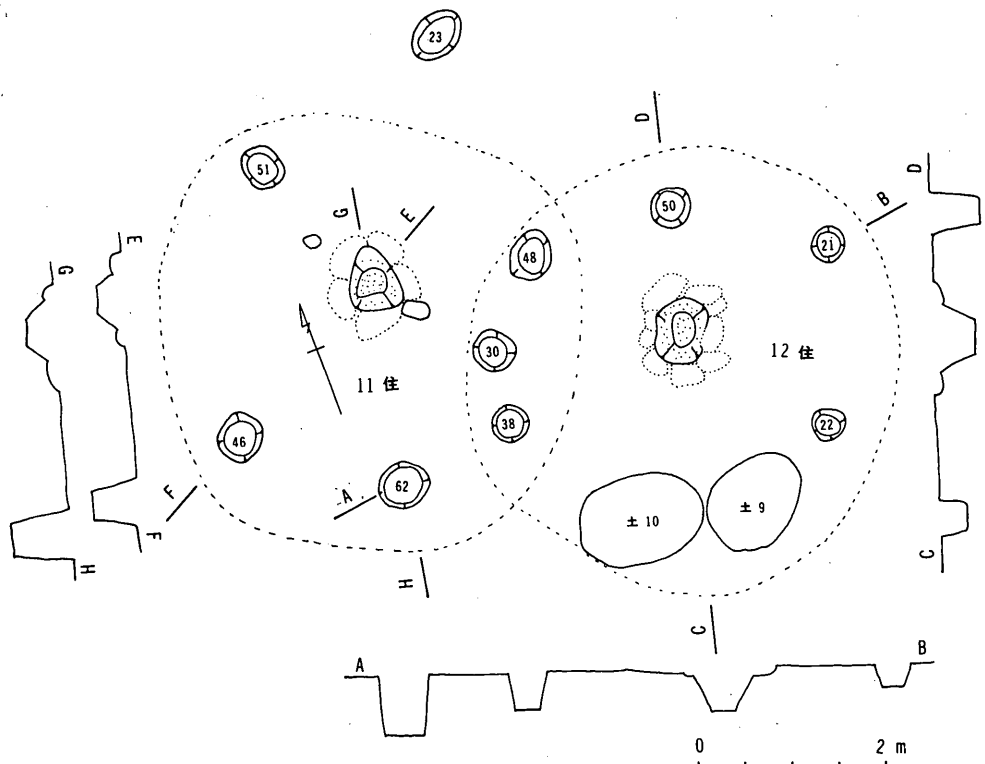


図9 城本屋遺跡11号・12号住居址

号・10号が掘りこまれている。共に壁は完全に削りとられ、炉址の発見によってその存在を確かめたもので、炉址はいずれも石囲炉の石がはずされ、その痕跡を残す。主柱穴は配置からみて、11号は4こ、12号は6ことみる。いずれも円形の竪穴住居址であったと推定される。

遺物は11号址で（図57の1～20）土器片と石器の出土を炉址・柱穴よりみている。土器は本遺跡の大半を占める加曾利E期の下伊那地方の一般的なものであり、石器には打石斧6、横刃形石器3、石ヒ1搔器1、石錘1がある。12号址の出土遺物はなし。

13号住居址（図10）

北に10号、西に7号・9号、南に14号、15号住居址と重なりあう。壁は完全に削られ、石囲炉を発見調査したもので、炉石の大半ははずされていた。主柱穴は6ことみられ、円形の竪穴住居址と推定された。

出土遺物はなし。

14号住居址（図11）

北は13号、西の9号住居址を切り東は15号住居址の上に張床でのとみられる。南は水田のため3分の1は調査不能。西壁は削られ僅かに痕跡を残し、東壁は15cmの深さにローム層に掘りこむ東西径4.8mの円形の竪穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は6ことみられ、炉址は中央より西に寄ってあり、石囲炉で内部にも石が敷かれる。

遺物（図53・78の1～7）土器は頸部のくびれの弱い深鉢が主体となり、波状口縁をなす1・4、4この突起をもつ2・7があり、10の把手もある。文様は変形の渦文の区画文が口縁部に、胴部は縦の隆帯または沈線の区

画とその間を縦の波状文で飾るが主体となり、綾杉文の7がある。下伊那地方の加曾利E式期の新しい土器群とみられる。

石器の出土は比較的少なく、打石斧7、磨石斧2、横刃形石器2、敲打器1、搔器1、石針2があり土製品に土偶臀部（図78の1）と耳栓（図78の2～3）3この出土をみている。

15号住居址（図12）

西は14号住居址が張床上にのり、東は16号住居址を切っている。南側の一部は水田のため調査不能東西径4.7mの円形、30cm前後ローム層に掘りこむ竪穴住居址である。柱穴は4こ検出されているが配置からみて主柱穴は5ことみる。炉址は中央より西に片寄ってあり、炉石1こを残してはずされ、その痕跡を残す。

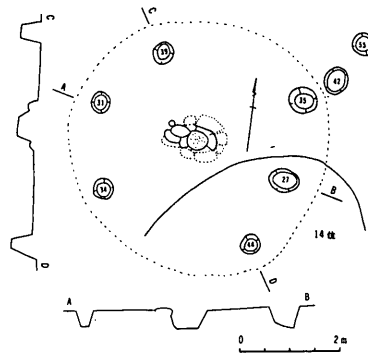


図10 城本屋遺跡13号住居址

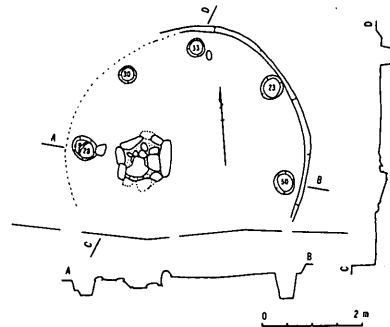


図11 城本屋遺跡14号住居址

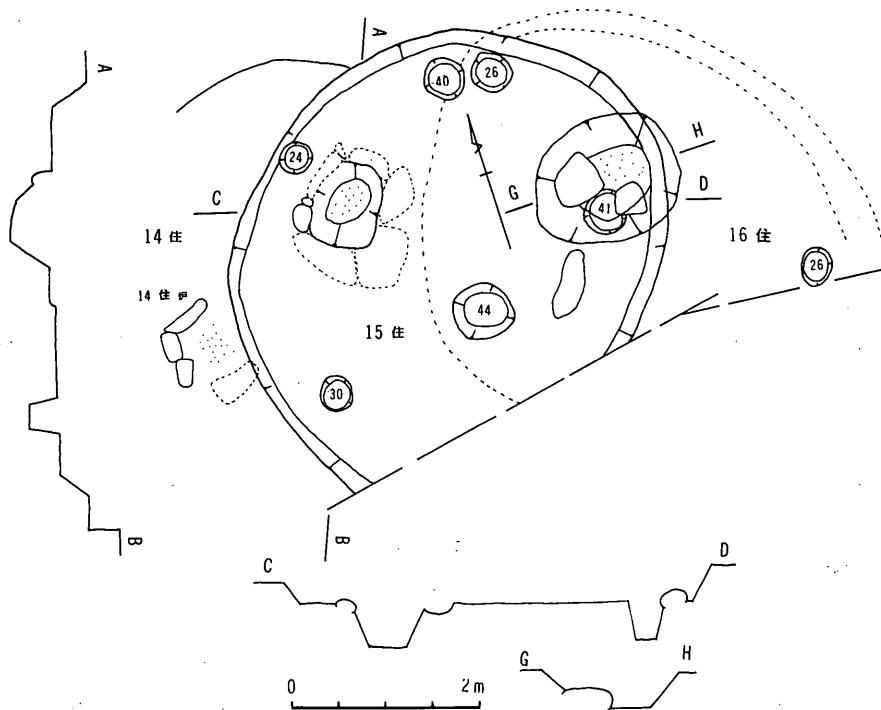


図12 城本屋遺跡15号・16号住居址

遺物（図54・55・78の8～10）土器（図54）には1の頸部のくびれの少ない深鉢，2の無文の頸部のくびれの強く口縁部の内湾するキャリパー形の深鉢が，8の無頸甕，3の台付土器，4の吊手土器の吊手部等があり，文様の主体をなすのは口縁帯を一重または二重の内部を刺突文，斜沈線で飾る楕円文つなぎであり，胴部は縦の沈線の区画と綾杉文の組合せがあり，条線と縄文の地文とがある。無頸甕は渦巻文と斜行沈線で飾り，台付甕は地文の縄文に，口縁部は四等分する渦巻文つなぎ，それより下がる隆帯が頸部と胴部に3条の横帯文となって飾る。ワラビ手文で飾る把手に6・7がみられる。下伊那地方加曾利E期のやや新しい要素をもつ土器群とみる。

石器（図55の1～13・78の9・10）は比較的少なく打石斧9・横刃形石器1，敲打器2・磨石1・石鏃2の出土をみている。土製品に土偶の臀部（図78の7）の大形が出土している。

16号住居址（図12）

西の15号址に大半は切られ，残った東側は水田造成時に壁は削りとられ，15号址の東壁にかかる炉址によって，その存在を確かめた。推定径4.5m余の円形竪穴住居址とみる。

遺物（図55の14～27・56）土器（図55）の床面出土の明らかなものは14～17で，他は15号址の混入とみられるものが多い。頸部のくびれの比較的少ないキャリパー形（14・15）と，くびれをもたぬ（16）深鉢があり，14は，大形の深鉢で8この突起をもち口縁帯文は渦巻文まわしと，その間を楕円文で飾り縄文の地文に頸部をワラビ手文と2条の沈線をめぐらし，これより胴部へワラビ手文と沈線が胴部を8分画する懸垂文をさげる。18は縦の条線，16は縄文が施されている。下伊那地方の加曾利E期の一般的にみる土器群である。

石器（図56）は多く，打石斧17・磨石斧1・横刃形石器12・敲打器2・磨石1・凹石2・石錘2の出土をみている。

17号住居址 (図13)

II調査区の東端に発見され、東は用地外の道路にかかり、西側の一部の調査に終わり、南は水田、二次調査で、泥と砂の堆積で切られていたことを確かめた。炉址と柱穴1を検出したにすぎない。炉址は石囲炉であるが大部分の石はずされ、その痕跡を残している。ローム層に20cm掘りこむ円形の竪穴住居址である。

遺物 (図57の20~28) は少なく、土器は小片のみで、下伊那地方加曾利E期に一般的にみるものである。石器は打石斧1と石錐1がある。

18号住居址 (図13)

北に20号・31号、東に30号住居址があり、南は3分の1を19号住居址に切られる。東西径4.9mの円形、壁の上部は水田造成時に削られているが、壁高5.0mを残す竪穴住居址である。床面は堅く、柱穴5こを検出するが、支柱穴は6ことみる。炉址は中央より北によってあり、石囲炉の石3こを残してはざされてその痕跡を残す。

遺物 (57の29~37) 土器は頸部のくびれの強いキャリパー形の深鉢が主体となる。文様は29の口縁帯文は渦巻文つなぎ、頸部に爪形文をめぐらし、縄文の地文を切って2条の平行沈線が胴部を8分し、30は口辺部を欠くが口縁部を太い2条の隆帯がめぐりこれより底部近くまで2段の長楕円区画文、その内部を綾杉文、さらに区画文の間を列点文で飾る類例の少ないものでやや古く、31の地文の縄文を切って2段の長楕円区画文とその内部を波状沈線で飾る下伊那地方加曾利E期の一般的にみるものであるが、

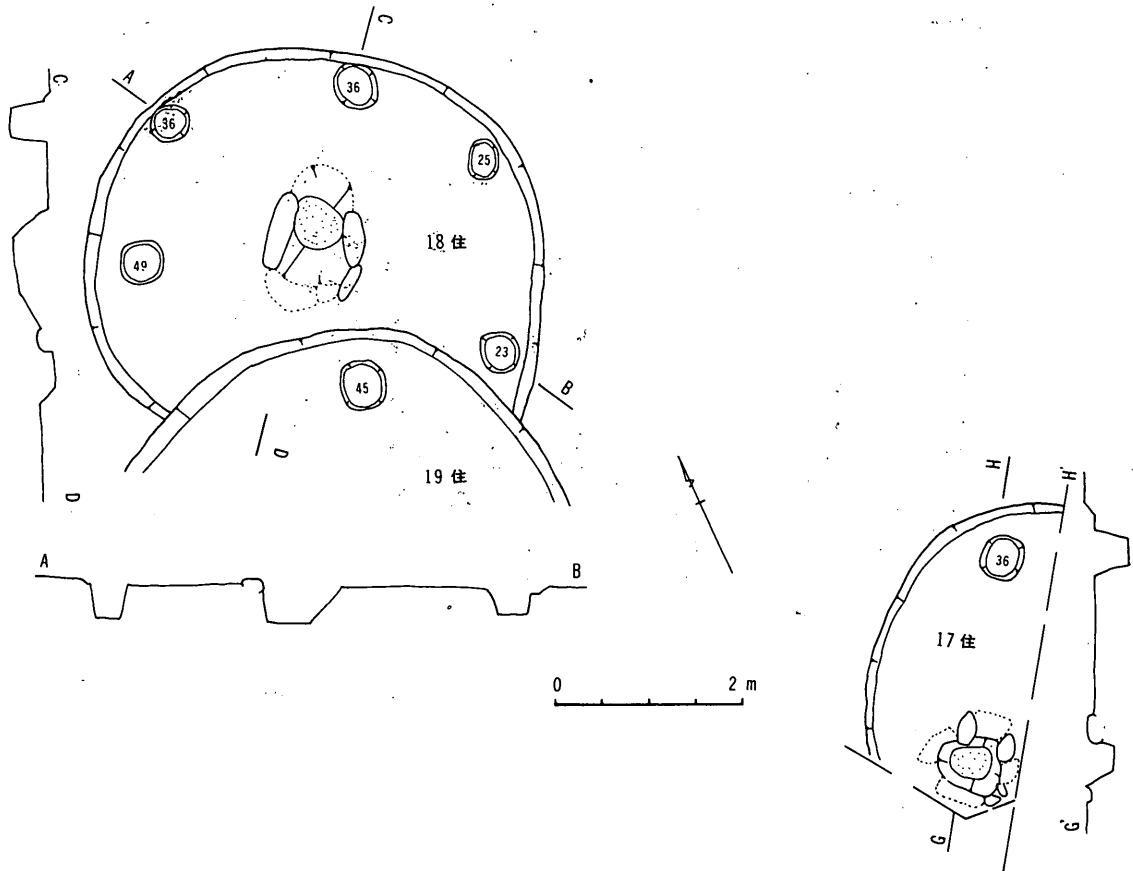


図13 城本屋遺跡17号・18号住居址

31は新しい要素をもつ。34～36の特殊な文様構成の土器がある。石器は37の石錘1この出土をみたのみである。

19号住居址 (図14)

北の18号住居址を切り、西に24号住居址と接している。南北5.5m×東西5.6mの円形というより隅丸方形に近く、ローム層に25～30cmの深さに掘りこむ堅穴住居址である。床面は堅く、支柱穴は4こ整った配置にあり炉址は中央より北に寄っており炉石のはずされた痕跡を残し、炉石とみる石が床面に2こみられる。周溝を壁に沿ってめぐらし、北と南で一部が切れている。

遺物 (図58・図78の11～13)
土器 (図58) はキャリパー形の深鉢が主体とみられ、頸部に篋状具による押し刺突文をめぐらし、結節縄文を施し、胴部は太

い隆帯または沈線が地文の縄文を切るのが共通的にみられる。22は台付土器である。下伊那地方に多くみられる加曽利E期のやや新しい土器群である。石器には打石斧9、磨石斧1、横刃形石器3、磨石1、石錘1、敲打器 — 繊維をうつ — 1と、図78の13の石鏃、12の黒曜石製の不明石器があり、土製品に図78の11の耳栓がある。

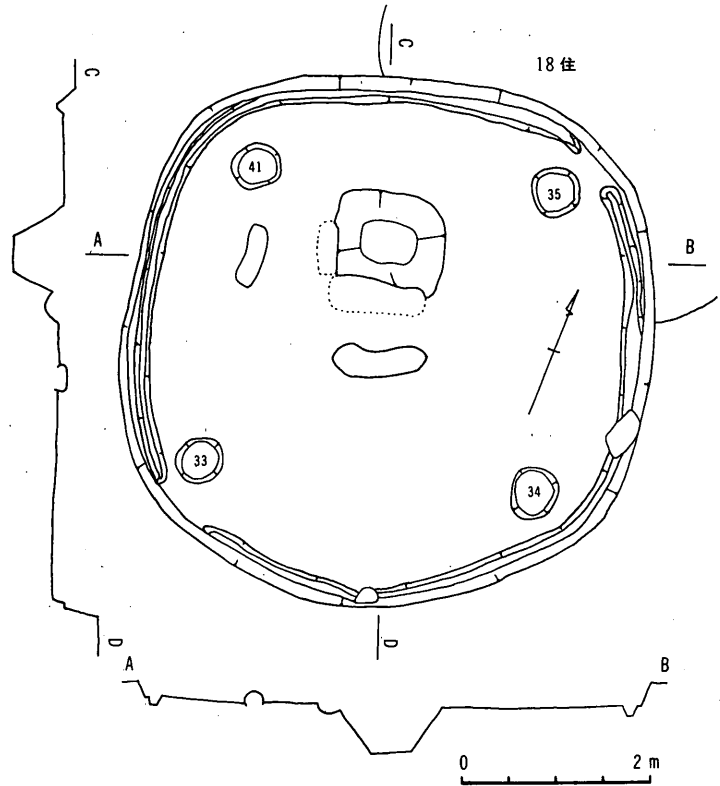


図14 城本屋遺跡19号住居址

20号住居址 (図20)

II調査区の北東端にあり、壁は完全に削りとられている。西に31号、南に18号住居址と重なりあっている。炉址は中央より北に寄っているとみられ僅かに炉址を残す。31号住居址との重なりからはっきりしないが、配置からみて支柱穴は6ことみる。円形の堅穴住居址と推定される。埋甕を南西側に検出しているが、31号址のものか不明である。胴部のみが埋められたものである。(図29) また東側よりつぶれこむ土器(図59の2)を発見しているが埋甕であったかもしれない。

遺物 (図59の1～7) は少なく、土器には1は埋甕、2は埋甕ともみられた無文の胴部と2と伴出した3・4があり、石器に打石斧2と横刃形石器1がある。

21号住居址 (図15)

45号住居址の東壁から内側にあつて、張床をもって45号址の上ののる。径4.7mの整った円形をなし北壁で35cm、南壁で50cmの深さにローム層に掘りこむ堅穴住居址である。支柱穴は4こ、炉址は中央より北に片寄っており、南側に炉址を残しているが他には石をはずした痕跡はなく、炉石の南側には焼土をもつ浅い掘り凹がつく。なお、26号、23号、36号、24号住居址との重なりあいもあり、複雑を極めて

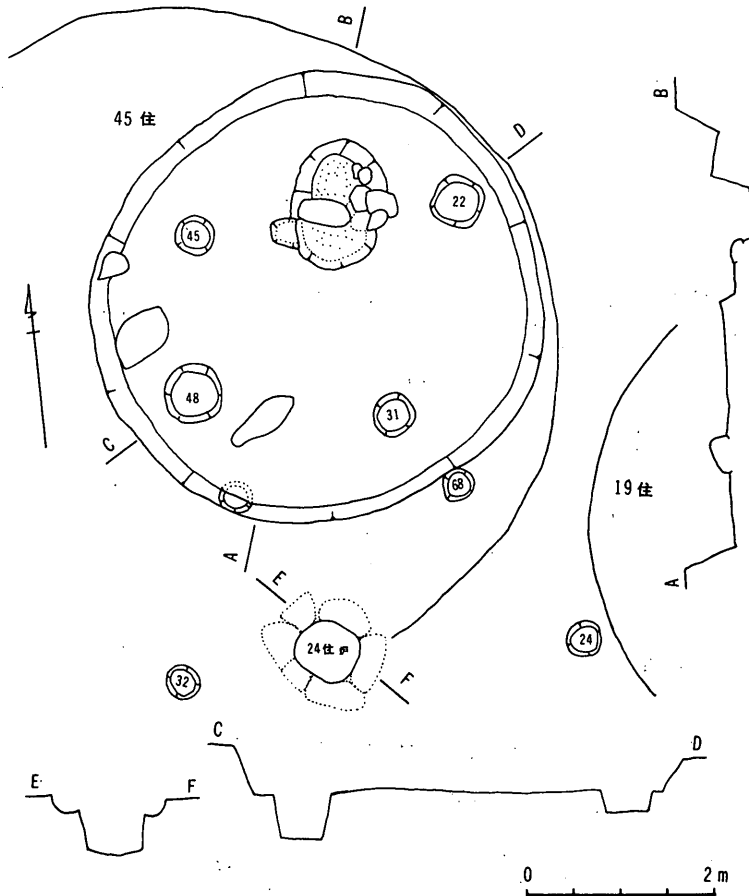


図15 城本屋遺跡21号住居址

みたにすぎない。

23号住居址 (図18)

東に21号と重なりあい、北と西は26号・27号住居址の上ののる。南から東に51号・36号・24号、さらに45号住居址と複雑な重なりあいをなしている。南北径5.7mの円形、25cmローム層に掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く主柱穴は6ことみられる。炉址は中央より北に寄っており、南から東にかけて炉石のはずされた跡を残す。

遺物(図60・61の1~10・78の14・15)土器(図60)には頸部の強くくびれて口縁部が内湾する深鉢を主体とするが、口縁部は開き胴部が大きくふくらむ13・14、頸部のくびれをもたぬ2の深鉢があり、文様は縦の条線または沈線と綾杉文だけの一群と、口縁部を縦または横位のワラビ手状文で飾る一群があり、後者は東海系との関連あるものとみられる。下伊那地方の加曾利E期の新しい土器群である。

石器には打石斧11、磨石斧3、横刃形石器4、凹石1、石鏃1があり、土製品(図78の14)に耳栓1がある。

24号住居址 (図15・17)

1次調査時にII調査区の南端に発見され、水田のため炉址のみの調査に終わり、45号住居址調査のため、炉址の大半は破壊された。2次調査で柱穴の検出を行なったものである。北は45号住居址の南壁の上にかかって炉址があり、50号住居址と重なりあいをなし、炉址、柱穴の位置からみて同一住居址の建

いる。このため遺物も他住居址との混入もあるとみられる。

遺物(図59の8~19・図76の5・8)は少なく、図59の8~11は床面出土、15は東海系の土器、11は小形浅鉢であり、下伊那地方の加曾利E期の新しい要素をもつものとみられる。石器は磨石斧2、横刃形石器1と覆土出土の石皿(図76の5・8)がある。

22号住居址 (図18)

23号・25号・28号・32号住居址と重なりあいをなし、炉址の発見によってその存在を確認したもので、壁は水田造成時に削りとられ、柱穴はどの住居址のものか錯綜してはっきりしない。炉址は石囲炉の石がはずされた痕跡をはっきり残している。遺物は加曾利E期の小片を僅かに

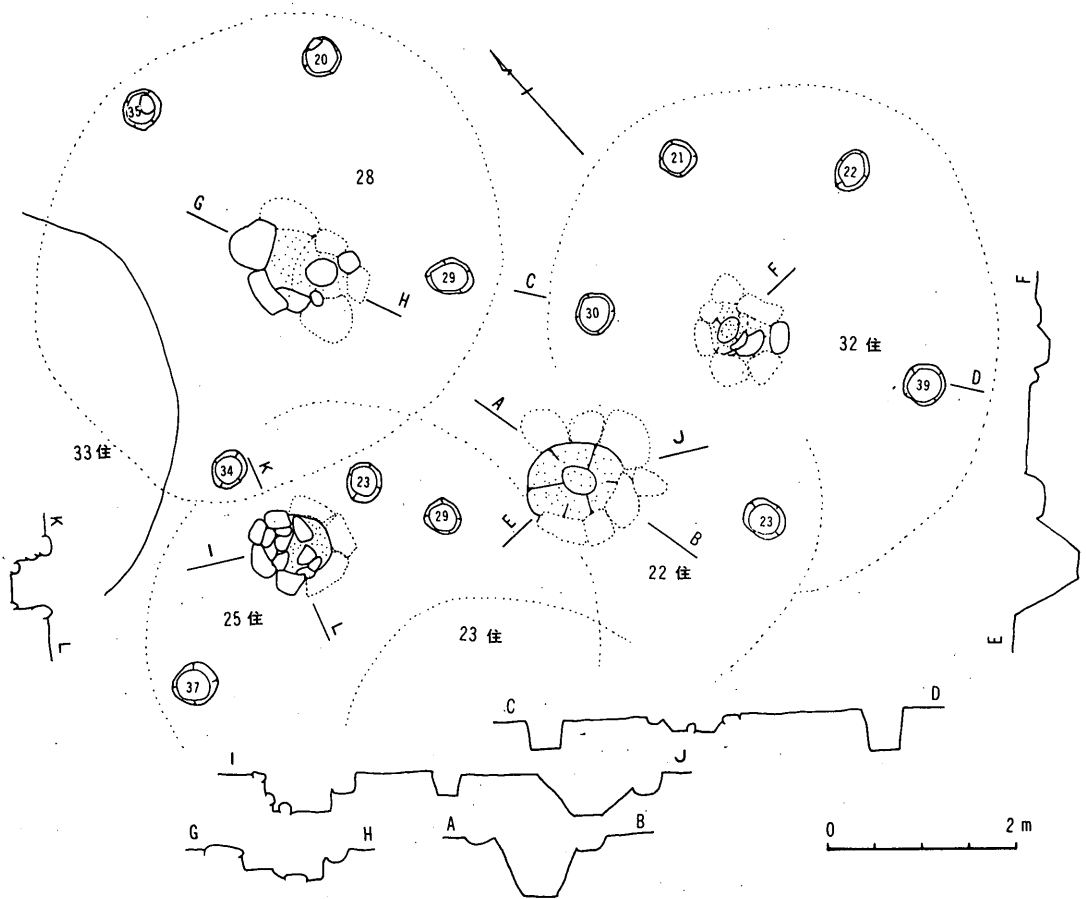


図16 城本屋遺跡22号・25号・28号・32号住居址

替えともみられ、主柱穴6こをもつ円形の竪穴住居址と推定される。

遺物（図69の21～31・78の16）土器は少なく21の把手の他は小片であるが、下伊那地方加曾利E期の一般的な要素をもつものとみられる。石器には打石斧7と石鏃1がある。

26号住居址（図18）

西に34号、南は23号に切られ、東は21号がのる、または重なりあう複雑な状態にある。北壁を22号址に削られているが僅かに残し、円形の竪穴住居址であることを示している。柱穴は北側に1こがわかり他は重なりあいのため不明。炉址は北に片寄っており、炉石をはずされた痕跡を残す。

遺物（図64の1・76の9）は少なく、浅鉢と砥石の出土をみたのみである。浅鉢は口径38.5

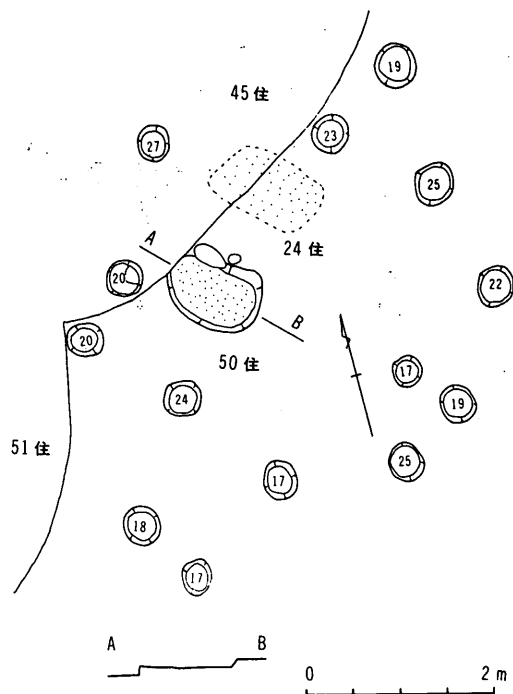


図17 城本屋遺跡24号・50号住居址

cm, 高さ21.3cmの大形であり, 地文の縄文を縦に沈線の波状文で切っている。砥石は砂岩製である。

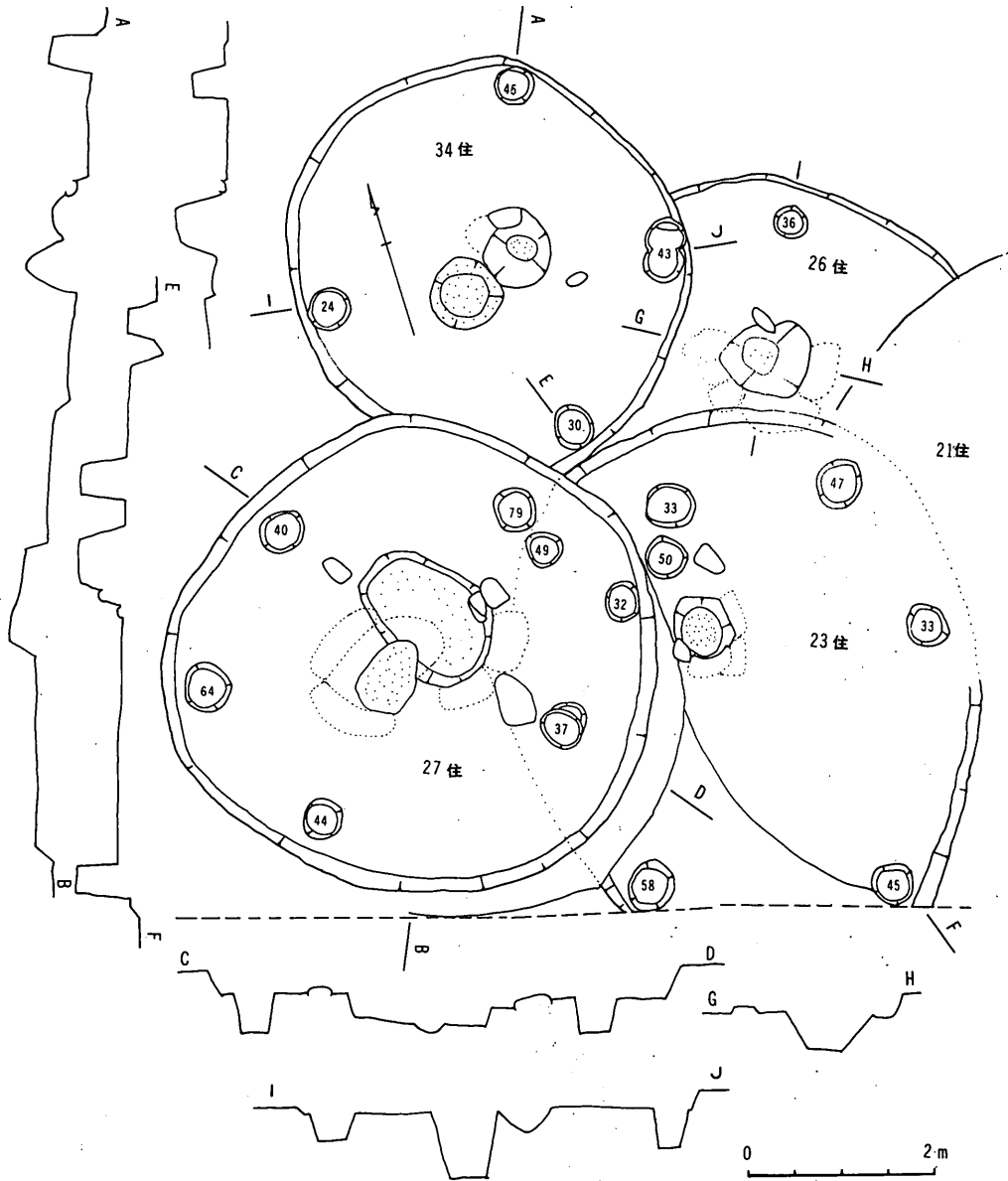


図18 城本屋遺跡23号・26号・27号・34号住居址

27号住居址 (図18)

北に34号・44号・45号, 東に23号, 南に35号住居址を切る状態または重なりあいを示し, さらに下に29号住居址がある。南北5m×東西5.2mの円形, ローム層に20~25cmの深さに掘りこむ竪穴住居址である。床面は張り床となり堅く, 支柱穴は6こ, 炉址は中央より僅かに北によってあり, 炉石のはずされた痕跡を残し, その西側に古い炉址がある。

遺物 (図61の15~38・図62・図76の6)は多く, 床面出土の土器(図61の15~38)には頸部のくびれの強い大形の15-19, 口縁のくびれの少ない小形の20のキャリパー形と, くびれをもたぬ20・25の深鉢と, 16・17の壺形土器がある。文様は結節縄文, 縦の条線, 沈線と綾杉文だけを施すもの, 頸部に篋状具による押し刺突文をめぐらし口縁部は無文となるもの, 口縁部を渦巻文と区画文で飾る等があり, 覆土出土

(図62の1~21)では1の刺突文と渦文で飾る突起をもち、太い隆帯の懸垂文で胴部を飾る深鉢以外は口縁帯文を楕円文つなぎで飾るが共通的にみられる。下伊那地方加曾利E期の新しい要素をもつ土器群である。

石器(図62の22~47・76の6)には打石斧23, 横刃形石器2, 凹石1, 石皿1が出土しており, 打石斧は整った形をなしており, 打石斧の数に比して横刃形石器が少ないことが他住居址出土例からみて注目される。

28号住居址(図16)

II調査区の北端にあり, 西は33号で切られ, 南は25号がのる。東は22号・32号住居址との重なりあいを示す。水田造成によって壁は完全に削られ, 床面も削られている。炉址の発見により, その存在を確かめ, 柱穴は3こ発見され, 円形の竪穴住居址と推定された。炉址は石囲炉で西側には炉石を残し, 他には石のはずされた痕跡を明らかに残している。遺物は発見されていない。

29号住居址(図19)

27号住居址の下20cm~25cmにあり, 27号址は建替えの住居址とみられた。北西の43号, 北の44号, 東の23号, 南の35号, 45号住居址と切りあい, 重なりあいをなしている。南北5.2m×東西5.35mの円形, ローム層に35cm前後掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く, 主柱穴は6こ, 炉址は東西に並んで2こ検出されているが, 東側は一部炉石を残し, また石のはずされた痕跡を残し, 西側のは, 西に石のはずされた痕跡を残している。二者の新旧の区別はつけがたく, 一つは27号址のものとみたが, 測量図でみる限りその位置は異っている。西壁の一部は二重になっており, 建替えが行なわれたか, 別の住居址があったとも予想された。

壁に沿って周溝がめぐらされており, 南側には35号址の炉址がそれを切っており, 北側にも炉址状の掘りこみが壁を切っているのがみられたが何であるかは不明であった。

埋葬(図29)が東側と北側にあり, 前者は伏襲である。従来の発掘例でみると, その位置は変則的であり, 他の住居址の存在も考えられたが, 西壁の二重の壁以外にその存在は認められなかった。

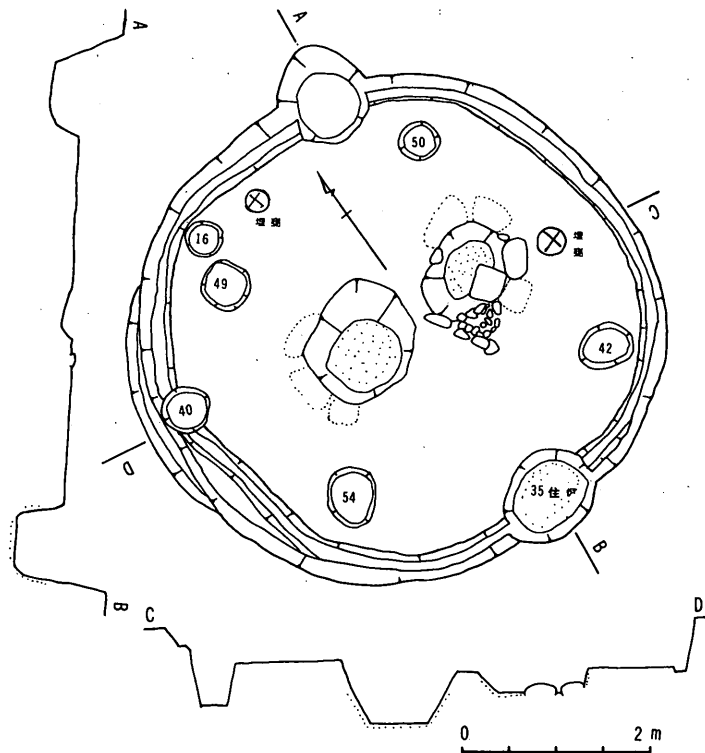


図19 城本屋遺跡29号・35号住居址

遺物（図63・78の17）土器は図63の1・2は埋甕，その他の出土量は少なく，キャリパー形深鉢が主体となり，5は頸部のくびれは強いが，口縁部の開きは小さく，本遺跡では特異な形状をなす土器である。また8は小形土器で，その器形は口縁部を欠いて不明。文様構成は頸部に押引の刺突文をもつ1・5，口縁部に渦巻文をもつ区画文をめぐらす1・3・4，無文の5があり，口縁部の突起部を押引刺突文で飾る6・7があり，胴部は地文の縄文を沈線で区画し，その中を縦の波状文で飾るが一般的で，縄文のみの2，隆帯の区画文で飾る5がある。下伊那地方加曾利E期のやや新しい要素をもつ土器群とみられる。

石器は床面出土では打石斧1，磨石斧1，横刃形石器2，凹石1，繊維をうつとみる敲打器1と石製品の石棒折れ（16）の出土をみており，打石斧の少ないのが注意をひく。覆土出土では打石斧9，横刃形石器4，石錘1，敲打器2，磨石1が出土しており，土製品では土偶胴部（図78の17）の出土をみている。

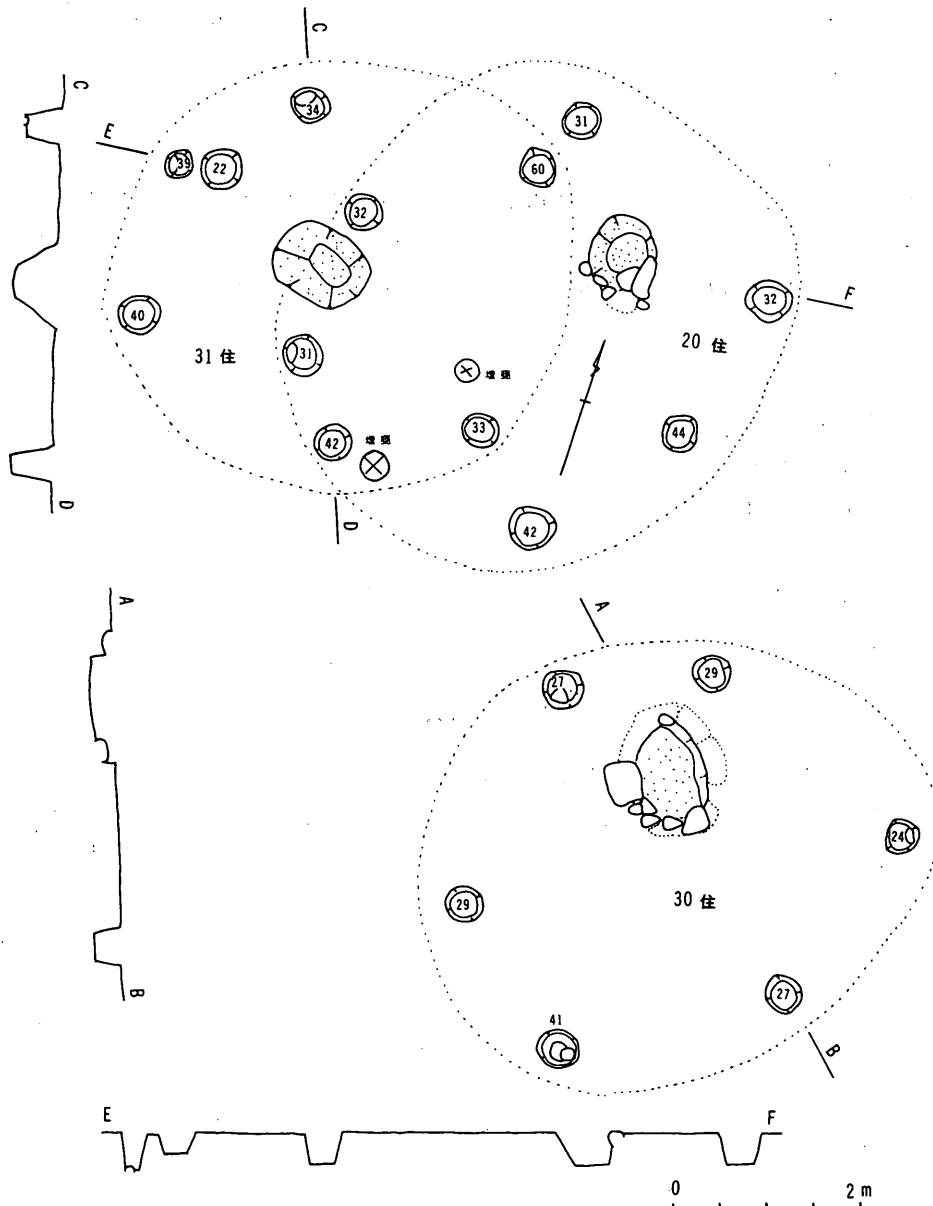


図20 城本屋遺跡20号・30号・31号住居址

30号住居址 (図20)

II調査区の東端部に発見され、西は18号住居址に一部は切られる。水田造成時に削りとられ炉址と柱穴6こを残し、円形の竪穴住居址であったと推定される。炉址は中央より北に片寄っており、炉石を西側に残し、他ははずされた痕跡を残す。遺物(図64の3~6)は小片のみである。

31号住居址 (図20)

東に20号、北から西に32号・22号住居址と重なりあい、壁は削られ、炉址と柱穴を残す。主柱穴は6ことみられ、推定径4.5m×5mの円形竪穴住居址とみる。炉址は中央よりやや西によってあり、掘りこみの炉である。東側に伏襲(図29)が検出された。

遺物は図64の2の伏襲だけである。キャリパー形の深鉢で9この突起で口縁部が飾られる類例の少ないものである。口縁部は穴起部から頸部へと斜めにさがるワラビ手状文が抱く楕円文が並び、内部を斜行沈線で飾る。頸部から胴部は全面に結節縄文が施されており、下伊那地方加曾利E期の一般的にみるものである。

32号住居址 (図16)

20号・22号・31号住居址と重なりあい、水田造成時に壁は完全に削られ、炉址と柱穴を残すのみである。柱穴の配置からみて、主柱穴は6ことみられ、円形の竪穴住居址と推定される。炉址は中央よりやや西によってあり、石囲炉の石は1こを残してはずされ、その痕跡を残す。遺物は小片を僅かにみただけである。

33号住居址 (図21)

II調査区の北西端部にあり、東から南に28号・25号42号住居址に接しあうが独立した住居址である。南北4.8m×東西4.88mの円形、12~15cmの深さにローム層に掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は6こ、炉址は北西に片寄っており、炉石のはずされた痕跡を残す。遺物(図64の7~9, 76の7)は少なく僅かな土器片と石皿1この出土をみたにすぎない。

34号住居址 (図18)

II調査区西側の複雑な住居址の重なりあいにあつて張床をもち、27号住居址が

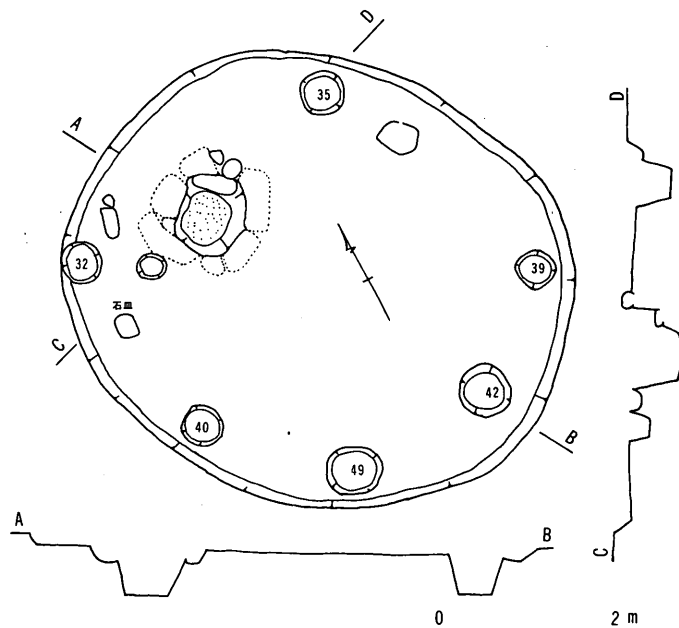


図21 城本屋遺跡33号住居址

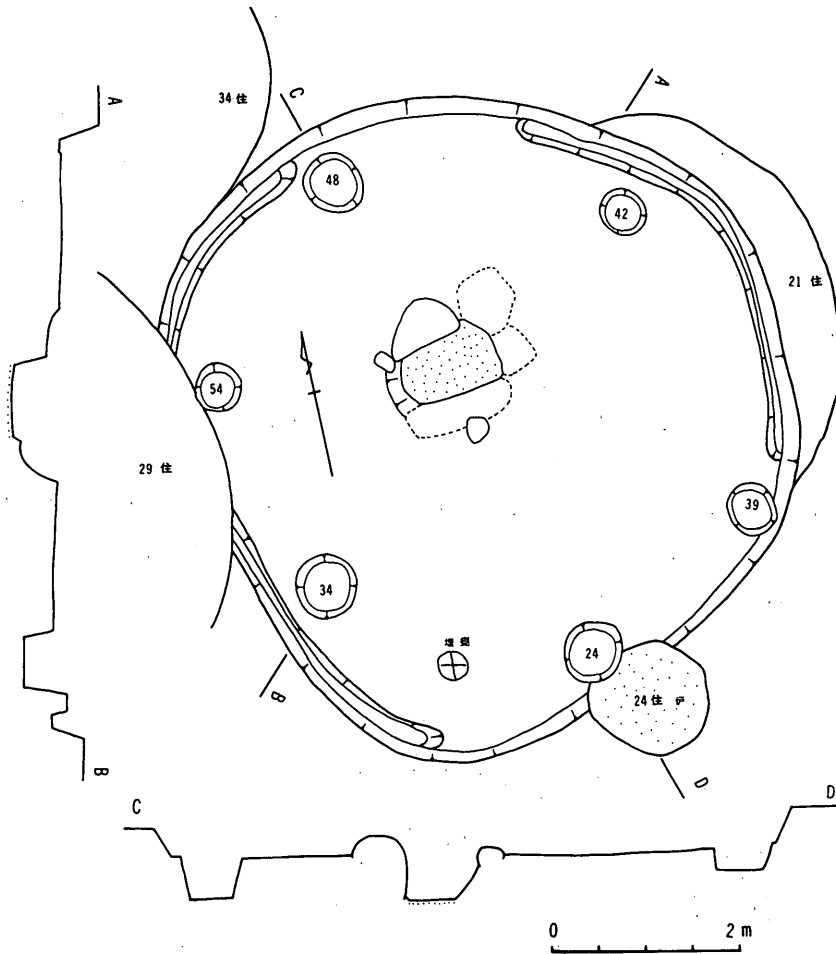


図22 城本屋遺跡36号住居址

南の一部を切っており、下部に25号・41号・42号住居址がある。東西径4.3mの円形、10cm前後ローム層に掘りこむ竪穴住居址である。主柱穴は4こ、新旧2この炉址があり建替えの行われた住居とみられる。遺物（図64の10～18）は少なく、覆土上層出土の平出Ⅲ様式Aの深鉢（10）を除いては小破片のみで下伊那地方加曾利E期の一般的にみるものである。石器は打石斧1の出土をみたにすぎない。10の平出ⅢAの出土は中期中葉の遺構の存在が予想されるものである。

35号住居址（図19）

29号住居址の南壁と周溝にかかって炉址が掘りこまれており、南は水田のため調査不能、二次調査では水田の境界にあり、石垣のため荒らされており、その規模を知ることはできなかった。遺物（図67の1～8）土器は沈線の楕円区画文の内部を綾杉文で飾るものと、地文の縄文に太い隆帯による区画文で飾るものがあり、下伊那地方加曾利E期の新しい要素をもつとみられ、石器には凹石1の出土がある。

36号住居址（図22）

Ⅱ調査区の住居址群の中心部にあり、複雑な切りあい関係を示しており、最下部に発見され、西側は29号住居址に一切を切られている。また東側には21号址がのっている。径6.9mの円形、床面は地山までいって堅く、主柱穴は6こ、壁に沿って、南と北の一部は切れるが周溝がめぐっている。炉址は中央

より北西によってあり、北側に大きな炉石が据えられている。南側に埋襲(図29)が検出された。

遺物(図65の1~10)は少なく、土器では埋襲以外は破片を僅かにみたのみである。1の埋襲は口辺部を欠くが大形の深鉢で、口縁部は四角ぼく、4この耳把手をもち、8分する隆帯の渦巻文で飾り、胴部は縦の条線が施され見事な土器である。2~6は下伊那地方加曾利E期の一般的にみる土器である。石器は打石斧2、磨石斧1、石錘1の出土をみたのみである。

41号・42号・43号住居址(図23)

II調査区の西側に複雑な住居址の重なりあいなす一群である。42号址は西端部にあって、34号・44号址と切りあい。41号は42号を切り、43号がさらに切り、それを27号・29号が切る状態とみるが、下部にある住居址の上に構築されていた住居址もあったとも考えられるが、水田造成時の盛土や削りとりもあって十分な調査はできなかった。

3住居址とも推定径5m前後の円形の竪穴住居址である。42号址には3この炉石がみられ、建替の行なわれたものとみられ、また他住居址の存在も考えられる。いずれも炉石は北または西に寄ってあり、41号・42号炉石は炉石のはずされた痕跡を残している。

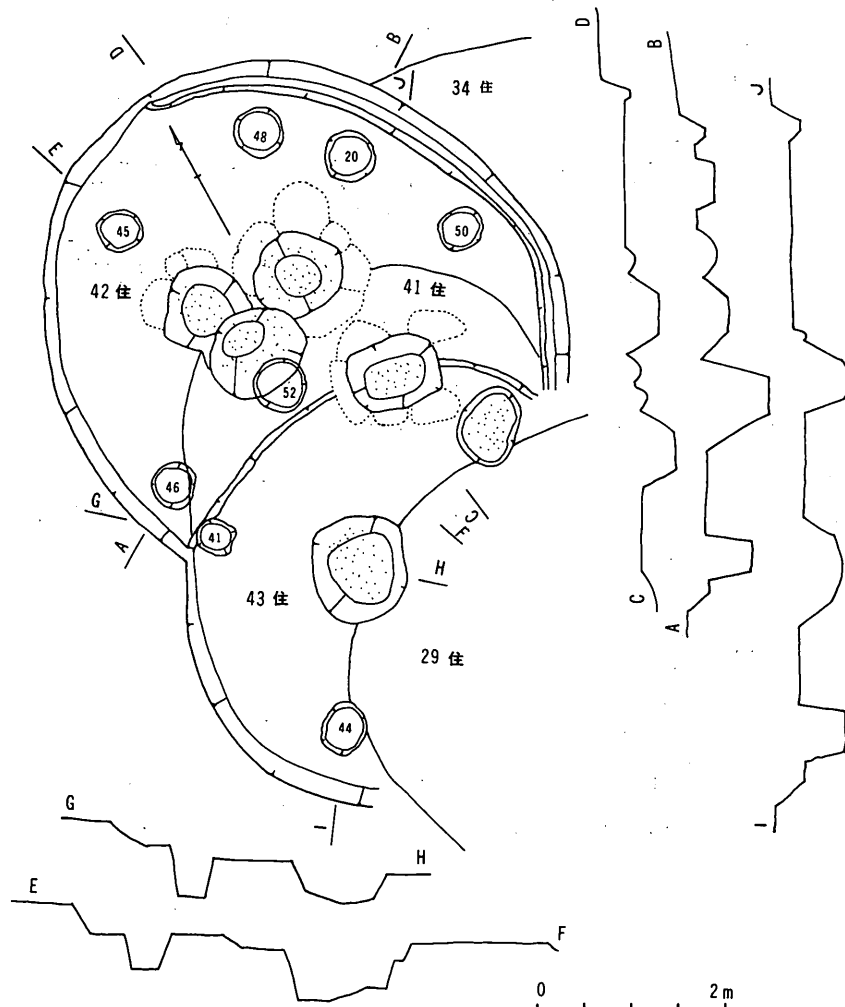


図23 城本屋遺跡41号・42号・43号住居址

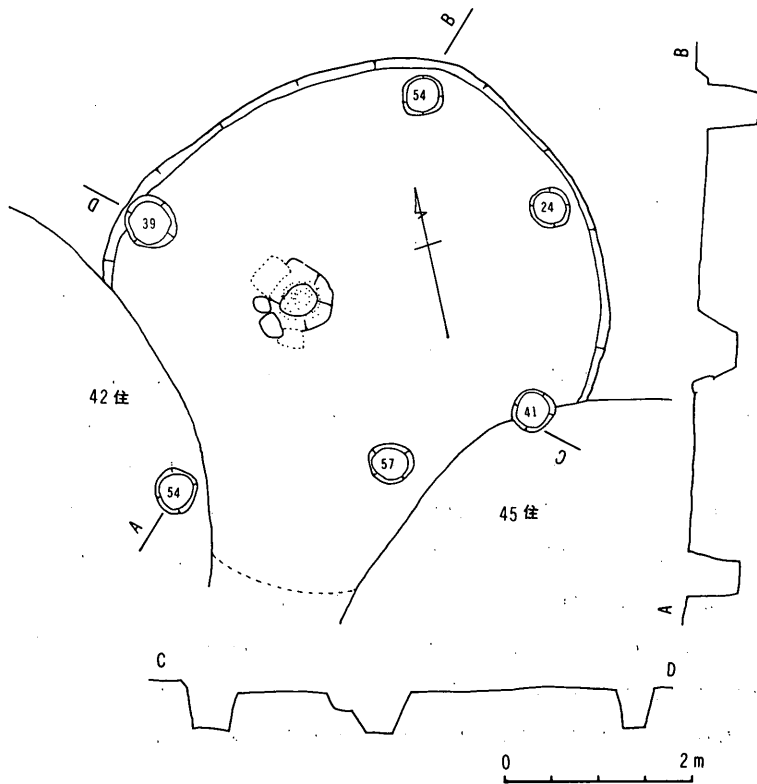


図24 城本屋遺跡44号住居址

遺物(41号…図68の6～18, 42号…図65の11～16, 43号…図68の19～23 土器は41号址を除き小片のみであり, 下伊那地方加曾利E期にみる一般的な新しい土器であり, 41号址にみる口縁部の大きく外反する(10)のキャリパー形深鉢にやや古い要素がみられる他, 3住居址に時間的差はみられない。石器も少なく, 41号では打石斧2, 敲打器1, 42号で打石斧2, 横刃形石器1, 43号で石錘1の出土をみたのみである

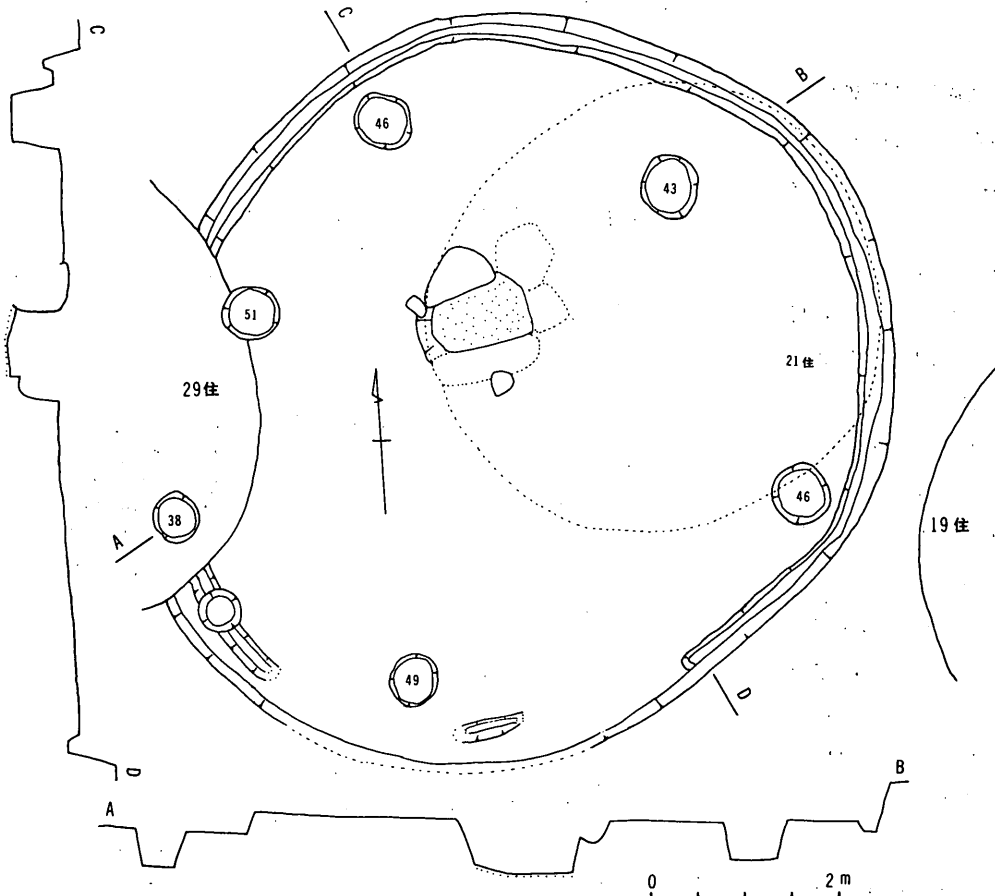


図25 城本屋遺跡45号住居址

44号住居址（図24）

II調査区の住居址群の中央部にあつて複雑な切りあい関係を示している。西と南は42号・45号住居址に切られている。東西径5.3mの円形、ローム層に掘りこまれ床面は地山の礫層にあつて堅い。発見された柱穴よりみて主柱穴は6ことみる。炉址は中央よりやや西によつてあり、本遺跡ではやや小型であり炉石2こと、石のはずされた痕跡を残している。遺物は発見されていない。

45号住居址（図25）

36号住居址の拡張建増とみる住居址で、西は29号住居址に一部が切られ、東側には21号住居址がある36号住居址の柱穴はそのまま使用されたものもあり、炉址はそのまま使用されており、大きな炉石のころがり出されたものは、はずされた跡にぴったりと据わり、さらに炉石のはずされた痕跡もはっきりと検出された。径7.6mの円形、30~40cmローム層に掘りこむ竪穴住居址で、本遺跡最大規模をもつ。床面は堅く主柱穴は配置からみて5ことみられる。炉址は中央より北西によつてあり大形のものである。壁に沿つて周溝がめぐらされているが、南側は水田の境界のため荒らされ部分的に周溝を残している。

遺物（図66）土器は頸部が強くくびれ、口縁部が内湾する（1）、外反した口縁は立つてくの字状に内に折れる（2）のキャリパー形の深鉢があり、口縁帯を隆帯をめぐらして飾るが共通する。3の受口をもつ碗形、4の台付土器の脚部がみられ、下伊那地方加曾利E期のやや新しい要素が含まれてくる土器群とみる。

石器には打石斧、横刃形石器3、敲打器— 繊維をうつ — 1がある。土製品（図78の19・20）に台付土器のミニチュア土器2こがあり、手づくねである。

47号住居址（図26）

IV調査区の北西端に発見され、2分の1は道路のため調査不能。また道路ぎわは46号住居址によつて切られている。東西径4.6mの円形、西壁で25cm、南東壁で12cmローム層に掘りこむ竪穴住居址である。柱穴は3こ発見されているが、その配置からみて主柱穴は6ことみる。炉址は北に片寄つてあるとみられ、発見できなかった。西側に伏襲（図29）が、南東壁近くに土器1個体が床面に検出された。

遺物（図69の1~5）

土器のみで石器の出土は

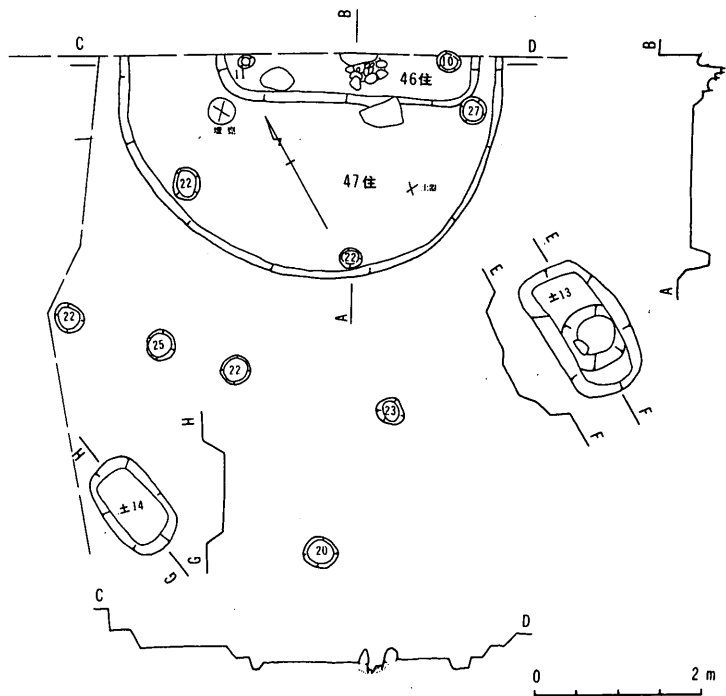


図26 城本屋遺跡46・47号住居址、土坑13号・14号・柱列II

ない。頸部のくびれの少なく、口縁部は内湾する深鉢が主体をなし、1は口縁部は無文、粘土紐の貼布による施文で、頸部は二段の山形文をめぐらし、胴部は縦に2条の直行線と、1条の波状文を組合せ地文の条線を切るもので、本遺構では1例である。2の伏襲は口径41cmの大形深鉢で、口縁帯文は上下に円の押圧文を結ぶ隆帯をはさんで二重の楕円区画文を並べ、頸部は1条の隆帯をめぐらし、胴部は直行沈線の区画を、楕円文とともに荒い綾杉文で飾る。3は隆帯を主体にするものとみられ、4は混入とみられる。下伊那地方の加曾利E期のやや新しい要素をもつものとみたい。

49号住居址 (図27. 28)

V調査区の南にあり、東と南は後の氾濫による砂と泥の堆積層となり、南壁の一部にかかる状態である。西は52号址と接しあい、北は51号址を切る。径4.75mの円形、15~25cmローム層に掘りこむ竪穴住居址である。床面は部分的に堅く、支柱穴は4こ整った配置にある。炉址は北に片寄っており、石囲炉で完全に炉石を残す。住居址の中央部の覆土に集石(図29)があり、廃屋墓とみられ、多くの遺物の出土をみるが、床面出土遺物との差はない。

遺物(図69の6~17・70・71・78の21~23) 土器はキャリパー形の深鉢が主体となり、口縁帯文はワラビ手状渦文を介在して楕円区画文を施し、胴部は地文の縄文を縦の沈線で切るが共通的であり、細い条

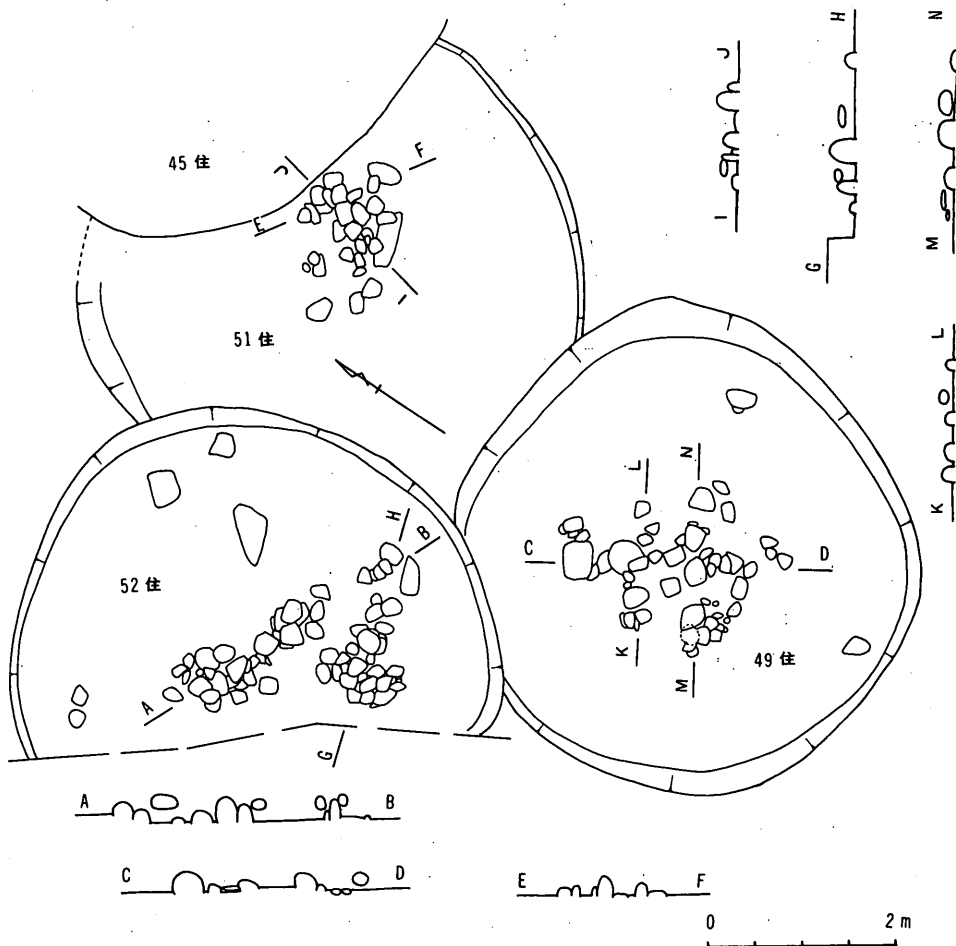
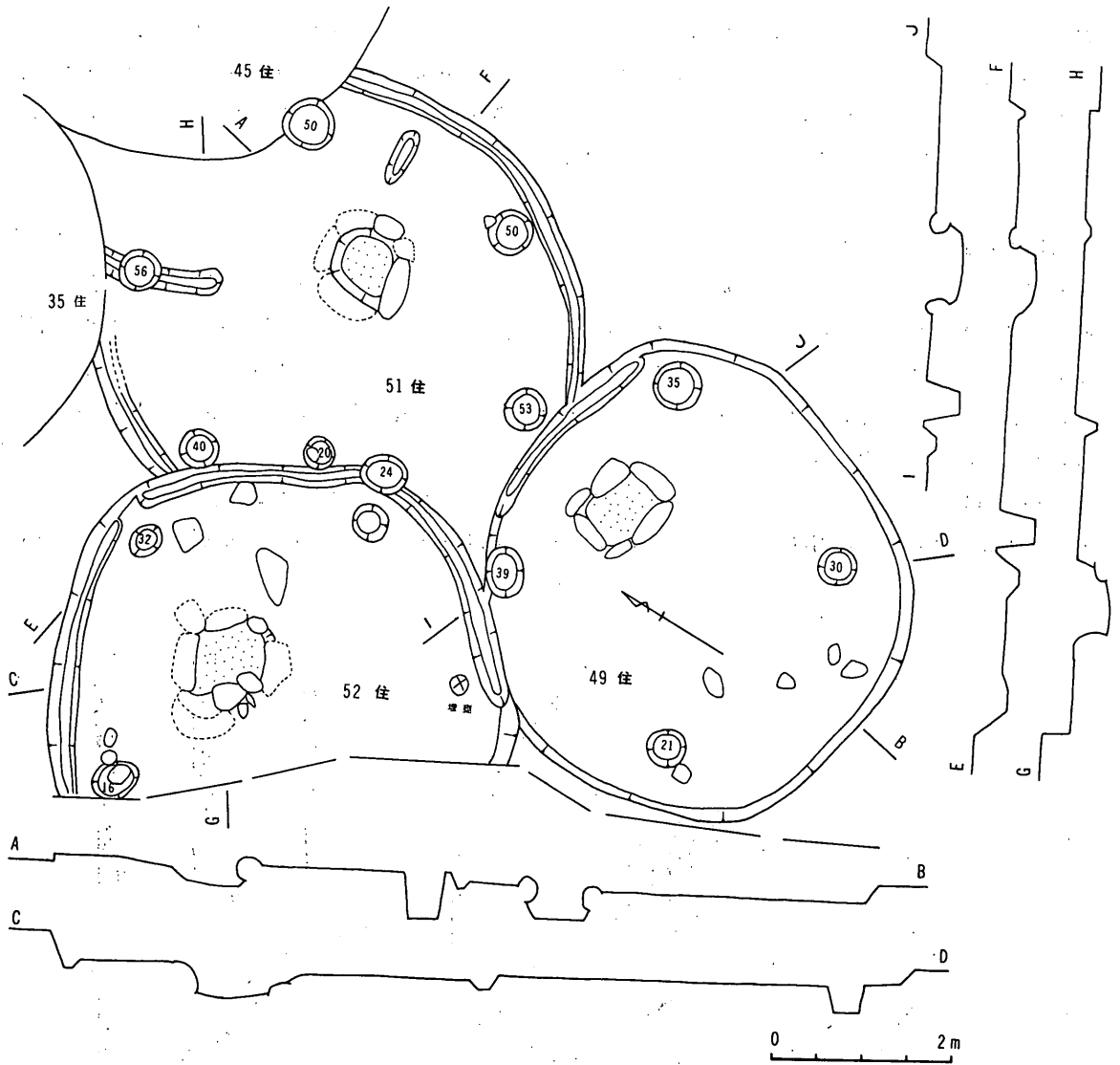


図27 城本屋遺跡49号・51号・52号住居址上層集石



第28 城本屋遺跡49号・51号・52号住居址

線もあり、下伊那地方加曾利E期の一般的にみるものである。台付土器の脚部、器台（図69の16・17）壺、浅鉢、吊手土器の吊手部（図70の4・7・8）がある。上部集石出土の（図70の1）は強く内湾する深鉢の口縁部とみられ、押引刺突文で全面を飾るもので、やや古い要素をもつともみられる。石器は多く床面、炉址より打石斧8、横刃形石器3、敲打器2、凹石1、石鏃3があり、上部集石より打石斧14、横刃形石器5の出土をみている。

50号住居址（図17）

IIとV調査区の間の水田の境にあり、上部は荒らされ、壁は削りとられている。北から西は45号・51号住居址に切れ、東側は砂と泥の堆積層となる。24号住居址との建替えとみられる。主柱穴は6ことみられ、その配置から円形の竖穴住居址と推定される。炉址は西に片寄っており、比較的小形で浅い掘りこみをなし全面に焼土をもつ。

遺物（図68の24～28）遺物は少ないが炉址出土の深鉢（24）がある。頸のくびれの強く、口縁部は大

きく内湾するキャリパー形をなし、口縁帯文は隆帯による区画と内部を篋状具による荒らい条線を施す櫛形文つなぎで飾る。下伊那地方加曾利E期のやや古い要素をもつものである。石器には打石斧1と横刃形石器2がある。

51号住居址 (図27・28)

V調査に発見されたがII調査区にかかり、北は23号・36号・45号、東は50号住居址との重なりあいなし、南と西は49号と52号住居址に切られている。南北径5.4mの円形、ローム層に掘りこむ竪穴住居址であるが、壁高は、上部が削られて不明であるが、西壁の残存部で20cmを測る。床面は堅く、壁に沿って周溝がめぐらされている。主柱穴は6ことみる。45号住居址の周溝が床面に部分的に残っている。炉址は中央より北東によってあり、炉石を2こ残し、はずされた石の痕跡を残す。炉址を中心とした上部に集石(図27)があり廃屋墓とみられた。

遺物(図68の29~40, 78の24)は少なく、土器には29・31の口縁部の内湾するキャリパー形の深鉢、30の頸部のくびれの小さな深鉢、32の壺の口縁部がみられ当地方の加曾利E期の比較的新しい要素をもつとみられる。35は平出III様式Aの破片で混入品である。石器には打石斧2, 横刃形石器1, 石鏃1がある。

52号住居址 (図27・28)

V調査区の南西にあり、南西の4分の1は砂、泥の堆積層に切れ、その堆積が、住居址構築後のものと確認された。北は51号、南は49号住居址を切っている。東西5mのやや四角ばい形状をなし、ローム層に15~20cm掘りこむ竪穴住居址である。床面は部分的に堅く、壁に沿って周溝をめぐらすが北と、南東の一部は切れている。主柱穴は4ことみられ、炉址は中央より北によってあり、石囲炉の石のはずされた痕跡を残している。南側に埋甕(図29)が検出された。覆土に東西方向に並ぶ集石(図27)があり、廃屋墓とみられた。

遺物(図72・73・78の25・26)土器はキャリパー形の深鉢が主体となり、埋甕(図72の2)は底部に縄文を残すのみで肌は荒れはがれている。床面・炉址出

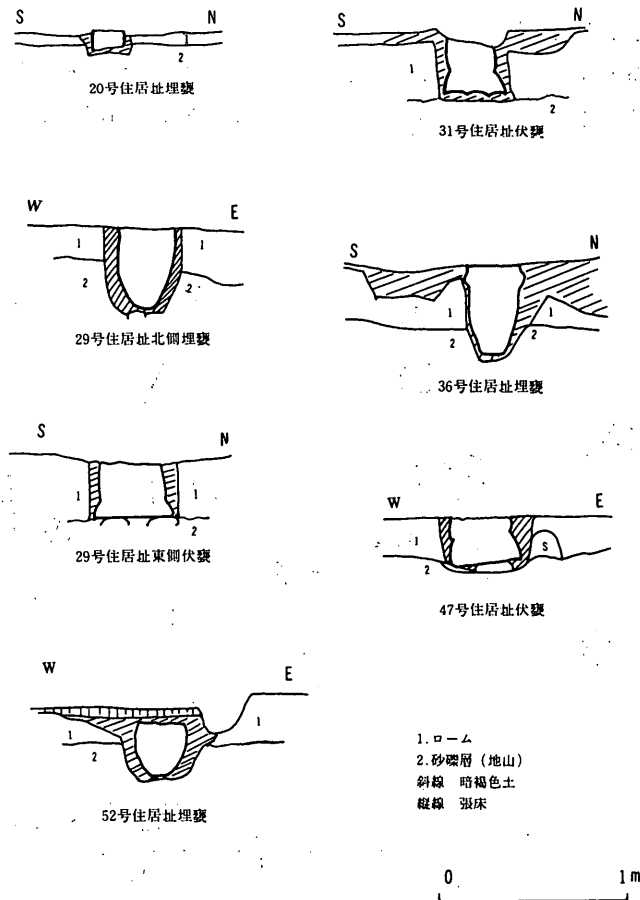


図29 城本屋遺跡埋甕断面図

土（図72の6～9）の土器は波状口縁をもつが多く、粘土紐の隆帯をもつ7・8があり、文様はワラビ手状渦文と条線で飾る区画文が共通する。6は磨滅が多くはっきりしないが古い要素をもつとみられる。覆土及び集石出土の土器は口縁帯文は内部に沈線または刺突文を施す楕円区画文をめぐらす一般的な下伊那地方加曾利E期の新しい土器群とみる。石器は多く、打石斧14、半磨石斧1、横刃形石器4、敲打器1、石錘1、石鏝1があり、土製品に図78の26の土偶脚部の出土をみている。

(2) 縄文後期

25号住居址（図16）

II調査区の北側の水田造成で壁を削られ、炉址と柱穴を検出した住居址群にあり、北に28号、東に22号、南に23号、西に44号、34号があり切りあい関係を示している。炉址の発見により住居址の存在を認めたもので、その規模は不明。円形の竪穴住居址とみる。炉址は北に寄っており、石組の炉址で東側は石のはずされた痕跡を残している。

遺物（図61の11～14）は少なく、後期初頭とみる磨消縄文を沈線できる土器片である。

37号住居址（図30）

III調査区の東から37号、38号、39号住居址が並んでいる。水田造成時に全面は削られ、炉址の発見で住居址を認めたものである。主柱穴は6ことみる楕円形をなく竪穴住居址とみられる。炉址は中央より

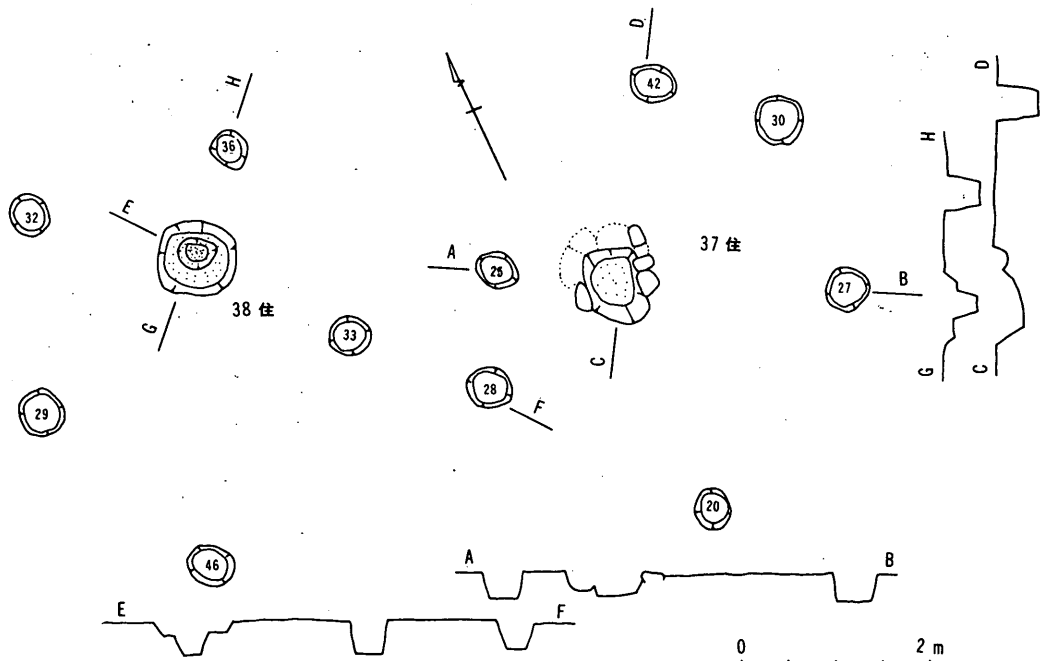


図30 城本屋遺跡37号・38号住居址

西によってあり、石囲炉であったとみられる。

遺物(図61の11~14)は少なく、土器は小片であり、中期終末の要素をもつとみられるが後期初頭とみる。石器では16・17の大形打石斧が出現し、18の小形打石斧、横刃形石器2と磨石1がある。

38号住居址(図30)

東に37号、西に39号住居址があって並ぶ。水田造成時に削られ、炉址と柱穴を残すのみで、はっきりした規模は不明である。支柱穴は5ことみられ、北によって炉址がある。楕円形をなす竪穴住居址とみられる。炉址は二段となる掘りこみで炉石をもった痕跡はない。

遺物(図67の22~31)は少なく、土器は小片のみで中期終末の要素をもつともみられるが、後期初頭である。石器には打石斧1、石棒の折れ1、石錘1がある。

39号住居址(図31)

38号住居址の西にあり、北に40号住居址がある。水田造成時に床面まで削られている。柱穴は6こと検出されているが、配置からみて支柱穴は5ことみる。楕円をなす竪穴住居址と推定される。炉址は中央より北によってあり、約20cm地山へ掘りこむ地床炉である。

遺物(図67の32~39)土器は小片のみで34は中期末のものとみられるが、他は後期初頭の土器とみる。

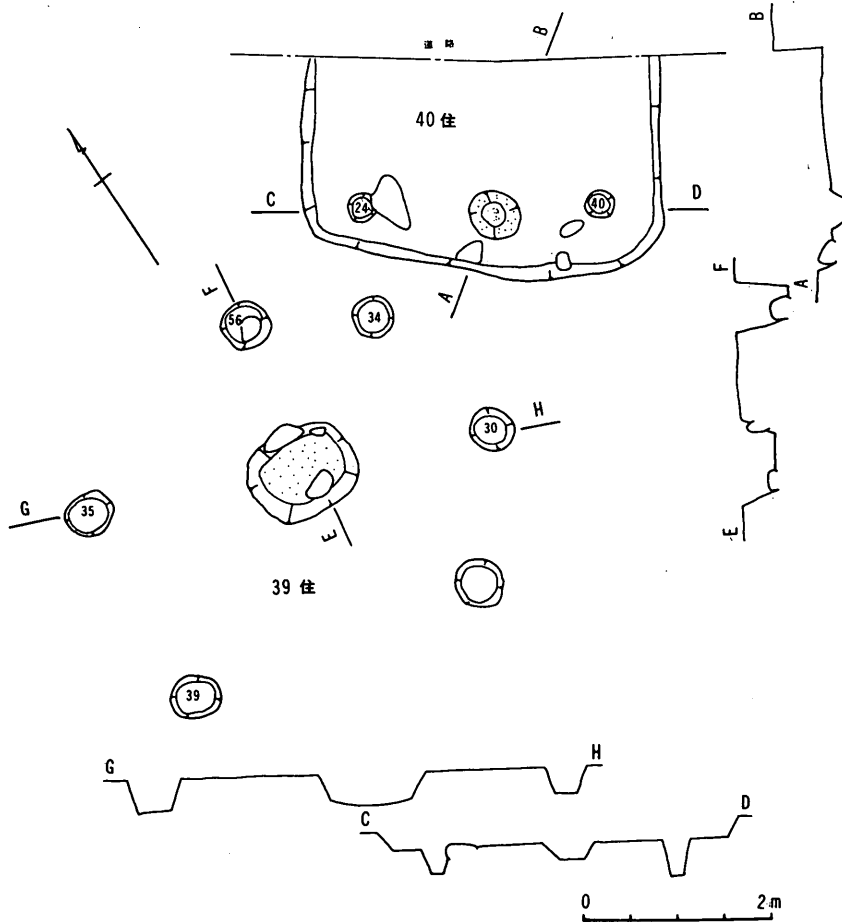


図31 城本屋遺跡39号・40号住居址

石器には打石斧の大形化す36・38があり、その他打石斧1と敲打器1がある。

(3) 弥生時代

40号住居址 (図31)

Ⅲ調査区の北の道路にかかって発見され、2分の1は調査不能。東西3.8mの隅丸方形をなし、深さ20cm前後ローム層に掘りこむ竪穴住居址であり、床面は地山に達し堅い。柱穴は2こ検出されているが主柱穴は4ことみる。南側に柱穴間の中央に地床炉が掘りこまれている。

遺物 (図68の1～5) 土器は2片のみで、磨消縄文を沈線で切る(1)、押引刺突文を施す(2)弥生中期阿島式にみられる壺形の破片である。石器には4・5の大形石鍬と3の打石斧がある。遺物は少なくその時期は断定できないが、住居の形態、大形の石鍬、僅かであるが土器片からみて、阿島式の住居址と考えたい。

46号住居址 (図26)

Ⅳ調査区の北端にあり、47号住居址の中に掘りこまれ、北は道路にかかり、南側の一部調査に終わっている。東西3.2mローム層から地山に達して掘りこむ竪穴住居址である。柱穴は2こ検出され、主柱穴は4ことみる。柱穴間の中央に石組の炉址がある。遺物はなく、時期を決定できないが住居址の形態からみて弥生時代のものといえる。

(4) 平安時代

48号住居址 (図32)

Ⅳ調査区の南側にあり、北に貯蔵穴、西に柱列址Ⅰが並ぶ。2.5m×2.5mの隅丸方形、20cm前後の深さにローム層に掘りこむ竪穴住居址である。主柱穴は竪穴の外の4隅にあり、さらに柱列址Ⅰが西に続き、掘立柱の建造物があったともみられる。東壁の中央部に付いてカマドが

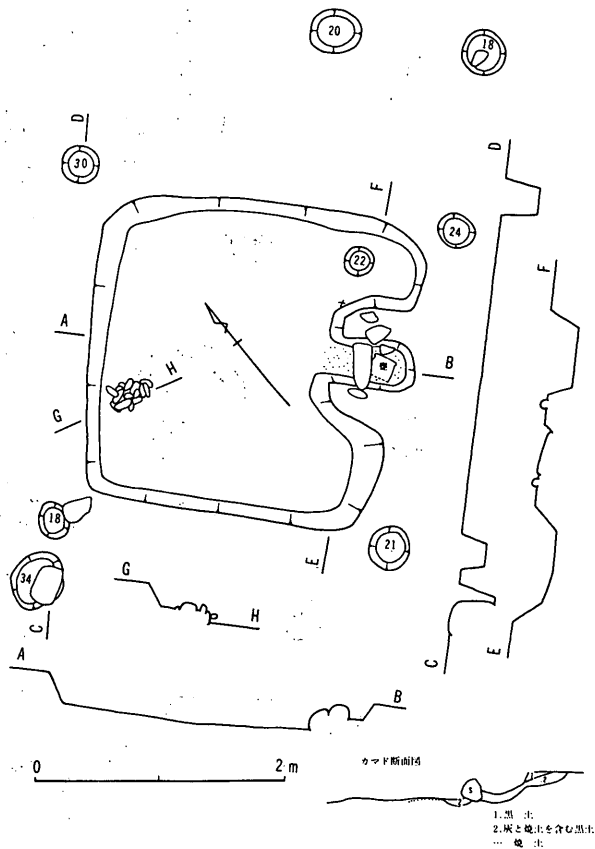


図32 城本屋遺跡48号住居址

ある。粘土カマドで、口石を残し、その内部に土師器の甕1個体が入っていた。カマドの北袖に付いて土師器片があった以外に土器はなく、ただ西壁の中央より南よりに接して菰手石とみられる15この石が—かたまりに置かれていた。

遺物(図74)土師器の国分式の甕形土器のみで、1は完形、口径19.1cm、高さ19.2cm、最大径は胴中央部にあつて頸部はしまつて強く口縁部は外反する。底径8.2cmと大きく安定している。荒らいカキ目を持ち、内面には輪積接合部に指圧痕がつく。2は内面口縁部にも荒い櫛状具によるカキ目をもつ。他の遺物の出土はないが、平安時代前半とみたい。

2. 柱列址

柱列址 I (図33)

48号住居址の西に並び、西は用地外となる。調査範囲では2間×2間の柱列であるが、その間隔は不定、並びも不規則である。48号址に関連するものとみられるが、掘立柱の建物跡とみるには弱い。水田

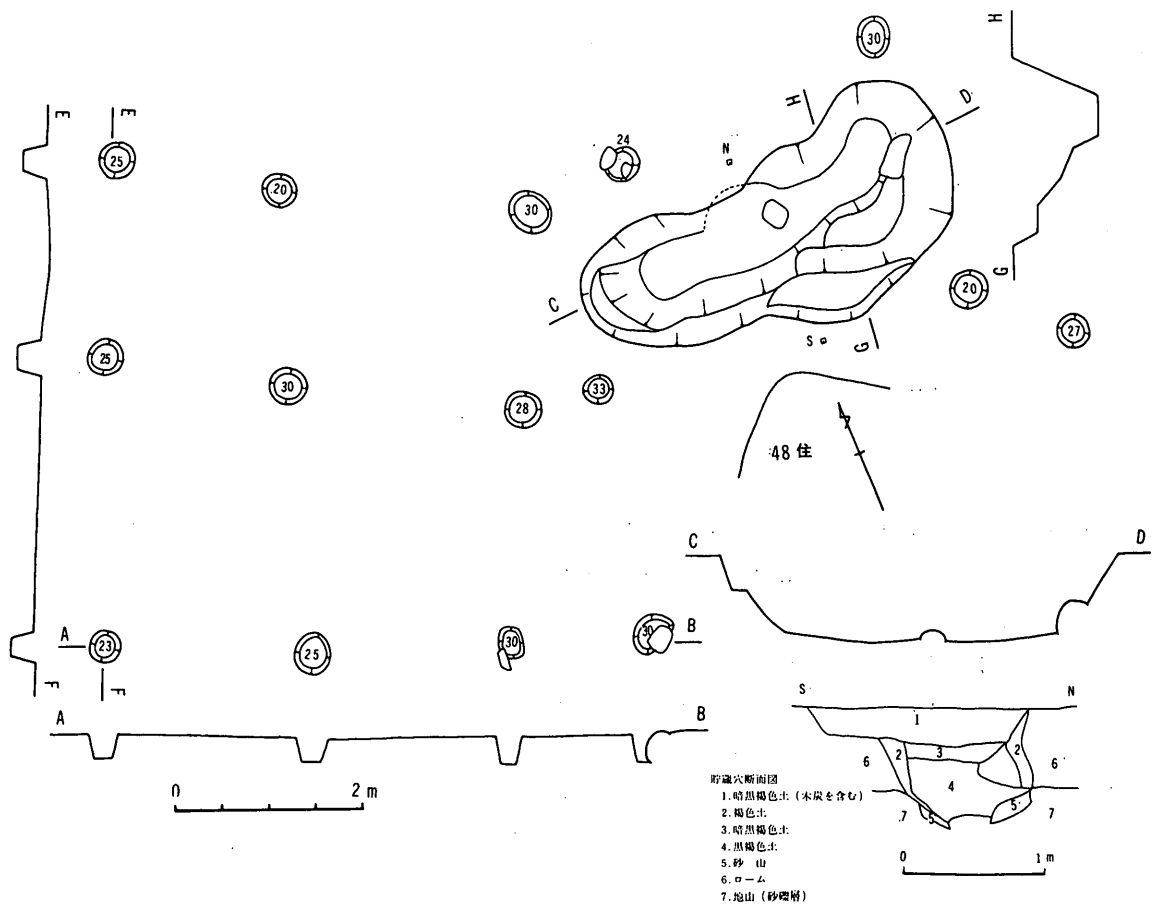


図33 城本屋遺跡柱列址 I, 貯蔵穴

造成時に全面削られており、遺物もない。

柱列址II (図26)

47号住居址の南にあり、西は用地外。中には土壇14号がある。このため北側に東西方向に並ぶ柱穴4と南北方向となる2この柱穴を検出したにすぎない。水田造成時に全面削られており、遺物もなく、その性格は把握できなかった。

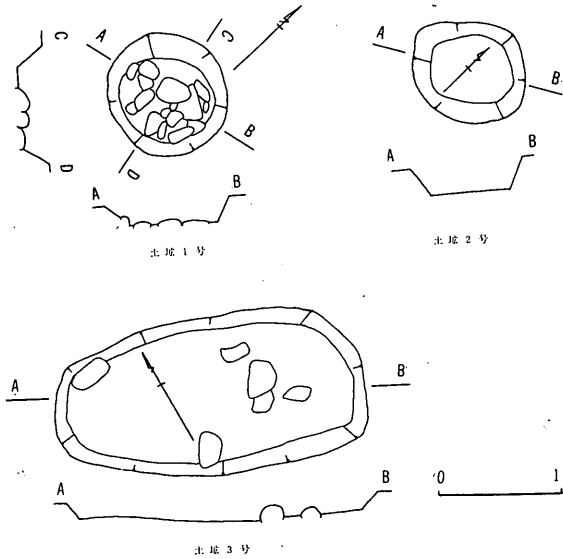
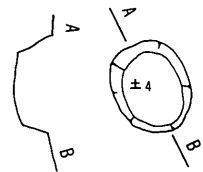


図34 城本屋遺跡土壇1号・2号・3号

Wをさし、東西4.2m、南北最大幅1.95mの不整形な長楕円をなし、ローム層に深さ78cm掘りこむものである。掘りこみの外まわりに柱穴4こがあり、雨覆をしたものとみる。遺物(図75の27~31)は、縄文中期末の土器片の僅かと石錘2こが覆土中より検出されているが、縄文中期末の集落の共同施設とみるか、隣接する平安期の48号住居址に付属するものかについて、その確証を得るにいたらなかった。

3. 貯蔵穴 (図33)

48号住居址の北に隣接し、主軸方向N90°



4. 土壇

1号から14号が調査され、いずれもI・IV調査区にあって分散している。これらを次頁の表にまとめたが、主な遺物については後に記することにした。

土壇出土の主な遺物(図75)には、1号、3号、11号出土の縄文後期初頭の土器がある。1・2の深鉢、3・16の浅鉢があり、堀之内式の土器群と、3号出土の口縁部のくの字形に折り曲り、穿孔をもつ西日本的とみられる一群がある。

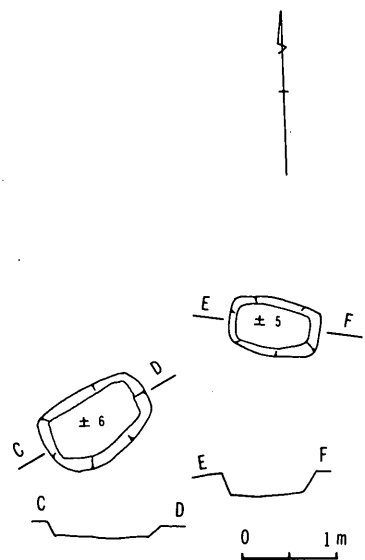


図35 城本屋遺跡土壇4号・5号・6号

城本屋遺跡土坑一覽表 (図2)

土坑 №.	図 №.	大きさ (cm) 南北・東西	深さ (cm)	形状	主軸方向	遺物	備考	時期	遺物図 №.
1	34	87×98	20	円形	N82°W	縄文後期土器片, 打石斧3, 横刃形石器2, 石錘1	内部に石組	縄文後期初頭	75の1~10
2	34	90×80	25	楕円形	N60°E	なし		不明	
3	34	125×245	25	長楕円形	N60°W	縄文後期土器片	内部に6この石	縄文後期初頭	75の11~15
4	35	98×80	42	楕円形	N28°W	縄文中期末土器片1 黒曜石1		縄文中期末?	
5	35	60×96	25	隅丸長方形	N82°W	なし		不明	
6	35	80×120	15	"	N64°E	なし		"	
7	8	110×148	45	楕円形	N75°E	縄文中期末土器片 横刃形石器1		縄文中期末	75の23~26
8	6	96×170	37	"	N80°E	縄文中期末土器片 磨石斧片1		"	
9	6	78×112	35	"	N60°E	縄文中期末土器片		"	
10	6	90×136	36	"	N80°W	縄文中期末土器片		"	
11	7	95×152	35	"	N80°W	縄文後期初頭浅鉢1, 土器片, 打石斧1, 磨石斧1, 横刃形石器2, 石匕1, 石鏃2		縄文後期初頭	75の16~22 78の27~29
12	36	90×150	36	長楕円形	N84°E	縄文中期末土器片3		縄文中期末	
13	26	160×98	37	隅丸長方形	N0°W	縄文中期末土器片数点	内部は2段になる	"	
14	26	120×73	22	"	N8°W	縄文中期末土器片1 打石斧折1		"	

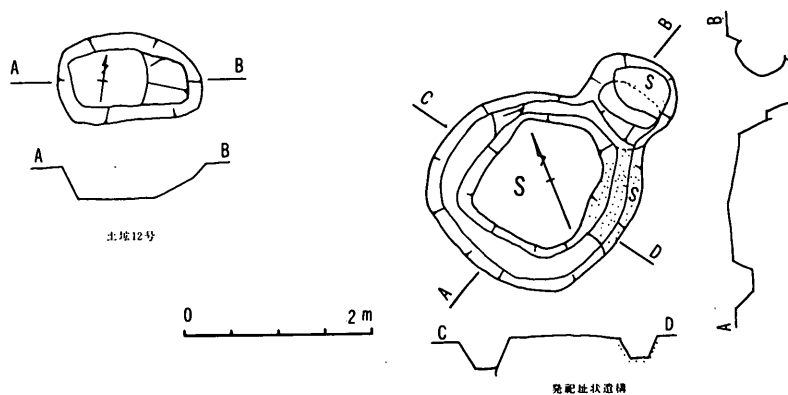


図36 城本屋遺跡土坑12号, 祭祀址状遺構

5. 祭祀址的遺構

Ⅳ調査区の南東側にあり、48号址の東4.5 m、33号址の北7 mにあり、平安期の遺構を除いては離れた独立した位置にある。1.34 m×1.14 mの隅丸方形の平らな面をもつ大石を囲んで、その周囲に幅40～50 cm、深さ20～300 cmのローム層から地山の砂礫層にまで掘りこむ溝をめぐらしている。東側の溝は大石を削って溝にしており、そこに火の焚れた痕跡がみられる。北東側に突出して、径100 cmの円形の穴が掘りこまれ、北側には石が1こある。長軸で2.86 m、主軸主向N60°Eを測る。遺物は周溝覆土より図75の32の無文の縄文後期初頭とみる土器片と中期末の小片が数点みられたにすぎない。

平らな大きな自然石のまわりに周溝を、しかも形状を整えるためかその石の一部を穿って溝にし、そこに焚火がなされたこと、縄文中期末、また後期初頭の集落のほぼ中央部とみられ、周辺に遺構をもたない広場的な位置にあることからみて、ここで祭祀的な行事が行なわれた場と考えたいが、その確証はもてない。

Ⅳ 城本屋遺跡縄文中期末葉の 集落と土器・石器の様相

Ⅰ. 集 落

埴原城本屋遺跡における縄文中期末葉 — 加曾利E期における集落のあり方は、住居址の複雑な切りあい、重なりあいを示している。表3でみると新旧の差、建替、建増等の関係を知ることができる。

集落の形態については、南西から南東にかけて、砂、泥の堆積層に切られて不明であり、東側の水田は用地外のため調査不能であったが、多くの土器片が表採されており、北側の宅地での新築家屋の基礎工事では、工事のため破壊されていたが、住居址の存在が確かめられた。また、かつて北に向う道路拡張の際に土器片の多くと石皿が発見され、住居址の存在が推定された。(図3参照)

I調査区の北2分の1からIV調査区の北西にある47号住居址を除いた範囲からIII調査区にかけて縄文中期末葉の住居址は発見されていない。発掘調査住居址の配置、未調査地域の状態から推察すると、縄文中期末の集落は城本屋台地上に環状に展開されたものとみられる。住居址群にとり囲まれた内側の広場とみる中央部に祭祀址的遺構が発見されており、集落の行事の場であったとも予想されるものであるが、その確証は何も得られていない。土坑は僅かに散在的にみられたにすぎないが、他の遺跡例⁽¹⁾にみるように集落のある位置を占めて群として存在したものと考えられる。

埴原台地上の調査は1970年度農業改良事業⁽²⁾に伴う農道開設用地内で中原地籍では弥生後期の方形周溝墓2基、十万山西裾地籍で縄文中期井戸尻Ⅲ式に比定される住居址2、弥生後期住居址1、弥生中期(阿島式)土坑1と、中原から南原の広範な道路用地内より土坑7を発掘調査し、1972年の現喬木第一小学校建設用地内調査⁽³⁾では弥生後期方形周溝墓5基と、同時期ともみられる住居址1を調査しているが縄文中期末葉の遺構は発見されていない。また、本次調査において城本屋遺跡より東の広範な農業構造改善事業区域の工事中のパトロール結果においても同時期の遺構・遺物の発見はなかった。

以上の調査からみて埴原段丘面に縄文中期末の集落は分散していたものでなく、城本屋地籍に集中して構成されていたものといえよう。

飯田下伊那地域における調査例をみると、飯田市駄科地区では4遺跡の調査で段丘面の北にある北平遺跡のみで、また飯田市桐林地区では5遺跡⁽⁴⁾の調査で前ノ原のみで縄文中期末の集落を発掘しており、他遺跡での同時期の遺構は発見されていない。豊丘村田村原遺跡では畑灌排水工事の際の段丘面全面にわたるパトロール調査結果⁽⁵⁾では段丘の南東面にこの期の遺構は集中して発見されている。

天竜川沿岸の広い面積をもつ4河岸段丘面の調査であるが、縄文中期末葉の集落は、同一段丘面に複数の存在はなく、一地区に集中して構成されていたものと推定される。採集経済に基礎をおく縄文文化において、特に下伊那地方の中期末葉の遺跡数の急増、規模の拡大 — 人口の急激な増加をみた時期においては、集落を支える採集範囲の確立 — ナワバリの社会的制約が集落間の行動範囲を規定し、この社会構造が集落立地を決める大きな条件になったものと受けとめられる。

- 注1 長野県中央埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 下伊那郡高森町地内その2 昭47
 2 大沢和夫・佐藤「埴牛原」 喬木村教育委 1971
 3 佐藤「埴牛原・南原遺跡」 " 1973
 4 大沢和夫・佐藤「安宅・大島」 飯田建設事務所 1969
 遮那藤麻呂「宮城遺跡」-小池・宮城・神送塚 飯田教委 1974
 佐藤「駄科北平遺跡」 飯田市教委 1976
 5 大沢和夫・遮那藤麻呂・佐藤「内山・花ノ木発掘調査報告書」 飯田教委 昭43
 佐藤「小池遺跡」小池・宮城・神送塚 " 1974
 佐藤他「前ノ原・塚原」 " 1975
 6 今村正次「田村原遺跡パトロール概報」 豊丘村教委 1976

城本屋遺跡縄文中期末葉住居址切りあい関係一覧表(表3)

単独	切る	る	切られる	重なりあい(不明)	上の
III 1住 2重円	III~IV 2住(8・5住)楕	III 4住(3住) 円?	III 4住(3住)		
	III~IV 3住(4住) 円	III 5住(2住) 円?	III 5住(2住)		
	III~IV 7住(9・6住) 円, 周溝	III 6住(7住) ?	III 6住(7住)		
	III~IV 15住(16住) 円?	III 8住(2住) 円・周溝	III~IV 8住(2住)	IV 10住(4住) 円?	
III~IV 17住 円?	III新 18住(19住) 円	III 9住(7住) 円?	III~IV 9住(7住)	III 11住(12住) 円?	
	III新 19住(18住) 方, 周溝	III 13住(14住) 円?	? 13住(14住)	III 12住(11住) 円?	
	IV 27住(23・34・35・43住) 円	III 16住(15住) 円?	III 16住(15住)	IV 14住(15住) 楕?	
	III~IV 29住(23・36・41・43・44住) 円・周溝・埋方	III 18住(19住) 円	III新 18住(19住)	III 20住(31・32住) 円?	
	III 34住(26住) 円	III 20住(18住) 円?	III 20住(18住)	? 22住(32住) 円?	
	III~IV 36住, 45住 (21・44・50?・51?住)	III 22住(23住) 円?	? 22住(23住)	III 24住(45住)	
	III~IV 41住(42・44住)	III 24住(45・51住) ?	III 24住(45・51住)	IV 21住(45・36住) 円	
	III~IV 43住(41・42・34住)	III 26住(23・34住) 円?	III 26住(23・34住)	IV 23住(27住) 25住(後期)・(44・34住) 円?	
	III 49住(51住) 楕, 一部周溝	III 28住(33住) 円?	? 28住(33住)	IV 27住(29住)	
III~IV 47住(46住) 7七埋方 円?	III 34住(26住) 円	III 30住(18住) 円?	III 30住(18住)	III 31住(20・22・32住) 7七埋方, 円?	
	III~IV 36住, 45住 (21・44・50?・51?住)	III 34住(27住) 円	III 34住(27住)	? 32住(22・28住) 円?	
	III~IV 41住(42・44住)	III 36住(27・29住) 円, 周溝, 埋方	III 36住(27・29住) 円, 周溝, 埋方	IV 34住(42住)	
	III~IV 43住(41・42・34住)	III~IV 41住(43・29住) 円?	III~IV 41住(43・29住)	IV 35住(29住)?	
	III 49住(51住) 楕, 一部周溝	III~IV 42住(41住) 円?	III~IV 42住(41住)		
	III 49住(51住) 楕, 一部周溝	III~IV 43住(27住) 円?	III~IV 43住(27住)		
	III 49住(51住) 楕, 一部周溝	? 44住(41・45住) 円?	? 44住(41・45住)		
	III 49住(51住) 楕, 一部周溝	III~IV 45住(52住) 楕	III~IV 45住(52住)		
	III~IV 52住(51・49住) 方形・周溝	III 49住(52住) 楕	III 49住(52住)		
	III~IV 52住(51・49住) 方形・周溝	III~IV 50住(45・51住) ?	III~IV 50住(45・51住)		
	III~IV 52住(51・49住) 方形・周溝	III~IV 51住(52・49住) 円, 周溝	III~IV 51住(52・49住)		

2. 縄文中期末葉の土器

城本屋遺跡出土の縄文中期文の土器は全体的にみると加曽利E期後半から終末期にいたる新しい要素をもつが主体となる。下伊那地方の加曽利E期の土器についての編年は確立されていないが、本遺跡の住居址の切り合い関係から、一応Ⅰ～Ⅳ期に分類を試みた。これは諏訪地方の編年Ⅰ～Ⅴの分類を尺度としているが、土器の様相は異質である。中期中葉末の伝統を強く残すものをⅠ期とみたが、本遺跡ではない。Ⅱに50号住居址の頸部のくびれの強いキャリパー形の深鉢（図68の20）がある。口縁帯文は隆帯による楕形区画文、胴部は地文の縄文を切る懸垂文で飾るもので本遺跡では住居址の切り合い関係からみて古いタイプを代表するものである。

Ⅲは下伊那地方の加曽利E期の一般的にみる土器で、キャリパー形の深鉢が主体となり、口縁帯文は渦巻文つなぎ、ワラビ手状文を介して楕円区画文をもち、頸部に押引突刺文をめぐらすが多く、胴部は地文の縄文を切って縦の沈線、または長楕円文を施すが共通的にみられ、次いで口縁帯文が楕円文つなぎとなり、胴部は縦の沈線で切る区画を綾杉文で、また隆帯の区画文の内部の縄文の地文に波状の懸垂文を下す文様が盛行してくる。

Ⅳ期になると深鉢は小型化し、頸部のくびれは弱く、口縁部の開きも少なくなり、頸部のくびれをもたぬ小形深鉢が多くなる傾向を示し、文様の退化がめだつ。口辺部を肥厚させ、縦の条線文、縦に切る沈線区画にハの字状文を施すが主体となり、また縄文のみの図61の15例があり、無文土器はみられない。縄文後期初頭にみる要素をもつ土器も出現している。

3. 石 器

石器の出土量は多く、各遺構出土石器を石器一覧表(表4)にまとめた。縄文中期末葉の石器は住居址による出土量、器種の差は大きくみられる。水田造成時に削りとられ、僅かに炉址、ピット内に残ったものもみられるが、それは別として、土器出土量とはほぼ比例して出土をみている。これは住居址の建替え、建増し等による移動を示すものとみられる。

本遺跡で最多量の出土をみた2号住居址の床面出土は、打石斧32、磨石斧4、横刃形石器11、大形打石斧1、敲打器4、台石1、石皿5、磨石4、砥石1、凹石1、石錐1、剥片石器2、石錘3、石鏃5と海浜石1がある。特殊な出土量であり、これらの他覆土出土量も多い。中期末の石器の器種とそのあり方を示すものとして注目されるが、石皿が床面より5こ、床上10cmより4こ、計9この出土量は異例である。

ほぼ住居址の形態を残すものでは33号住居址（土器小片と石皿1この出土のみ）例を除いては、打石斧20こ前後とその約3分の1の横刃形石器が次ぎ、これが主体となって、他の器種のいくつかを欠くものもあるが、石器の機能からみて大きな差をもつとはみられない。磨石斧出土は11住居址で20こであるが多くは刃部を欠くことが注目される。

狩猟、漁撈具とみる石鏃・石錘の量は少なく、石鏃は10住居址で19こ、石錘は14住居址で23こである。

遺構	図番号	№	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考	遺構	図番号	№	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考	遺構	図番号	№	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考						
16住	56	23	横	硬	5.5	7.5	42	床	24住	59	31	打	粘板岩	10.0	4.0	75		29住	63	21	横	硬	5.5	8.0	66	覆土						
		24	"	"	5.5	6.0	42	"			78	16	石鉢	黒	1.8	1.2					63	22	横	緑	9.0	2.0	65	覆土				
		25	"	"	6.0	8.0	72	"			60	26	打	硬	16.5	4.5	176			ヒソット	63	23	横	硬	7.5	4.5	240	覆土				
		26	石 錘	"	7.0	6.0	120	"				27	"	"	11.5	3.5	92			"		24	"	"	5.5	9.5	70	"				
		27	横	緑	4.0	9.5	38	"				28	"	"	11.5	3.5	61			"		25	磨石	花	4.0	9.0		覆土				
		28	"	"	4.0	11.5	60	"				29	磨石斧	粘板岩	11.0	3.5	96			"		26	打	硬	12.5	4.5	136	覆土				
		29	"	"	5.0	10.0	"	"				30	打	緑	9.5	3.5	60			床		27	"	"	13.5	3.5	130	"				
		30	"	"	5.0	10.0	76	"				31	"	"	10.0	4.0	96			"		28	"	"	10.0	4.0	66	"				
		31	磨石斧	輝	18.0	10.0	"	"				32	"	"	9.5	4.0	70			"		29	"	緑	11.0	4.5	105	"				
		32	鼓	"	18.0	6.0	"	"				33	"	"	12.0	7.0	288			"		30	"	"	10.0	4.0	102	"				
		33	"	"	14.5	4.0	835	"				34	横	硬	5.0	11.0	80			"		32	鼓	"	11.5	5.5	382	"				
		34	石 錘	硬	3.5	4.0	24	"				61	1	磨石斧	輝	21.0	8.0			1500	"		32	打	硬	4.5	10.0	49	"			
		35	凹石	花	8.0	4.5	"	"				2	打	硬	11.0	3.5	100			"		33	鼓	緑	9.0	2.0	20	"				
		36	"	"	4.5	8.5	"	"				3	"	緑	11.0	4.5	109			"		33	石 錘	緑	4.5	3.5	30	"				
		37	磨石	硬	8.0	8.5	"	"				4	"	"	11.0	3.5	81			"		34住	64	18	打	硬	10.5	3.5	54	"		
		11住	57	9	打	硬	9.5	5.5			126	折	78	61	5	"	"			10.0	3.5	50	"	26住	76	9	砥石	砂岩	22.5	14.5		床
				10	"	"	10.5	7.0			240	"			6	磨石斧	"			8.0	3.3	46	"			37住	76		石 皿	花	34.0	30.0
11	"			"	10.0	4.5	80	"	7	横	硬	7.5			11.0	195	"	42住	65	14	打	緑	14.5			4.5	160					
12	"			片麻岩	9.5	3.0	55	"	8	"	"	6.5			11.0	96	"		15	"	"	12.5	3.5			122						
13	"			緑	10.5	3.5	70	"	9	"	"	4.5			9.0	55	"		16	横	"	6.0	8.5			90						
14	"			"	10.0	4.0	85	"	10	凹石	花	7.0			9.0		風化	36住	65	7	打	緑	10.5			3.5	65					
15	横			硬	5.0	7.5	52	"	15	石鉢	黒	2.3			1.4		すすむ	8	"	"	8.5	4.5	44									
16	"			"	6.0	6.5	64	"	26住	76	9	砥石			砂岩	22.5	14.5		床	9	磨石斧	輝	16.5			6.0	950					
17	"			緑	5.5	8.0	56	"	27住	62	22	打			硬	10.5	4.5	71	床	10	石 錘	硬	6.5			5.5	95					
18	石 匕			硬	4.0	9.6	46	"	23	"	"	9.5			4.5	78	"	35住	67	8	凹石	"	6.5			11.5						
19	撻器			黒曜石	5.0	2.0	10	"	24	"	"	11.0			3.5	61	"	37住	67	16	打	硬	16.0			7.0	315					
20	石 錘			硬	5.0	5.0	46	"	25	"	"	10.0			3.5	73	"		17	"	"	11.0	9.0			350	折					
17住	57	27	打	緑	10.0	4.0	135		26	"	緑	12.0	3.5	90	"		18	"	片麻岩	11.0	4.0	120										
		28	石 錘	"	6.0	5.0	65		27	"	"	12.0	4.0	70	"		19	磨石	硬	6.5	4.8	175										
18住	57	37	"	硬	4.0	3.0	18		28	"	"	11.0	3.5	70	"		20	横	"	5.0	8.0	70										
									29	"	"	10.5	4.0	93	"		21	"	"	6.0	10.0	100										
19住	58	27	打	硬	9.5	4.0	64	床	30	"	"	11.5	3.5	52	"		38住	67	29	打	緑	13.0	4.0	165								
		28	"	"	11.5	3.5	85	"	31	"	"	10.0	4.5	57	"		30	石 棒	花	11.0	9.0	315	折									
		29	"	緑	13.0	3.3	100	"	32	"	"	8.5	3.5	65	"		31	石 錘	硬	4.5	7.0	90										
		30	"	"	11.3	5.0	73	"	33	"	"	9.0	4.0	45	"	39住	67	36	打	硬	10.0	7.5	190	折								
		31	"	"	10.0	4.0	92	"	34	横	"	5.0	8.5	52	"		37	"	緑	9.0	4.0	65										
		32	"	"	10.5	3.0	62	"	35	"	硬	6.5	8.5	130	"		38	"	硬	14.0	6.0	242										
		33	"	"	10.0	3.0	115	折	36	打	"	10.5	3.5	50	覆土	39	鼓	"	19.0	4.5	770											
		34	"	"	8.5	3.5	58	"	37	"	"	10.0	4.0	65	"	40住	68	3	打	硬	11.5	5.0	200	覆土								
		35	"	"	8.0	3.5	38	"	38	"	"	12.0	5.0	12.5	"		4	"	"	19.0	10.5	800	"									
		36	横	"	3.0	10.5	61	"	39	"	緑	10.0	3.5	125	"		5	"	砂岩	17.0	9.5	1150	"									
		37	"	"	5.5	10.0	81	"	40	"	"	10.5	4.5	76	"		16	打	緑	9.5	4.0	62	床									
		38	"	硬	3.0	9.0	29	覆土	41	"	"	10.5	4.0	90	"		17	"	"	11.8	4.5	13.5	"									
		39	磨石斧	緑	14.0	5.0	360	覆土	42	"	"	10.5	4.0	63	"		18	"	砂岩	12.5	3.5	310	折									
40	石 錘	硬	7.5	4.5	79	"	43	"	"	11.0	4.5	90	"	43住	68	23	石 錘	硬	2.0	2.8	11											
41	磨石	花	11.5	8.0	"	"	44	"	"	10.5	4.0	86	"	50住	68	26	横	硬	6.5	9.0	70	炉										
42	磨石	緑	4.5	6.0	120	"	45	"	"	9.5	2.5	28	"		27	"	"	6.0	7.5	53	"											
43	不明	黒	7.5	1.2	"	上層	46	"	"	8.5	4.0	49	"		28	打	緑	12.0	3.8	87	"											
44	石 鉢	黒	2.3	1.3	"	"	47	凹石	花	6.5	4.0	49	"	51住	68	38	打	粘板岩	11.0	2.7	45											
20住	59	7	横	硬	9.5	12.5	250		76	63	10	打	緑	10.5	3.5	96	覆土	29住	63	1	横	硬	5.5	7.0	45	火入れ						
		5	打	緑	11.0	3.0	70				11	横	硬	5.5	7.0	45	火入れ															
21住	59	17	横	硬	6.0	7.5	82	折	76	63	11	打	硬	5.5	7.0	45	火入れ	45住	66	12	打	緑	9.5	3.5	75	床・炉						
		18	磨石斧	緑	7.5	6.0	210	風化			12	"	緑	4.0	10.0	60	火入れ			13	"	"	13.0	6.0	368	"						
		19	"	"	8.0	3.5	65				13	敲	"	6.0	6.5	225	火入れ			14	"	"	12.0	4.0	99	"						
		76	5	石 皿	花	17.0	14.0					14	凹石	輝	11.0	12.5				火入れ	15	"	"	9.5	4.5		折					
		76	8	石 皿	"	17.5	26.0					15	石 錘	硬	5.0	7.0	83			火入れ	16	横	"	8.0	12.0	260	"					
24住	59	25	打	硬	10.0	4.5	77		76	63	16	石 棒	安山岩																			
		26	"	"	10.5	4.5	82				17	磨石斧	緑	5.5	2.0	8	折	17	"	緑	5.8	5.5	127	"								
		27	"	"	12.5	4	142				18	打	硬	10.3	4.0	62	覆土	18	打	"	13.5	4.5	120	"								
		28	"	緑	10.0	3.0	60				19	"	緑	12.5	3.0	66	覆土	19	"	"	10.7	4.5	116	"								
		29	"	硬	9.3	3.0	70				20	"	緑	14.0	2.0	40	"		20	"	硬	10.5	4.5	72	"							
		30	"	緑	12.0	4.5	156				21	"	"	14.0	2.0	40	"		21	横	"	5.5	12.0	120	"							

遺構	図号	№	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考	遺構	図号	№	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考	遺構	図号	№	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考		
45住	66	22	横	硬	6.0	9.5	769	床・炉	49住	71	12	打	緑	12.6	3.0	70	上部 灰岩	52住	73	31	打	硬	13.0	4.9	131	上部 灰岩		
49住	70	22	打	緑	13.0	4.0	104	床・炉			13	"	"	11.0	4.0	85	"			32	"	"	12.5	4.9	120	"		
		23	"	"	11.0	3.5	110	"			14	"	"	8.0	3.0	"	"			33	"	"	10.0	4.8	108	"		
		24	"	"	11.0	4.5	71	"			15	横	硬	11.0	8.5	234	"			34	"	緑	13.5	3.7	165	"		
		25	"	"	10.5	5.0	90	"			16	"	"	6.0	7.0	50	"			35	"	"	11.5	4.8	127	"		
		26	"	"	10.0	3.5	59	"			17	"	"	5.5	8.5	80	"			36	"	"	9.0	3.7	71	"		
		27	"	"	9.5	3.5	50	"			18	"	"	6.0	9.0	75	"			37	石 錘	硬	7.5	5.2	96	"		
		28	"	"	9.5	5.0	61	"			19	"	"	10.5	14.0	403	"			78	26	石 鉄	黒	2.5	1.3	"	"	
		29	"	"	11.0	3.5	68	"		78	21	石 鉄	"	"	"	"	"			土城 1号	75	5	打	硬	14.5	5.5	200	"
		30	横	"	4.0	10.0	60	"			23	"	"	"	"	"	"				6	"	"	16.0	6.5	370	"	
		31	"	"	5.5	9.0	66	"	52住	73	15	打	硬	11.0	4.5	115	床				7	"	"	9.0	5.0	68	"	
		32	"	硬	6.5	5.5	69	"			16	"	"	9.0	4.0	115	"				8	石 錘	チャート	6.0	3.5	55	"	
		33	敲	"	14.0	5.5	68	"			17	"	"	13.5	3.5	130	"				9	横	硬	5.0	9.0	99	"	
		34	"	輝 緑	14.0	6.5	605	" 折			18	"	"	9.5	4.5	76	"				10	"	"	4.0	9.0	50	"	
		35	凹 石	花	9.5	10.0	"	"			19	半磨製	"	8.0	3.5	60	"			土城 11号	75	19	磨石斧	輝	14.0	5.9	"	折
	71	1	打	硬	11.5	4.5	82	上部 灰岩			20	敲	硬	11.5	4.5	240	"				20	打	硬	14.0	4.0	112	"	
		2	"	"	9.0	4.0	76	" 折			21	横	"	5.0	12.0	108	"				21	横	"	5.5	8.5	70	"	
		3	"	"	8.5	5.0	64	"			22	"	"	4.5	8.0	55	"				22	"	"	5.5	9.0	90	"	
		4	"	"	9.5	4.0	75	" 折			23	"	"	6.5	14.0	185	"				78	27	石 匕	"	4.0	3.3	"	"
		5	"	緑	10.0	4.3	80	上部 灰岩			24	"	"	5.0	9.8	56	"				28	石 鉄	チャート	1.3	1.0	"	"	
		6	"	"	9.0	4.0	75	"			25	石 錘	緑	6.5	4.0	60	"				29	"	黒	1.5	0.8	"	"	
		7	"	"	13.0	4.0	66	"			26	"	硬	3.0	2.3	9	"			土城 7号 貯蔵 穴	75	27	横	粘板岩	4.5	5.5	29	"
		8	"	"	11.0	3.5	74	"			27	打	"	12.0	4.0	106	覆 土				75	30	石 錘	硬	5.5	3.5	55	"
		9	"	"	10.5	4.0	82	"			28	"	"	11.0	4.6	114	"				78	31	"	チャート	3.5	3.0	12	"
		10	"	"	11.0	3.5	58	"			29	"	"	11.5	3.8	120	覆 土 硬 上 灰				78	30	石 鉄	黒	1.4	1.7	"	折
		11	"	"	11.5	3.5	80	"			30	"	"	14.0	5.2	135	"				31	"	"	2.0	1.0	"	"	

V ま と め

埴原城本屋遺跡の調査は、第2次農業構造改善事業に伴う工事区域の遺跡の南側について行なったものであるが、縄文中期末葉の集落と縄文後期初頭、弥生時代、平安時代の遺構が発掘調査された。

縄文中期末葉の集落は環状となるとみられ、住居址の切りあい関係は複雑を極め、それらの重なりあから新旧を明らかにし、下伊那地方の中期末葉の土器からみて、I～IV期を設定し、城本屋遺跡出土土器をII・III・IVの3時期と、III～IVへの移行期をおいて分類を試みた。これは今後の下伊那地方のこの期の編年への試みであり、今後の課題である。また、採集経済に基礎をおいた社会構造と集落のあり方についても問題を提示したが今後の調査の積みかさねによって明らかにされるものと思われる。

縄文後期初頭の住居址は調査区域の北側に発見されており、用地外の北の果樹園よりもこの期の遺物が多く採集されており、後期初頭の集落が台地の北側に展開されていたとみられ、中期終末から後期初頭へのつながりについての検討をさらに深める必要を感じた。

弥生時代の住居址2を調査しているが、いずれも北の用地外にかかり、出土土器は小片で、中期阿島式とみるものであったが、はたしてその期のものと断定するには資料不足であった。

平安時代の住居址1と、柱列址、時期を明確にできない貯蔵穴を発掘しているが、住居址の規模は従来の発掘例と比べ小さく、遺物は国分式の甕1個体と破片1点以外はなく、特別な住居址とみられた。埴原台地での平安期の住居址は最初の発掘調査例である。

発掘区域の南側は砂と泥の堆積層で縄文中期の住居址を切っており、その期以後の地形変化を物語るもので、地形、地質の面で注目される。

発掘面積2500㎡の狭い範囲に多くの遺構群が発見され、多くの課題を今後に残す調査であり、報告書発行の期限の制約があり、十分な研究、検討がなされない段階での執筆をよぎなくされたもので、大方のご批判、ご教示をおねがいたしたい。

おわりに、発掘調査にあたって調査員今村正次先生の献身的な御協力、地形・地質に矢亀勝俊先生の遺物遺構について大沢和夫先生、今村善興先生の御指導があり、地主のご理解と作業にあたられた方々の熱心な作業態度が大きな力となったことに深謝したい。

(佐藤 魁 信)

調 査 組 織

1. 埴牛原城本屋遺跡発掘調査委員会

下平 真広 喬木村教育委員会委員長
下岡 輝男 喬木村教育長
宮下 恵 喬木村教育委員
本間 孝佐 "
原 五郎 喬木村文化財保護委員
林 雅雅夫 埴牛原農業構造実行委員長
木下 和市 " 副委員長
大平 清光 " "

2. 調 査 団

団 長 佐藤 魁信
調査員 今村 正次 吉川 五郎

3. 指 導 者

大沢 和夫 長野県考古学会会長
矢亀 勝俊 長野県地理学会副会長
今村 善興 長野県教育委員会文化課指導主事

4. 事 務 局

下岡 理則 喬木村教育委員会総務係長
田中 君子 喬木村教育委員会社会教育係主事
林 定保

5. 作 業 員

北村 重実	福島 明夫	牧内 佳子	西尾多三郎	松沢 道雄
木下 国人	羽生 彰	大平 あや	三石 幹雄	溝呂木修策
原 重治	下平 園枝	木下いしえ	羽生 臣子	木下 かね
大平みさを	吉田 妙心	原 三行	東原 明	松沢 寧
松沢 智	江塚栄理子	大平 幸吉	下岡 幸文	鶴飼 繁雄
原 源助	木林 元一	下岡 涼一	大平とし子	黒川 能孝
下平 真介	木下 シマ	下岡 隆志	熊谷 三男	竹内 正明
大平いなゑ	木下 くに	市瀬 庵子		

遺物整理, 製図

佐藤いなゑ	池田 弘美	中平 一夫	田口さなゑ	牧内 佳子
-------	-------	-------	-------	-------

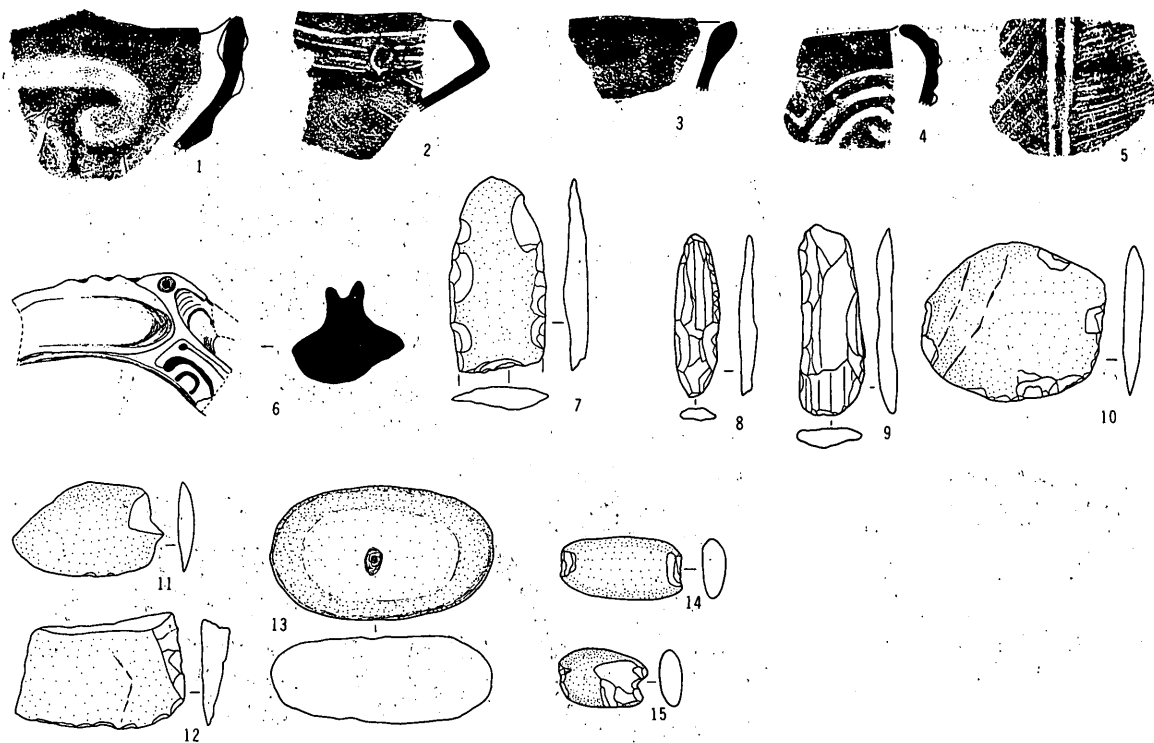


图37 城本屋遺跡1号住居址出土遺物(1:4)

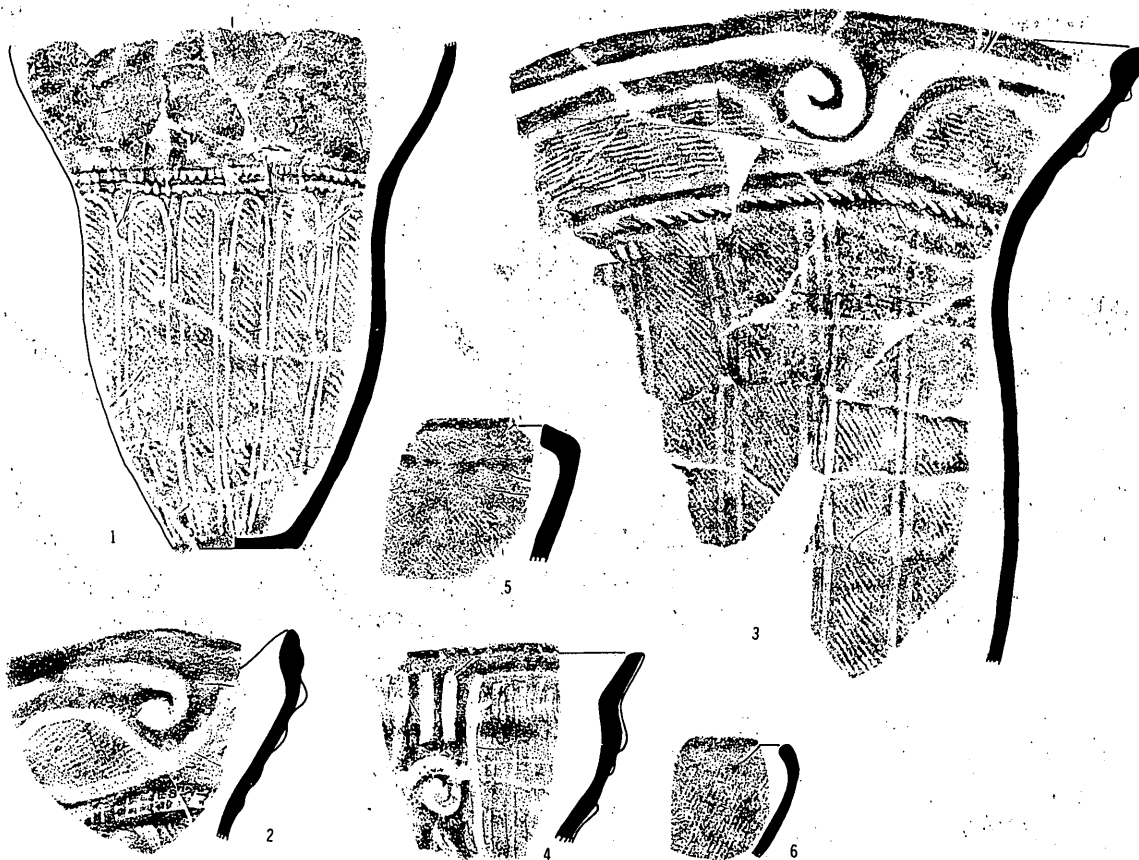


图38 城本屋遺跡2号住居址出土遺物I(1:4)床出土

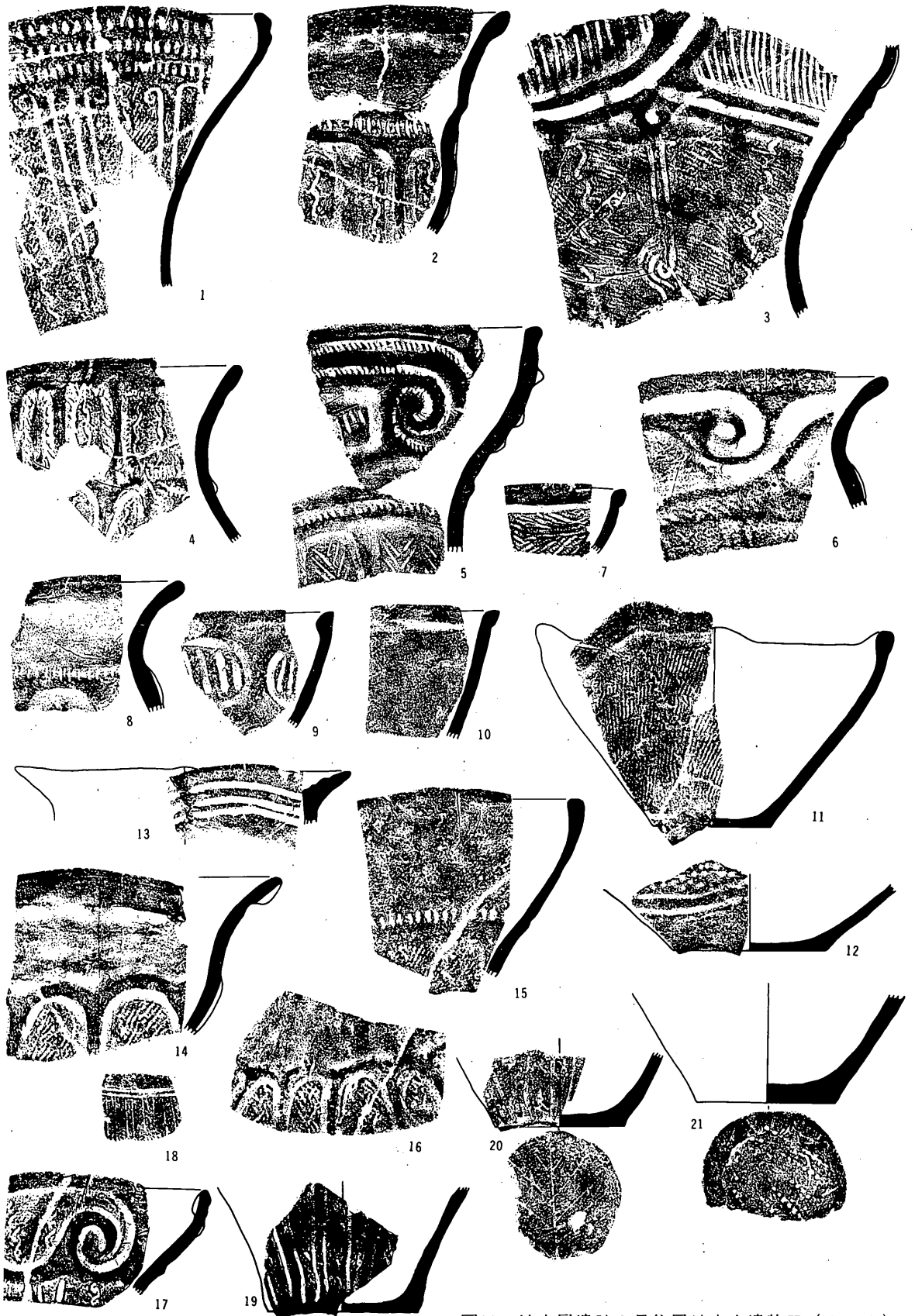


图39 城本屋遺跡 2号住居址出土遺物Ⅱ (1:4)

1~12…床面, 13~21…覆土

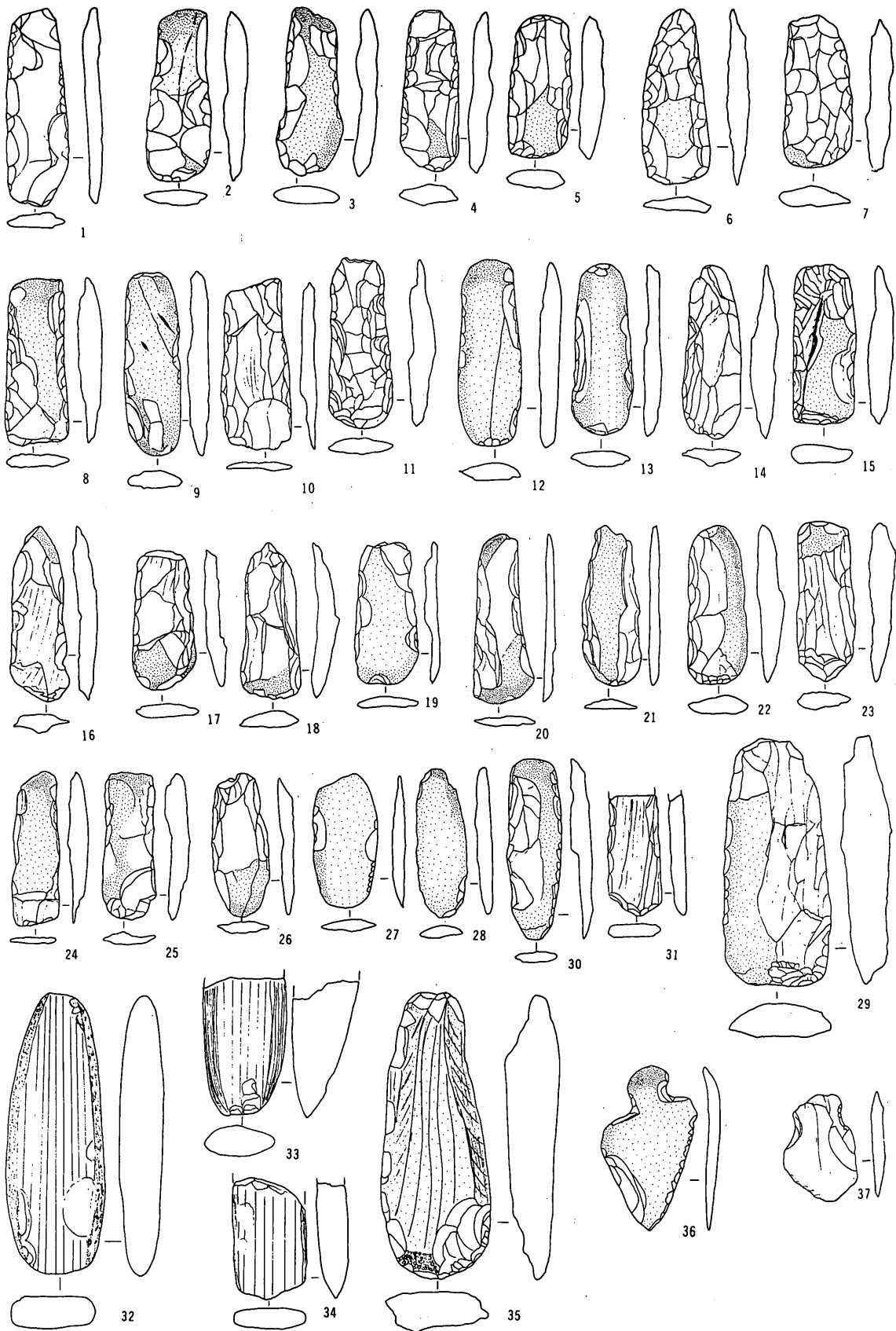


図40 城本屋遺跡2号住居址出土遺物Ⅲ(1:4) 床面出土石器 打石斧 1~7…硬砂岩
 8~29…凝灰岩 30…チャート 31…粘板岩 - 57 -

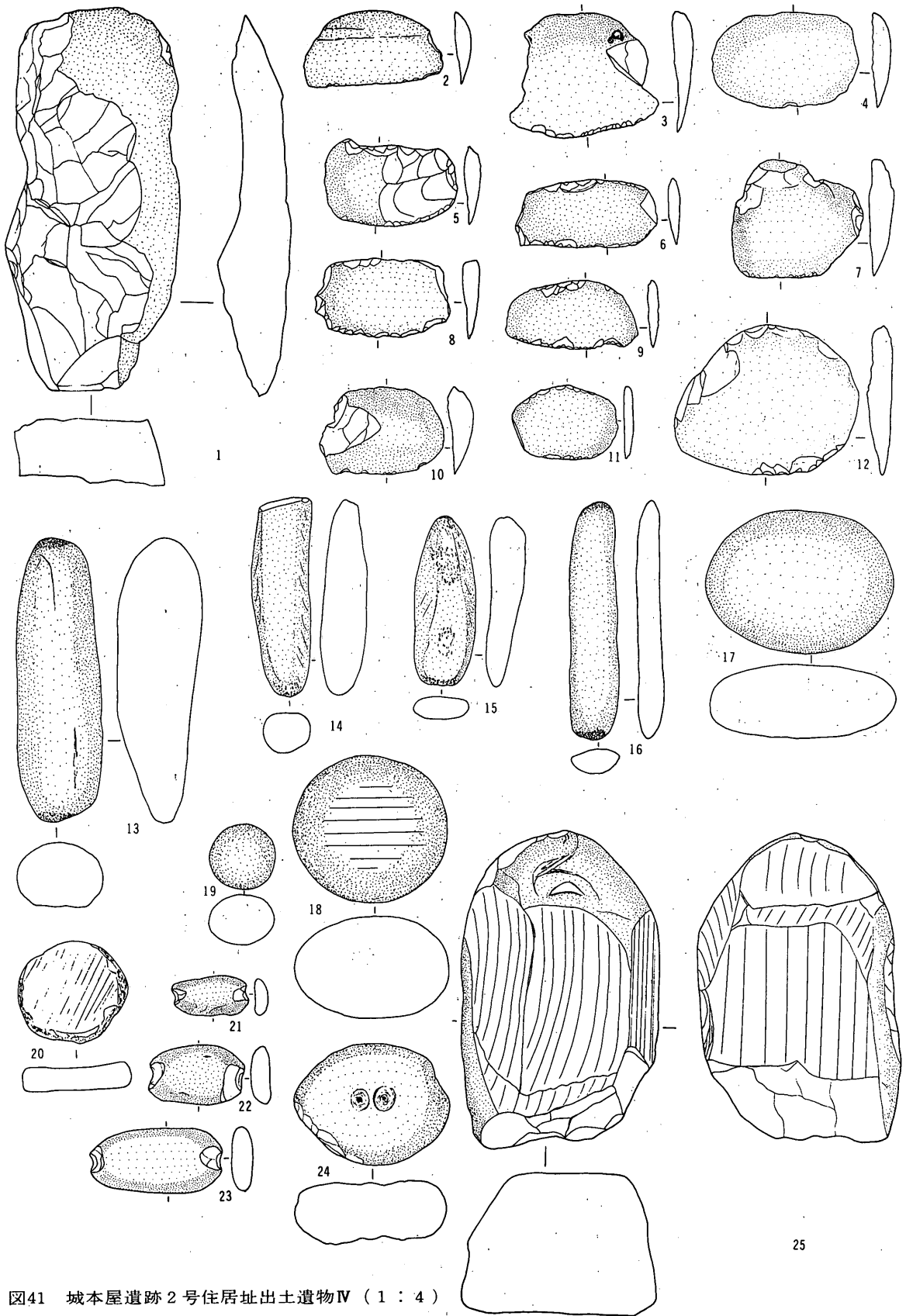


图41 城本屋遺跡2号住居址出土遺物IV (1:4)

床面出土石器 1…凝灰岩 2~12·21~23…硬砂岩

17·18·24…花崗岩 25…砂岩

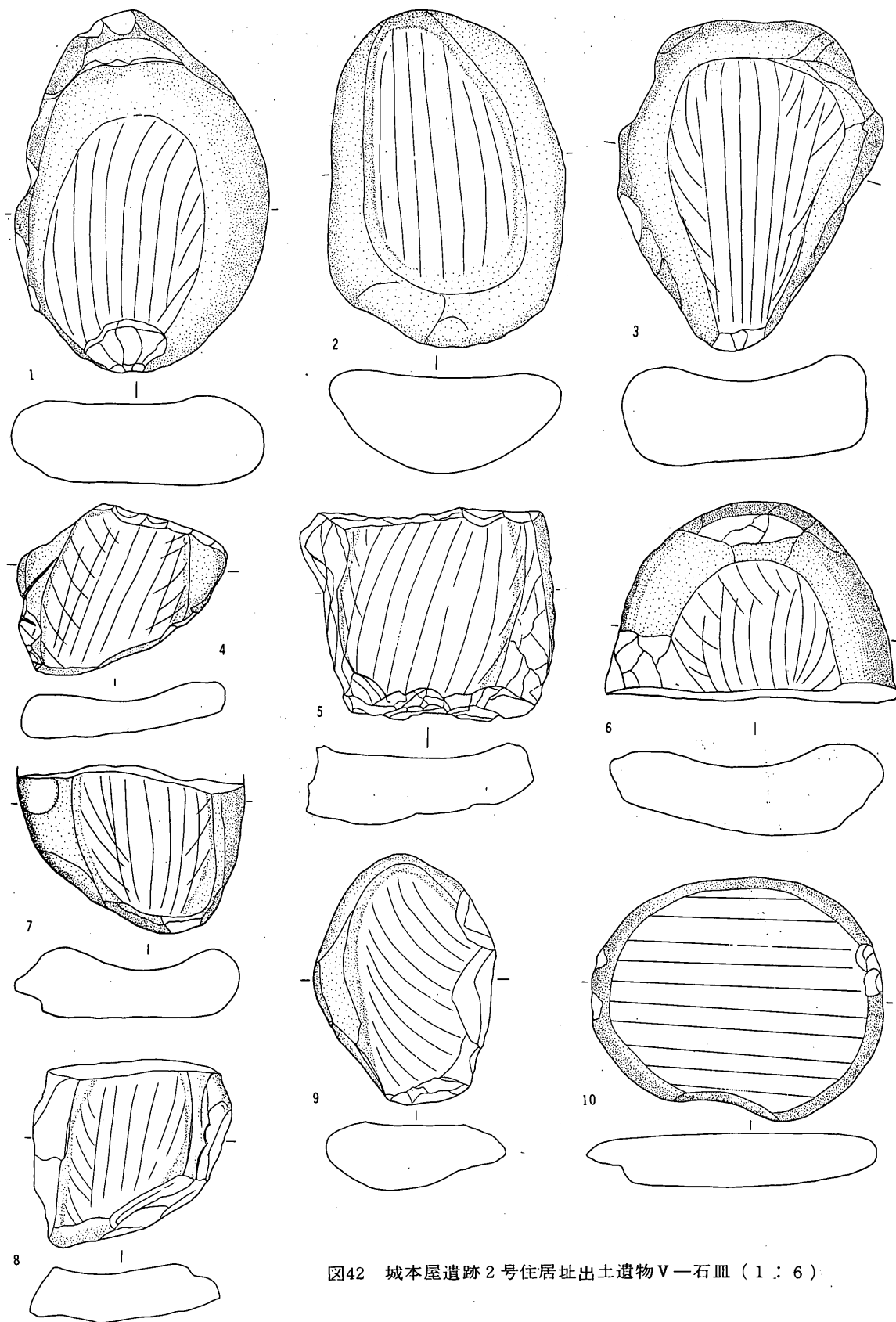


图42 城本屋遺跡2号住居址出土遺物V—石皿(1:6)

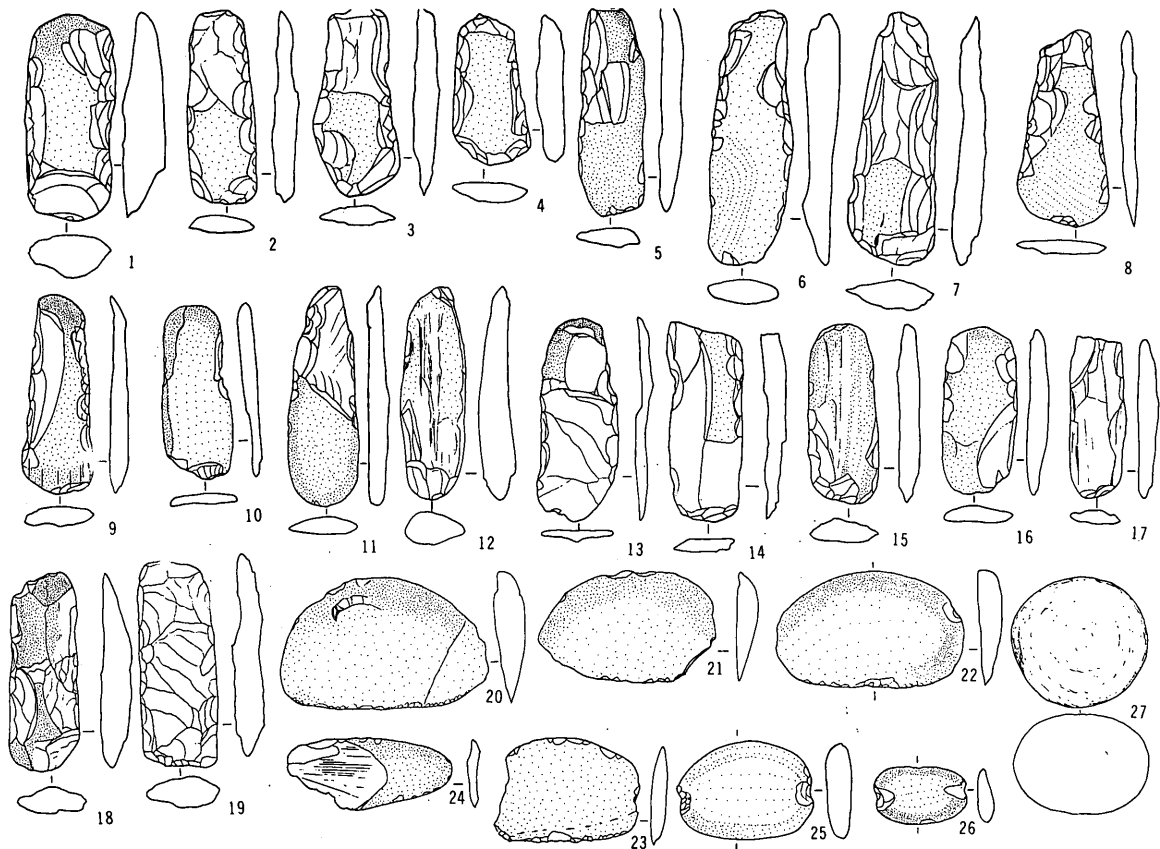


图43 城本屋遺跡 2号住居址出土遺物VI (1 : 4) 覆土出土石器 1~5·20~23·25·26...硬砂岩
6~17·24...凝灰岩 18...安山岩 19...? 27...花崗岩

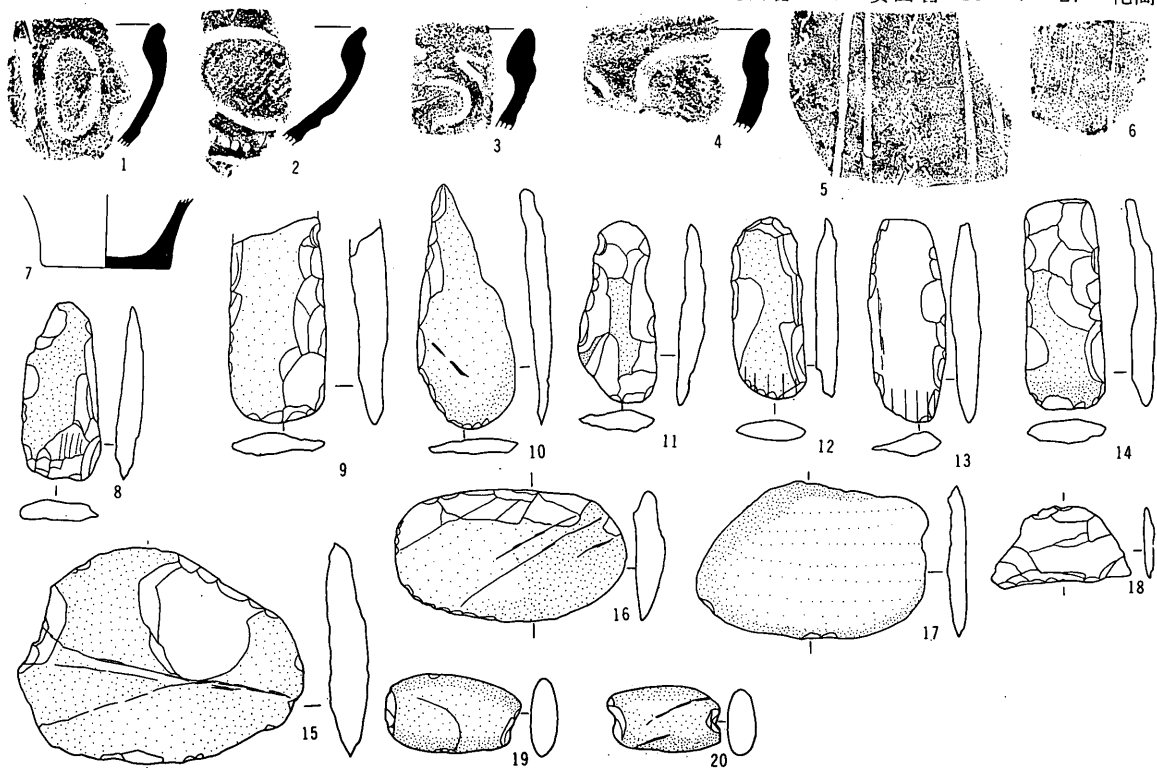


图44 城本屋遺跡 4号住居址出土遺物 (1 : 4)

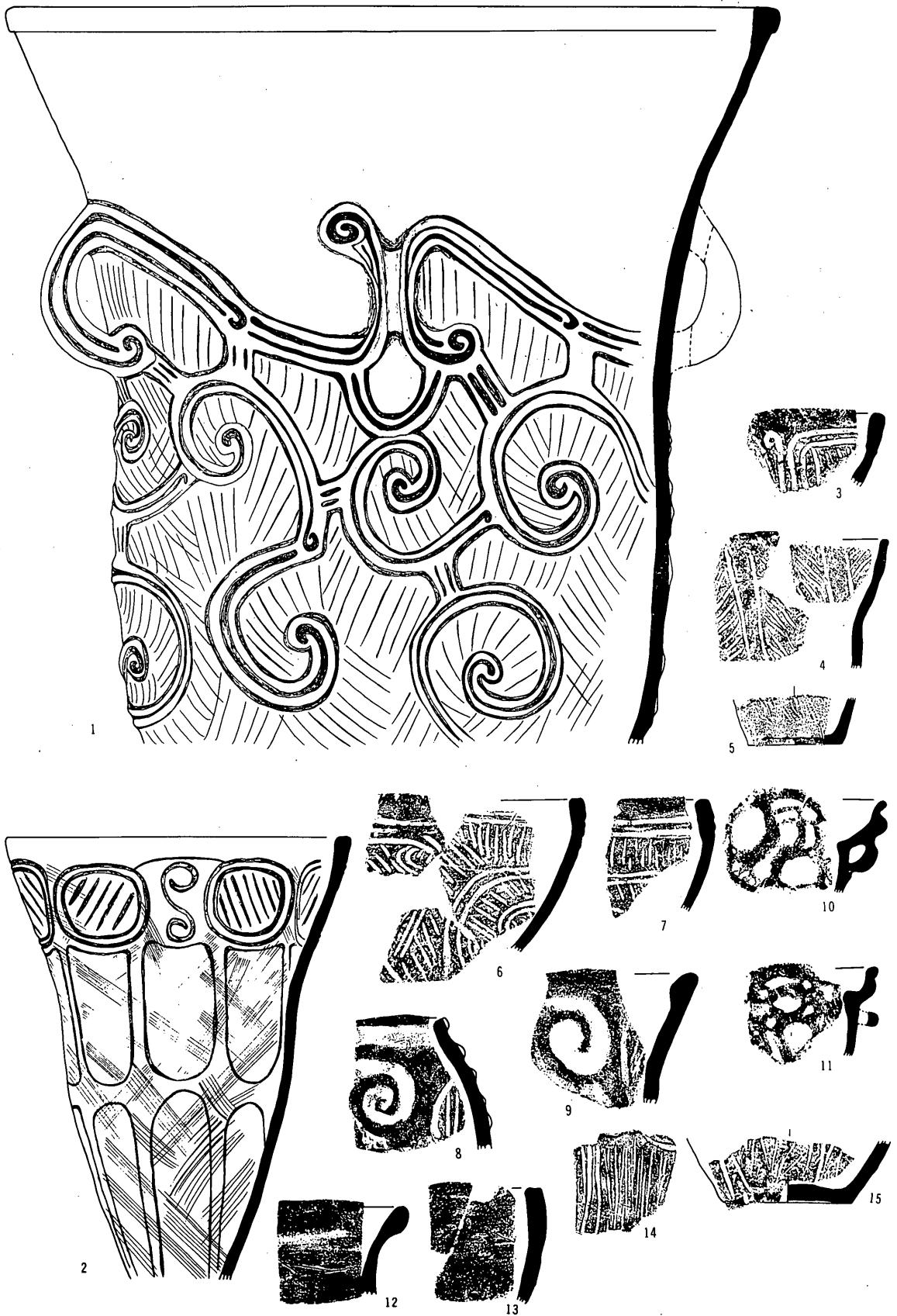


图45 城本屋遺跡3号住居址出土遺物I (1:4) 床面・炉址出土土器

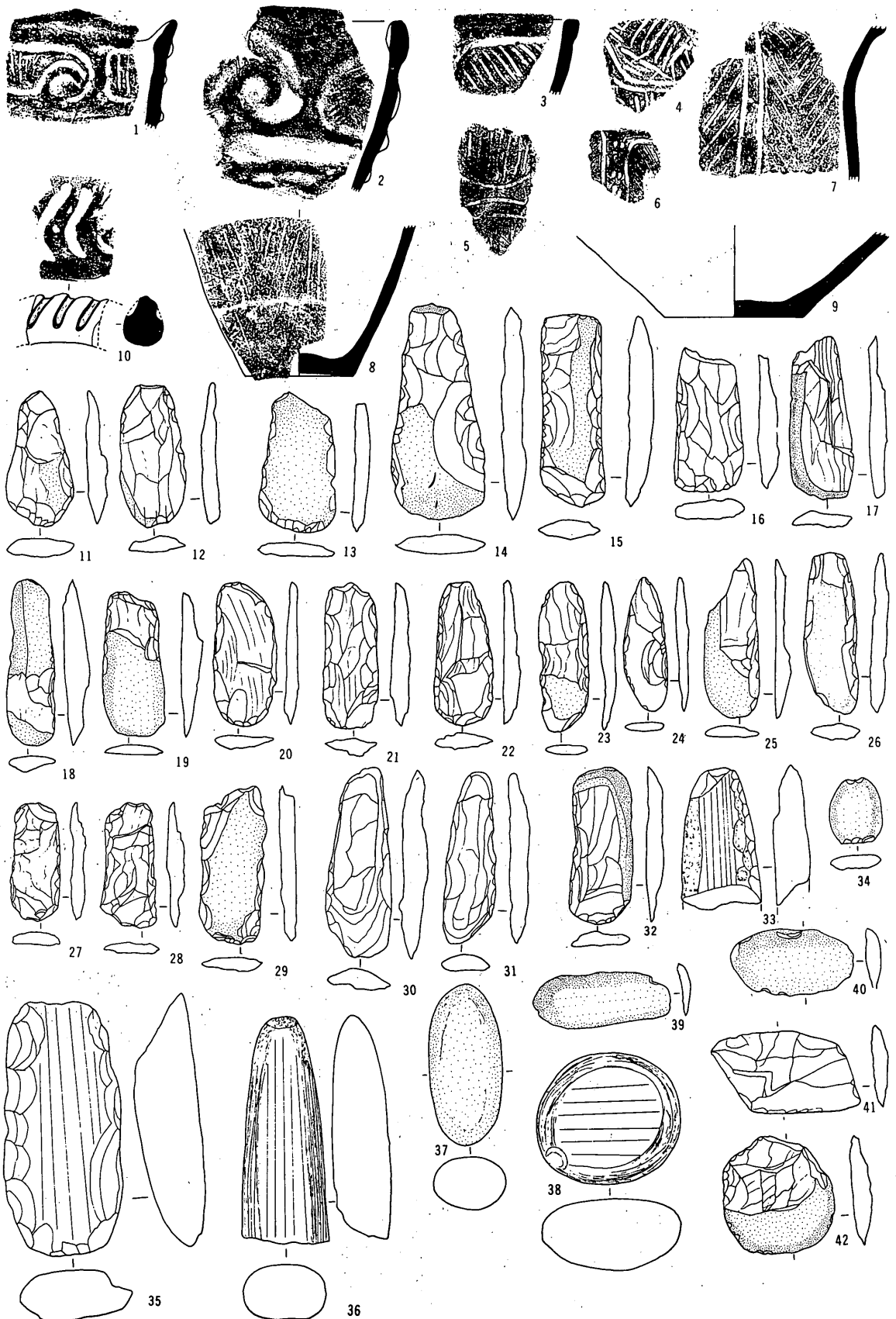


图46 城本屋遺跡3号住居址出土遺物II (1:4) 覆土出土土器·石器



图47 城本屋遺跡5号・6号住居址出土遺物(1:4)

1~14...5号住居址, 15~26...6号住居址



图48 城本屋遺跡7号住居址出土遺物I (1:4)

1~7…床面, 8~22…覆土下層

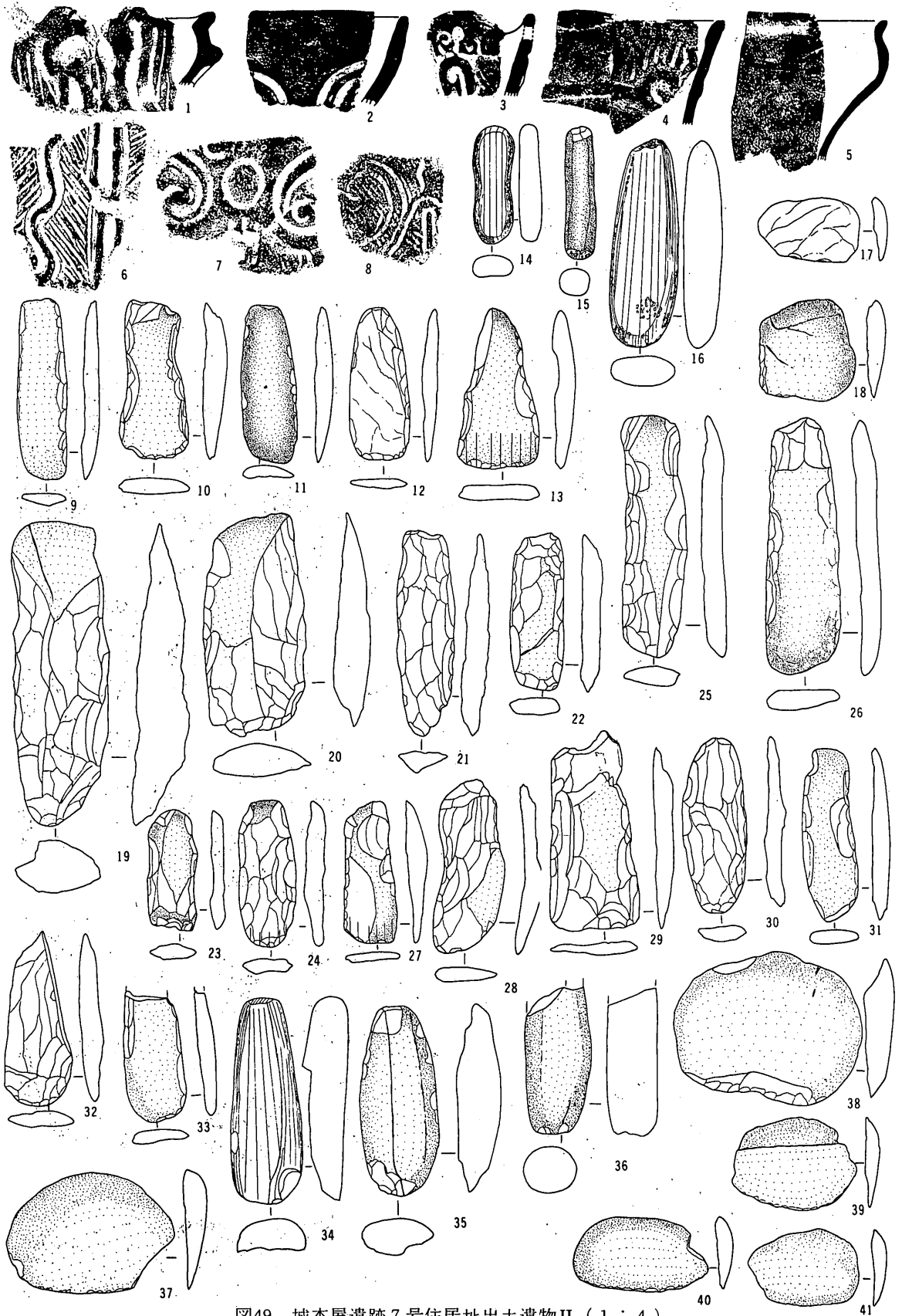


图49 城本屋遺跡7号住居址出土遺物II (1:4)

1~8…覆土上層土器, 9~18…床面石器, 19~41…覆土石器

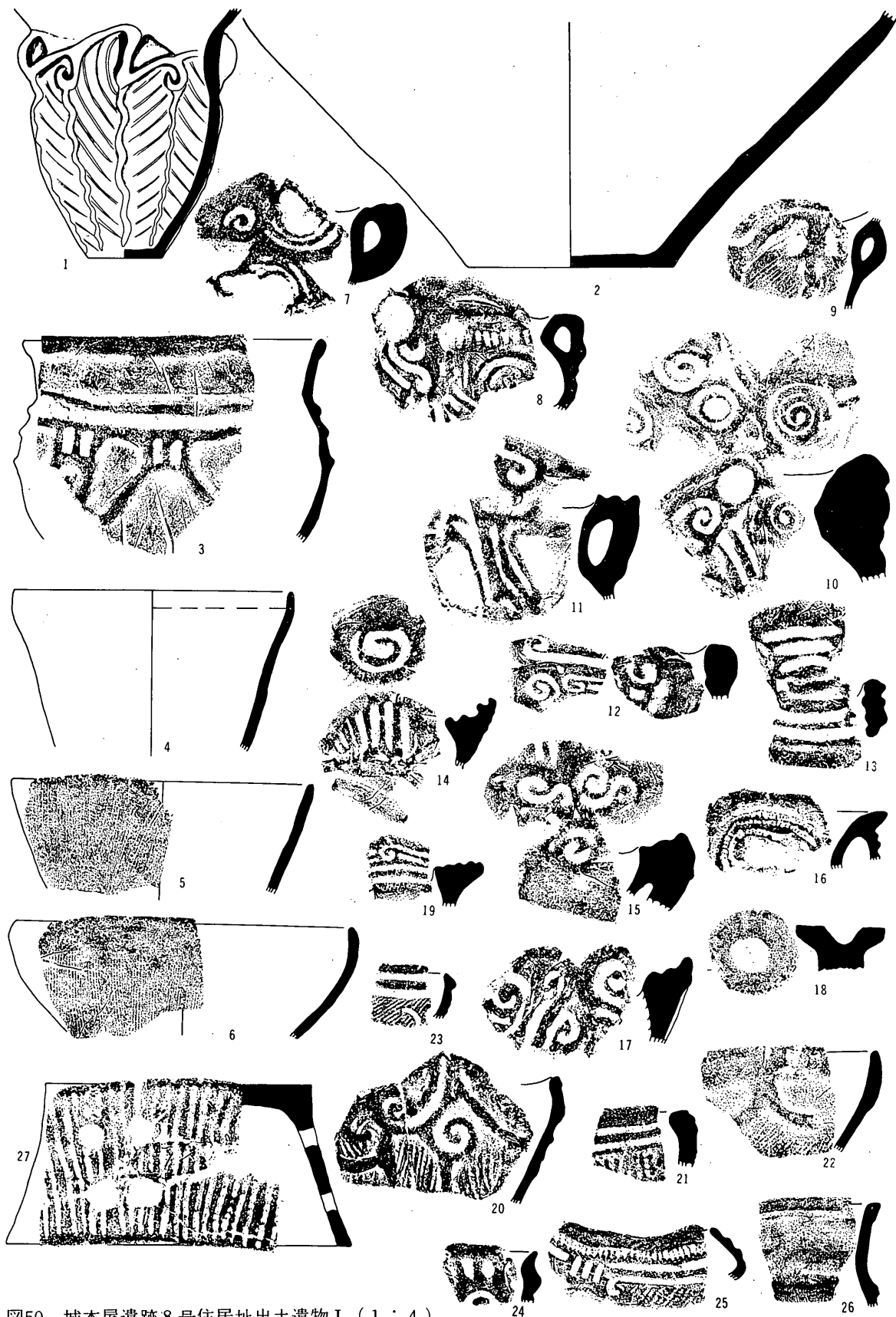


図50 城本屋遺跡8号住居址出土遺物I (1:4)

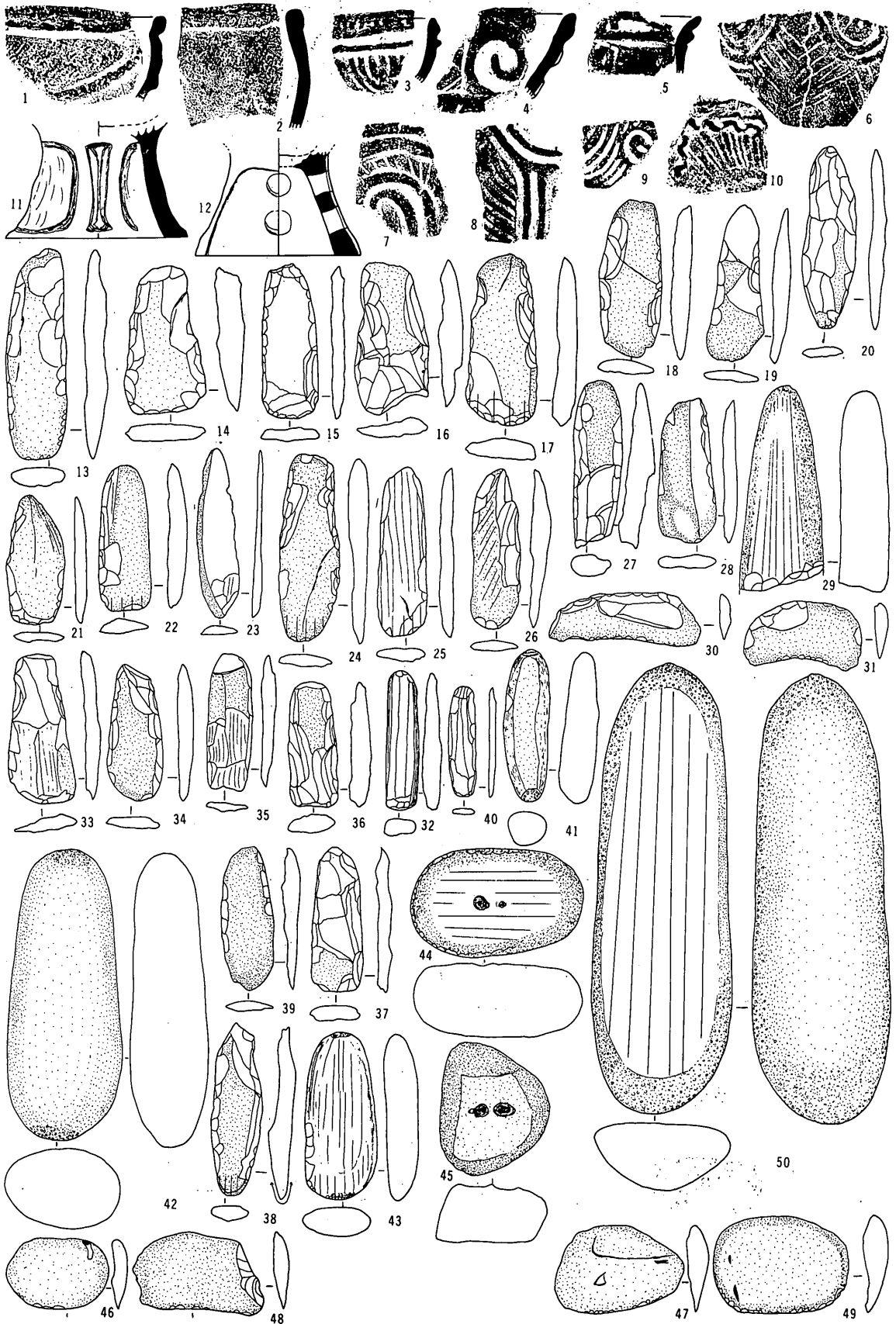


图51 城本屋遺跡8号住居址出土遺物Ⅱ (1:4)

1~12...覆土土器, 13~32·46·47...床·炉址·石器

33~45·48·49...覆土50 南壁石器

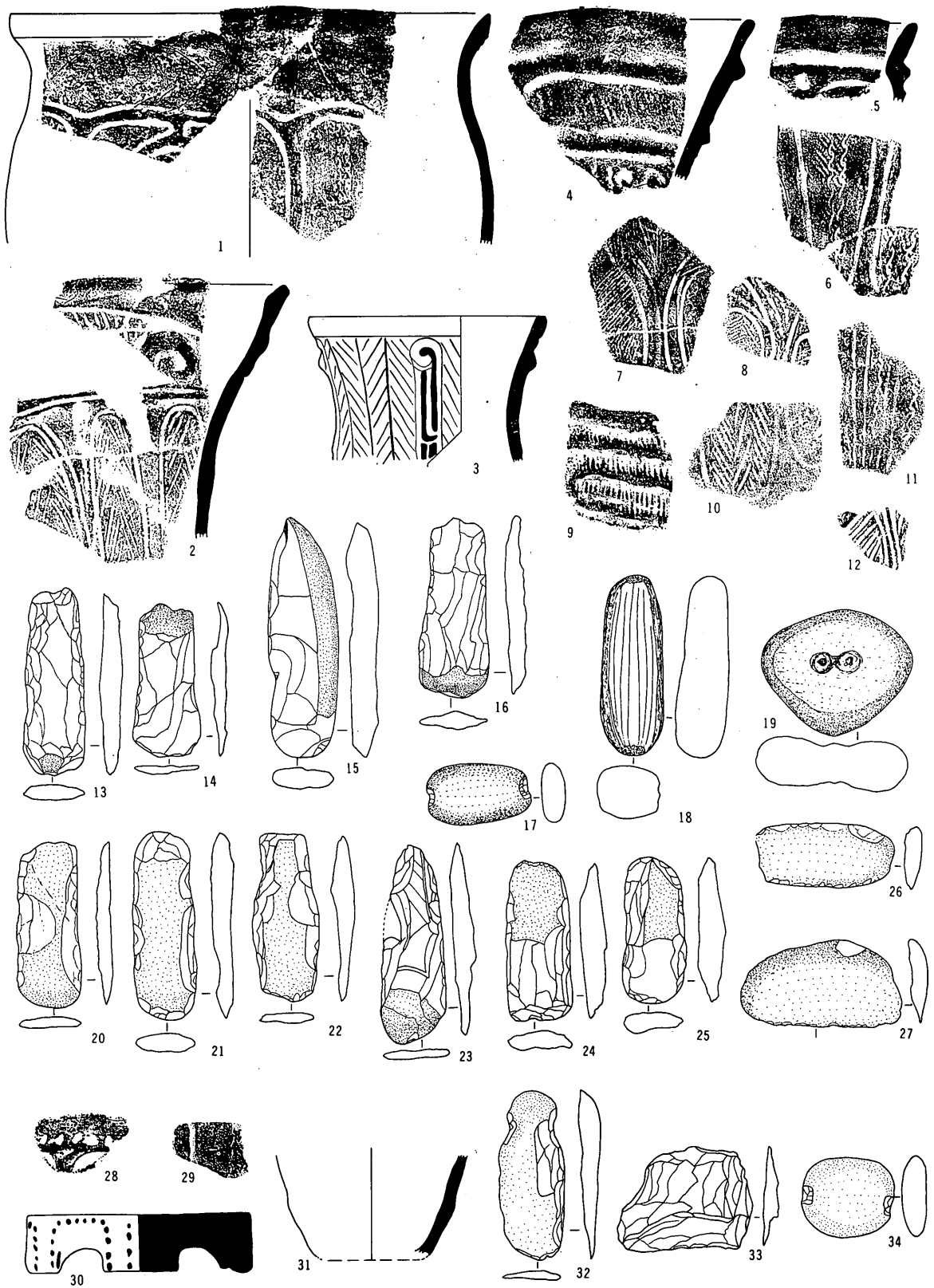


图52 城本屋遺跡9号・10号住居址出土遺物(1:4)

1~27...9住(13~19床, 20~27...覆土) 28~34...10住



图53 城本屋遺跡14号住居址出土遺物 (1:4)
 1~6, 10~20...床, 7~9...覆土土器, 21~25床
 26~32...覆土石器

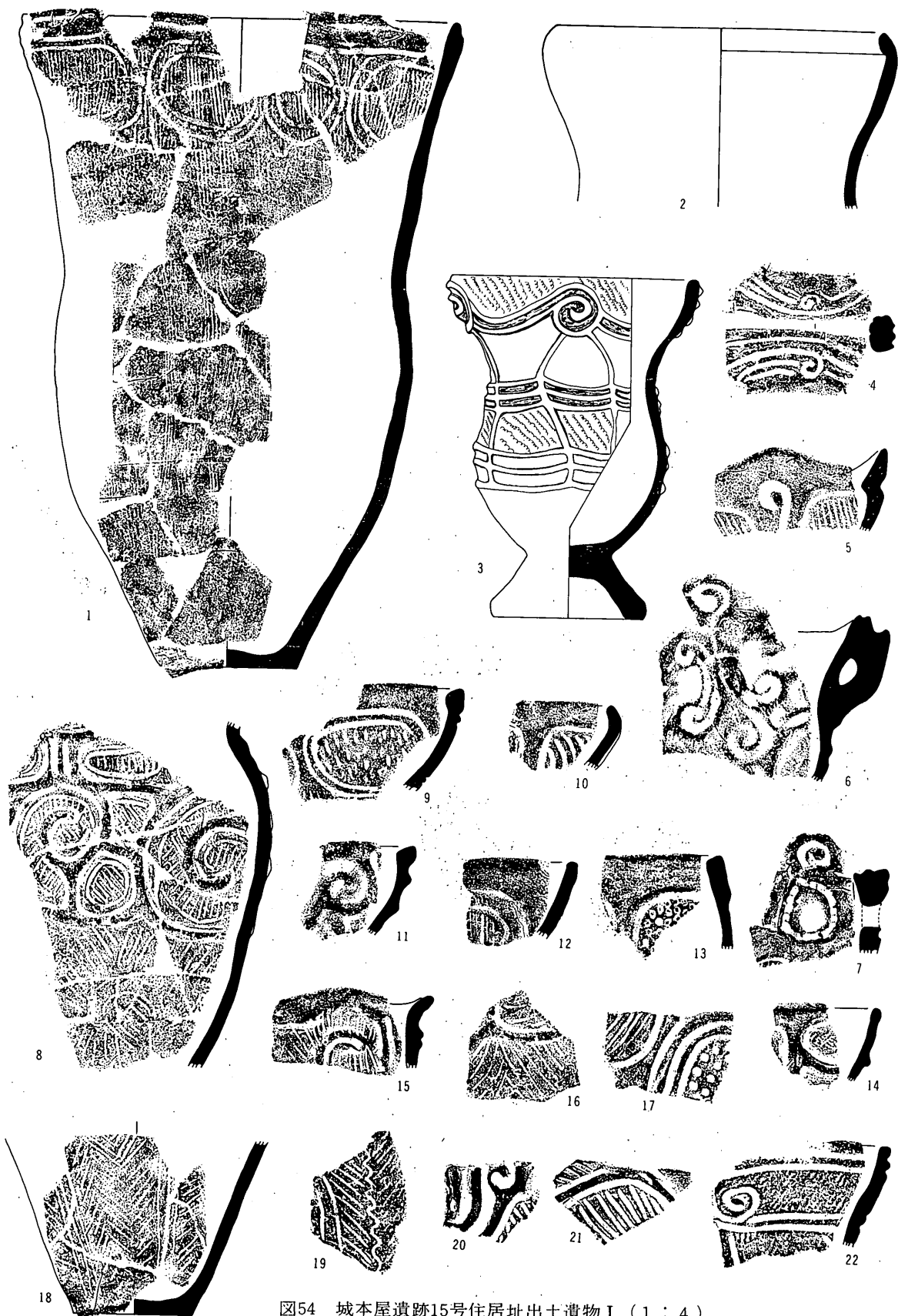


图54 城本屋遺跡15号住居址出土遺物 I (1 : 4)

1 ~ 21 床, 22... 覆土

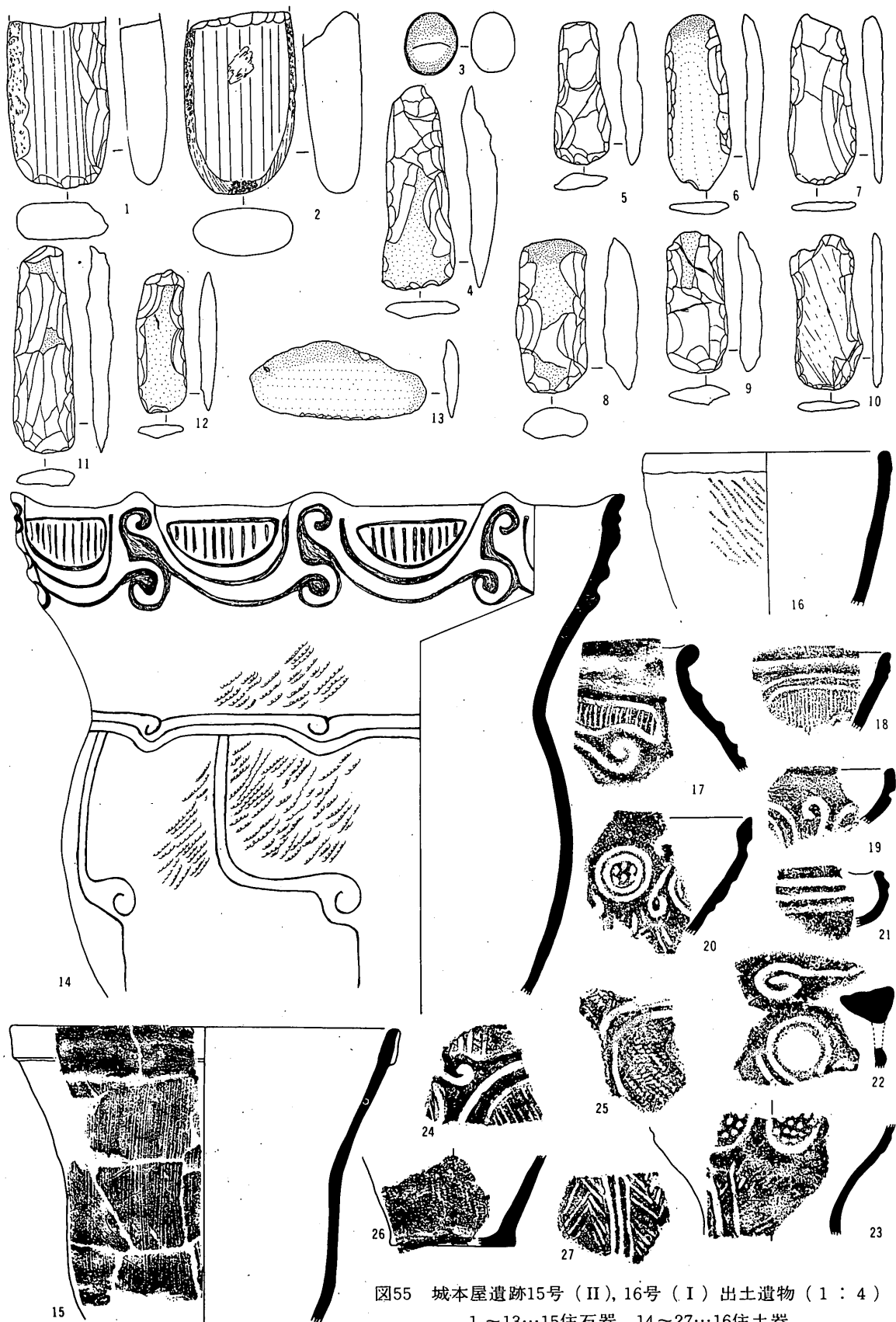


图55 城本屋遺跡15号(Ⅱ), 16号(Ⅰ)出土遺物(1:4)

1~13...15住石器, 14~27...16住土器

(1~3床, 4~13覆土)(14~17床18~23上層)

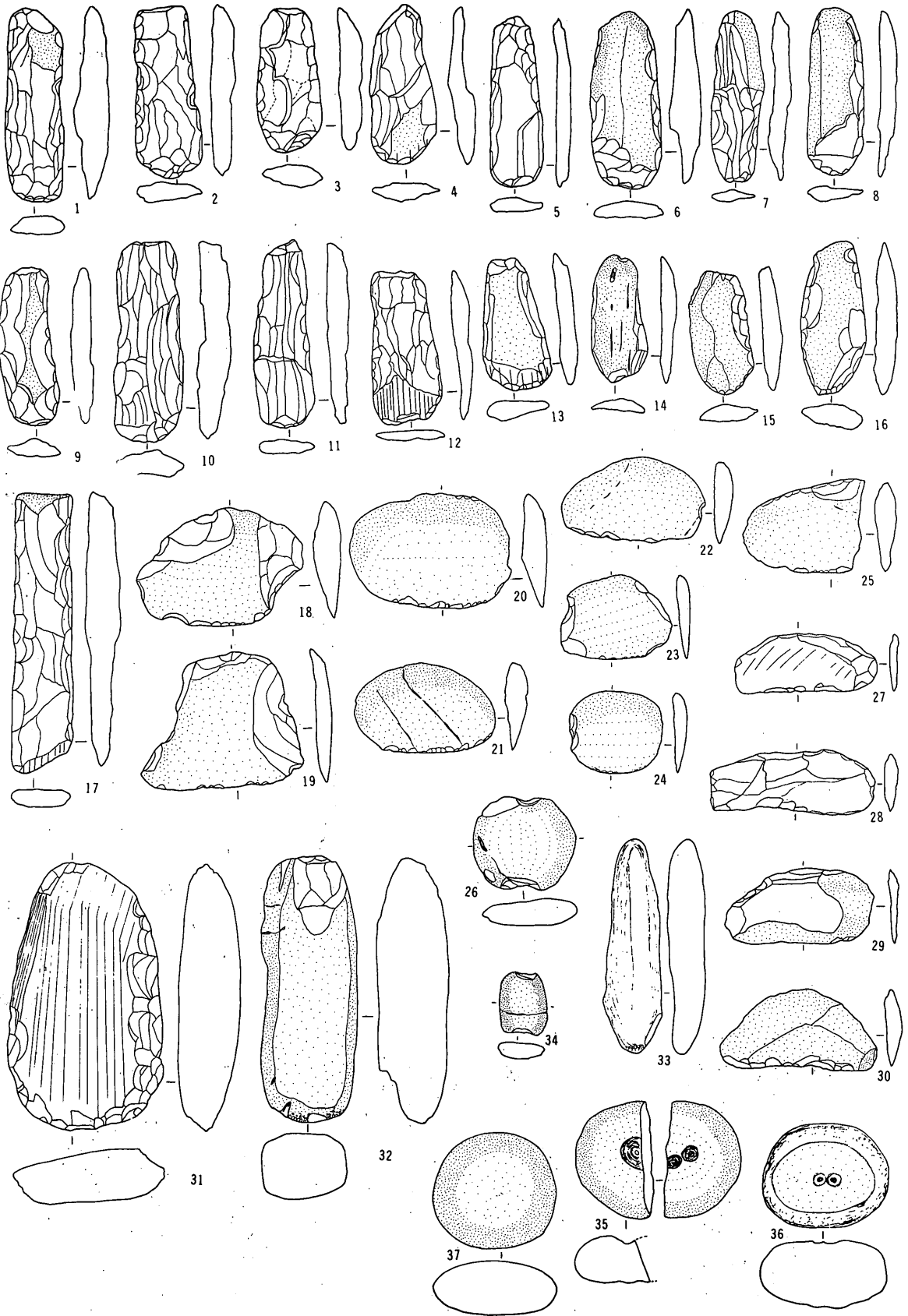


图56 城本屋遺跡16号住居址出土遺物II (1 : 4)

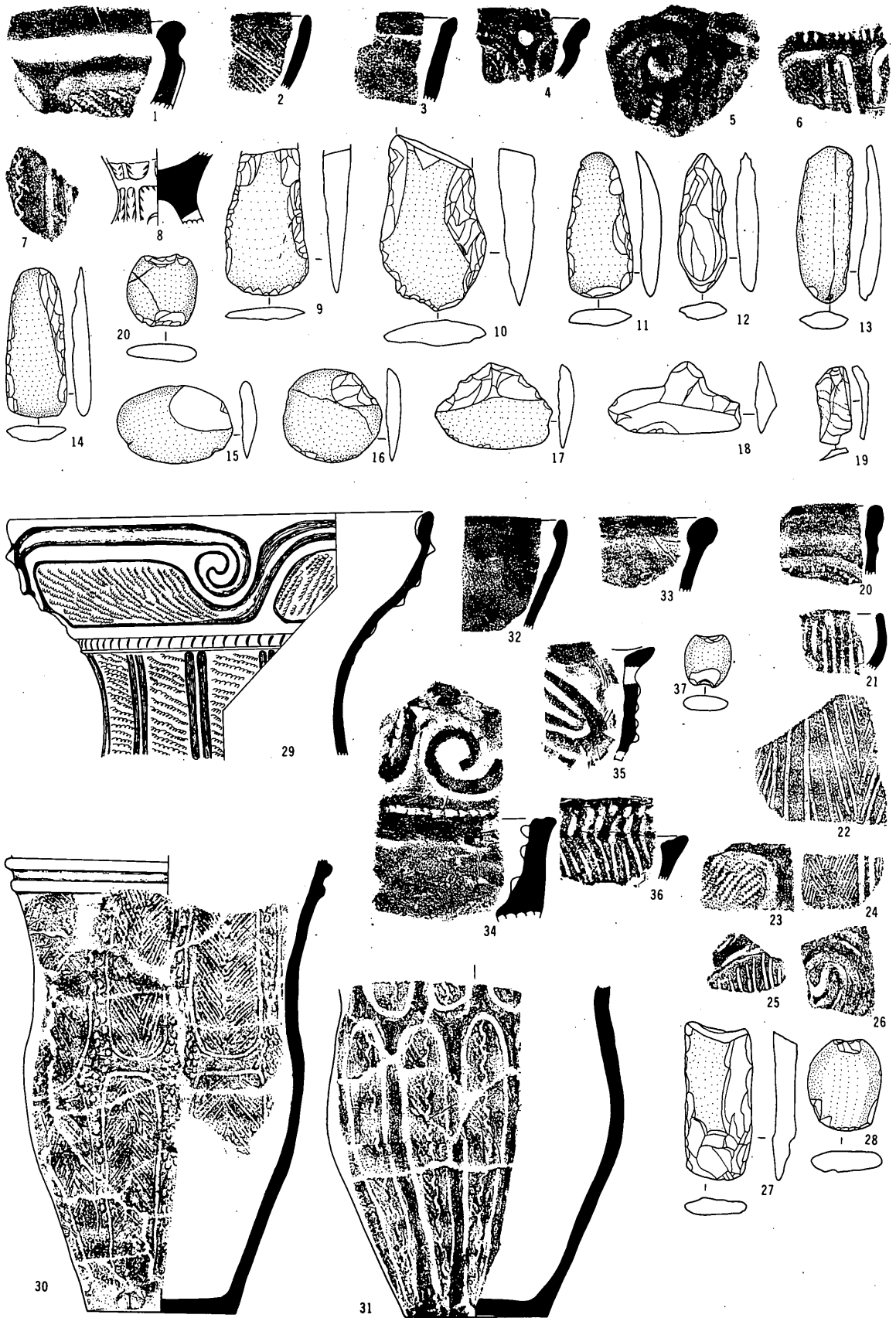


图57 城本屋遺跡11号·17号·18号住居址出土遺物 (1 : 4)

1 ~ 20...11住, 20 ~ 28...17住, 29 ~ 37...18住

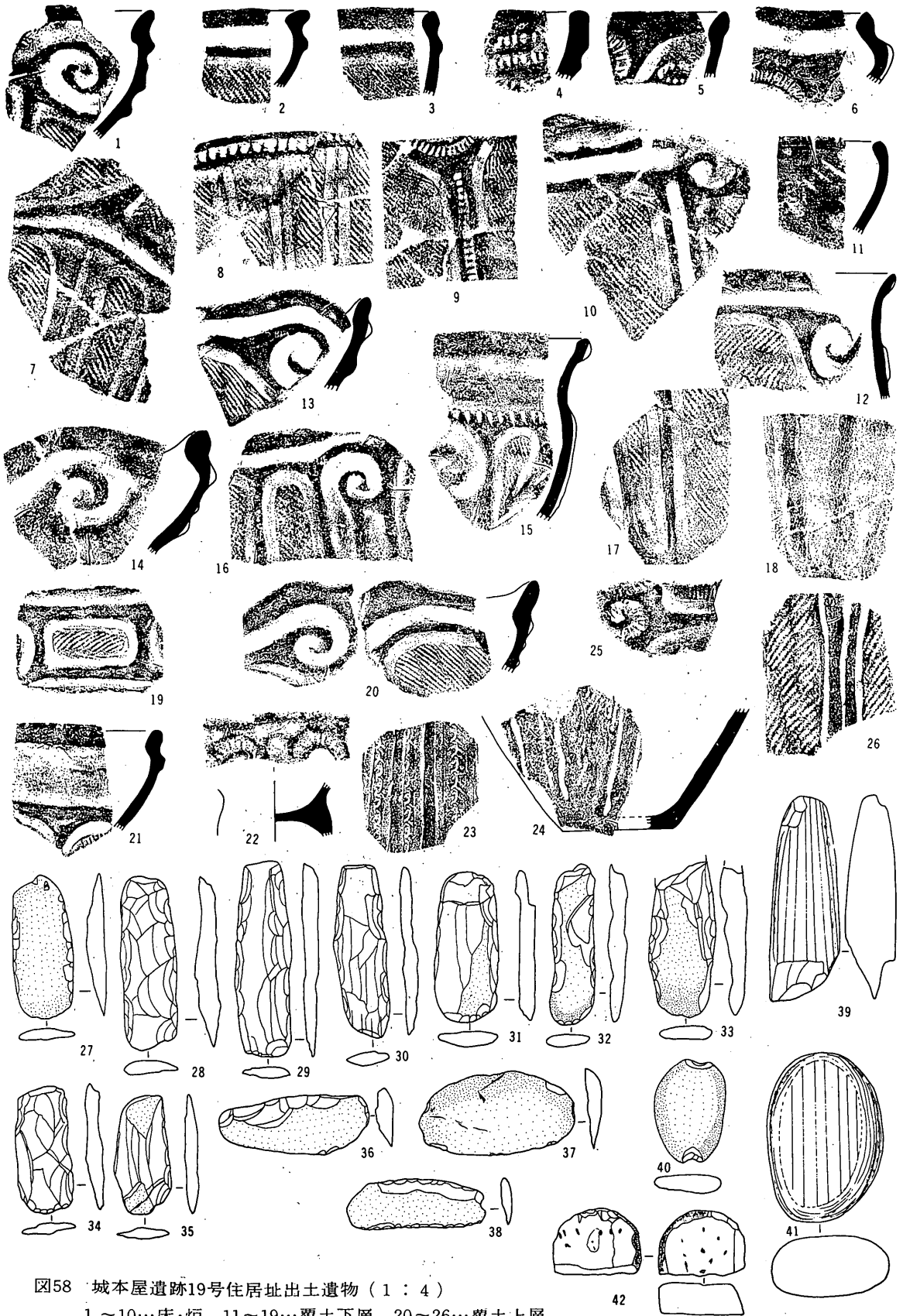


图58 城本屋遺跡19号住居址出土遺物(1:4)

1~10...床·炉, 11~19...覆土下層, 20~26...覆土上層

27~38床, 39~42...覆土下層

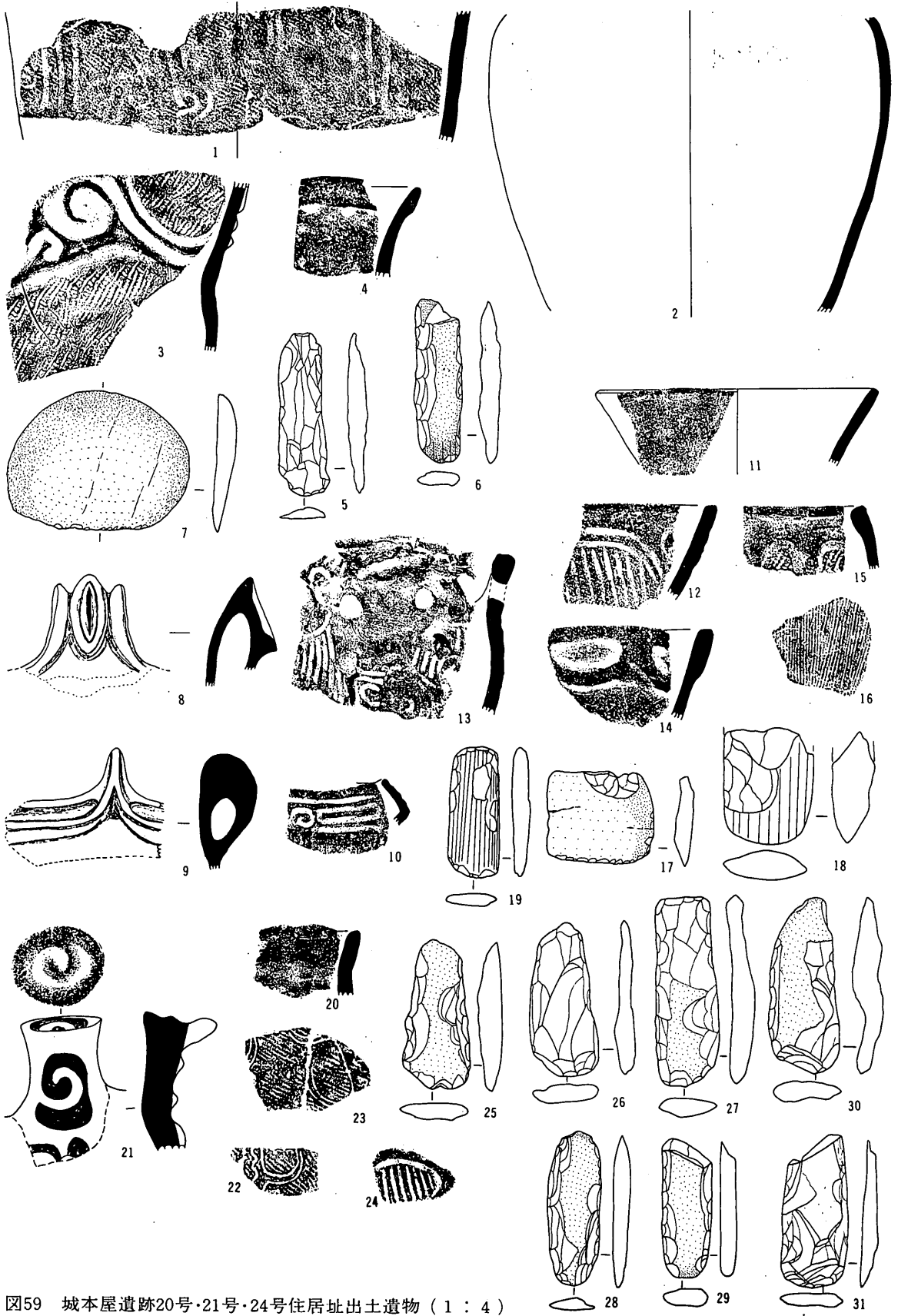


図59 城本屋遺跡20号・21号・24号住居址出土遺物 (1 : 4)
 1 ~ 7 ... 20住, 8 ~ 19 ... 21住, 21 ~ 31 ... 24住



図60 城本屋遺跡23号住居址出土遺物I (1 : 4)

1 ~ 11...床, 12 ~ 25...覆土, 26 ~ 34...ピット内

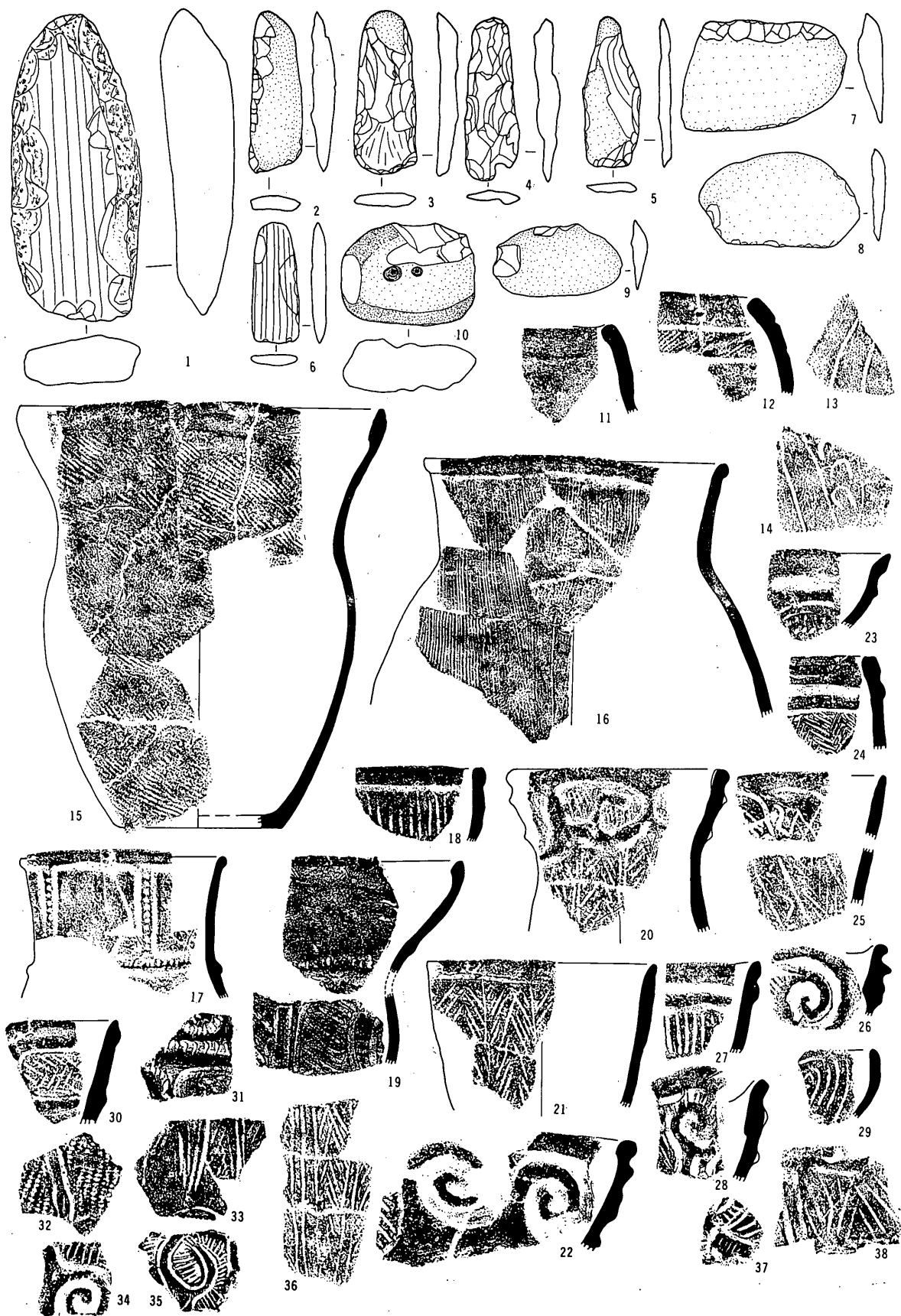


图61 城本屋遺跡23号住居址II・25号・27号住居址(I)出土遺物(1:4)
 1~10...23住, 11~14...25住, 15~38...27住出土物

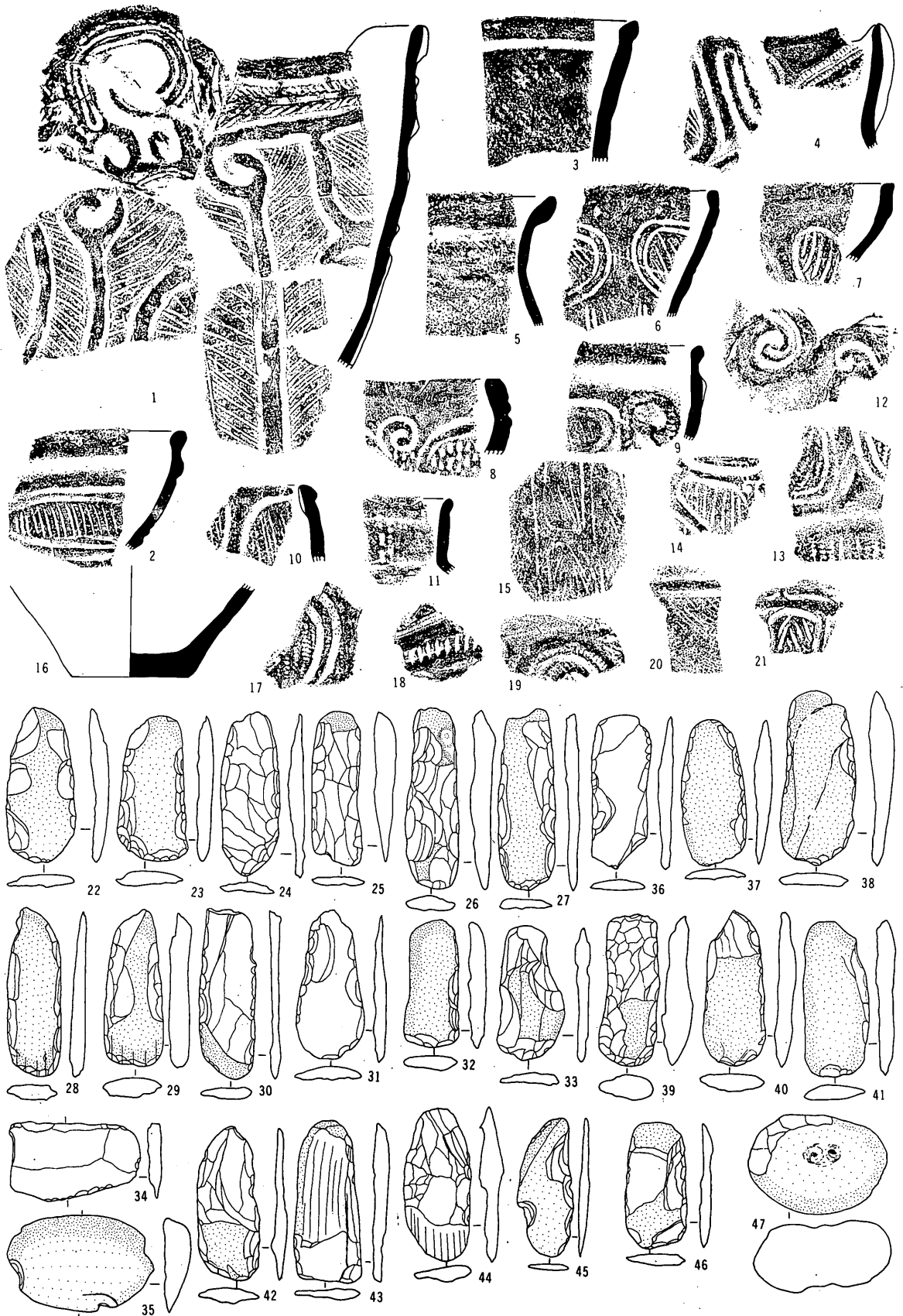


图62 城本屋遺跡27号住居址出土遺物Ⅱ (1 : 4)

1 ~ 21... 覆土上層, 22 ~ 35... 床, 36 ~ 47... 覆土下·中層

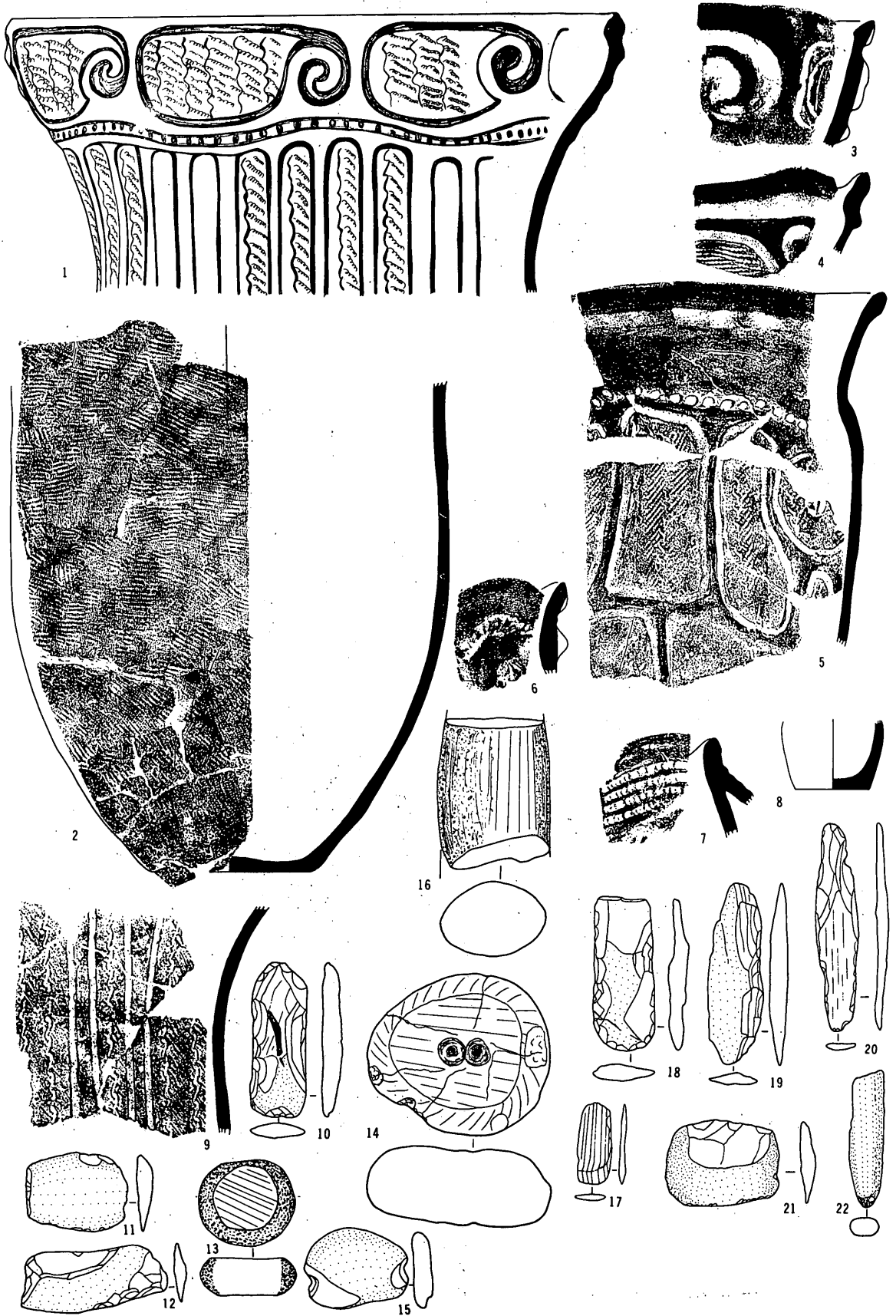


図63 城本屋遺跡29号住居址出土遺物 (1:4)

1~17…床・ピット, 18~22…覆土下層(1:2埋葬)

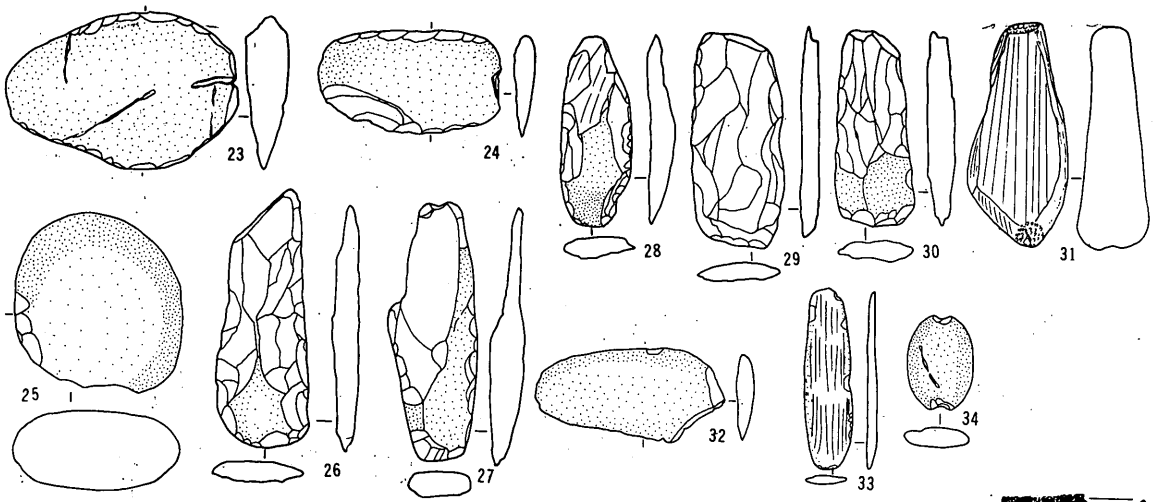


图 63-2 城本屋遺跡29号住居址出土遺物 (1:4)

23~25...覆土中層, 26~34...上層

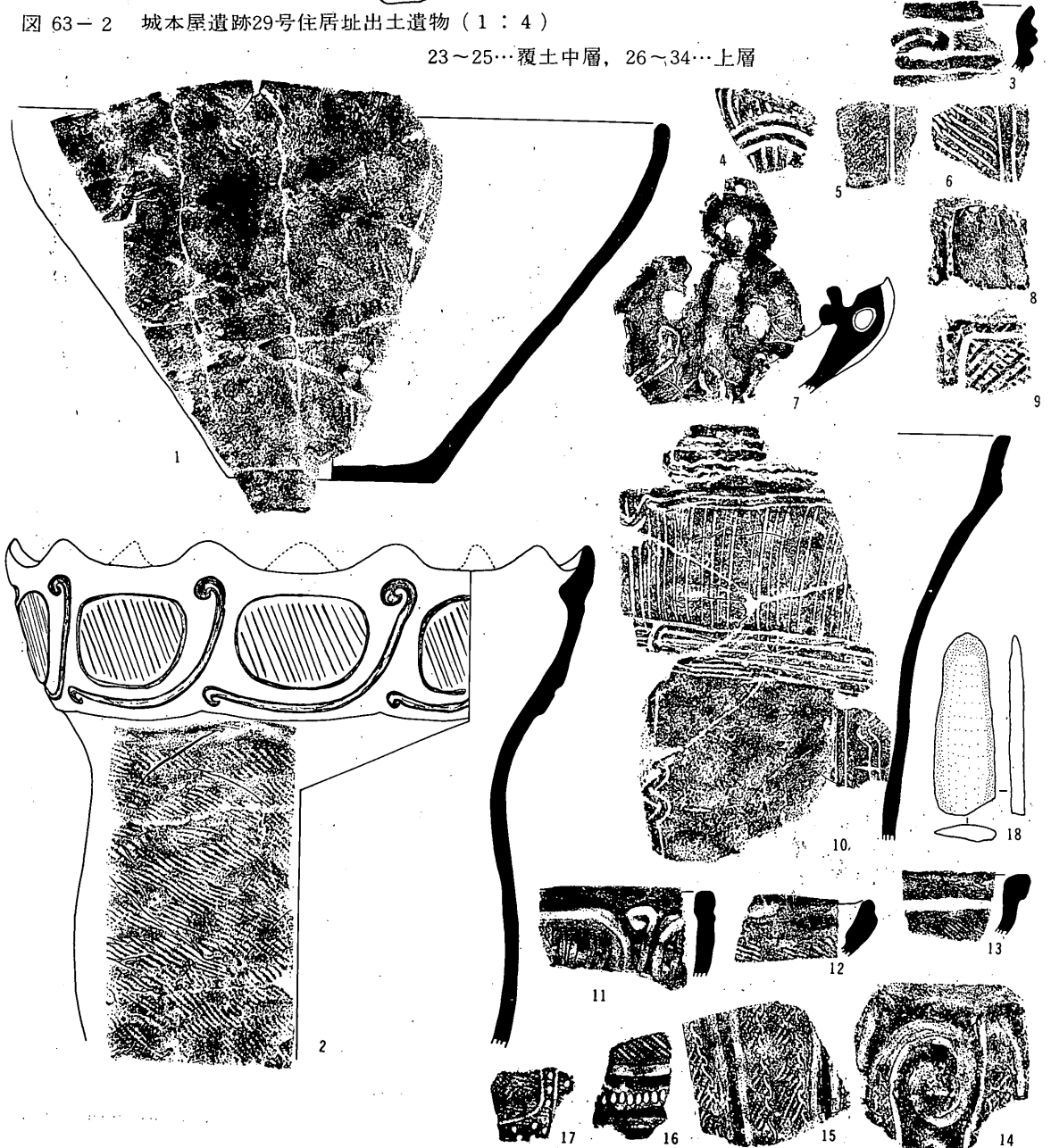


图 64 城本屋遺跡26号·30号·31号·33号·34号住居址出土遺物 (1:4)

1...26住、2...31住埋裏、3~6...30住、7~9...33住 10~18...34住

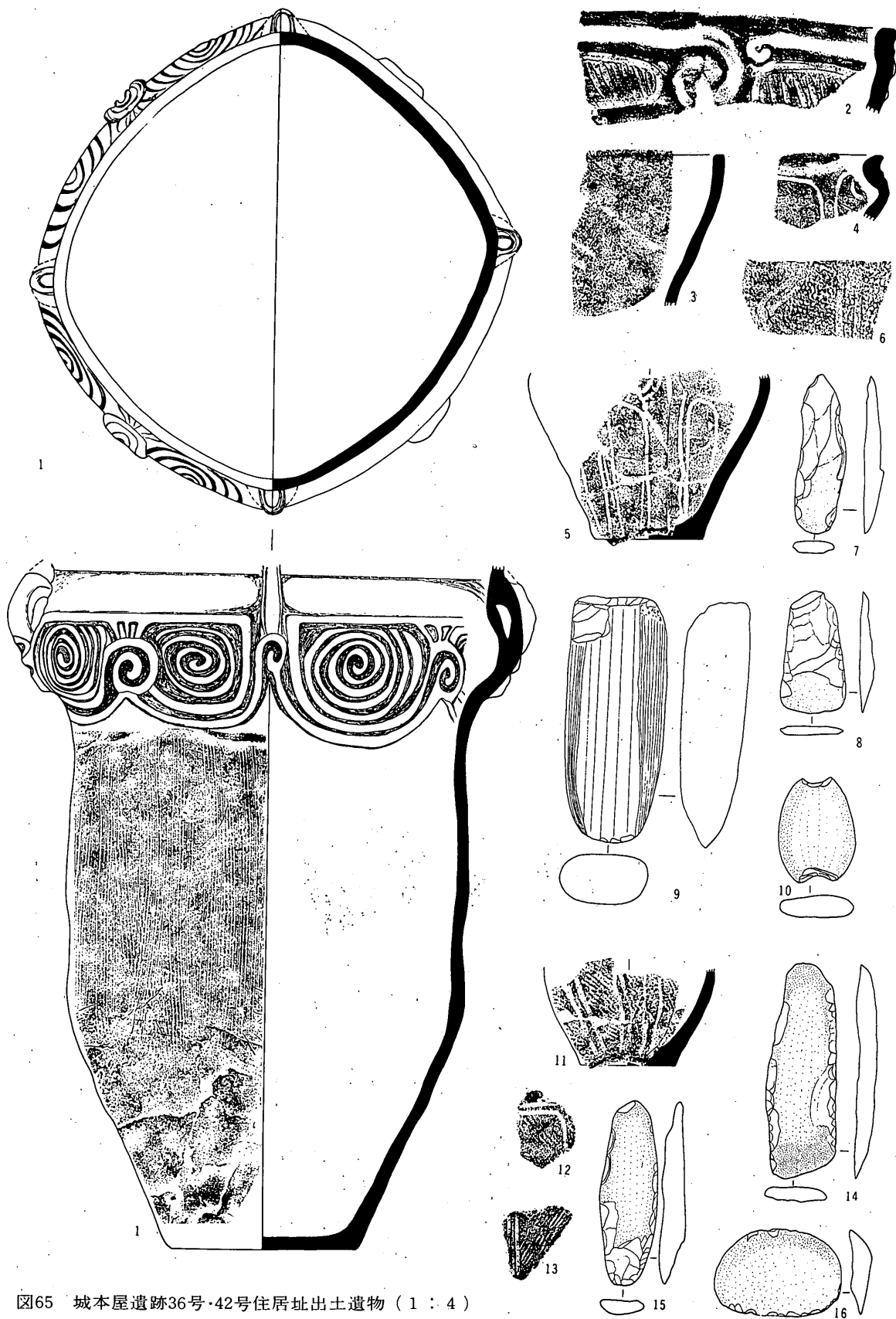


图65 城本屋遺跡36号·42号住居址出土遺物 (1 : 4)

1 ~ 10...36住(1...埋葬), 11 ~ 16...42住

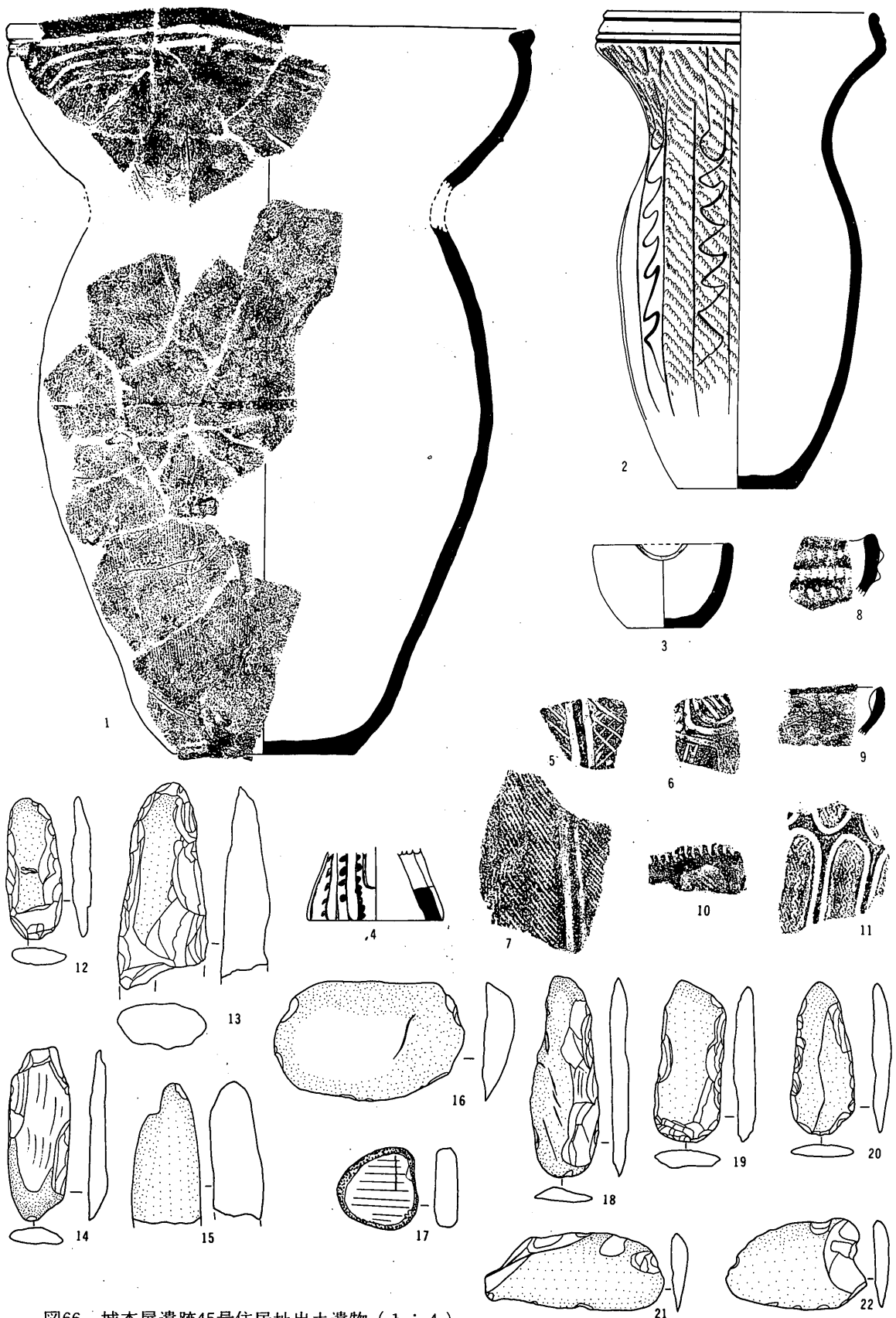


图66 城本屋遺跡45号住居址出土遺物 (1 : 4)

1 ~ 7...床·炉, 8 ~ 11...覆土, 12 ~ 17...床, 18 ~ 22...覆土

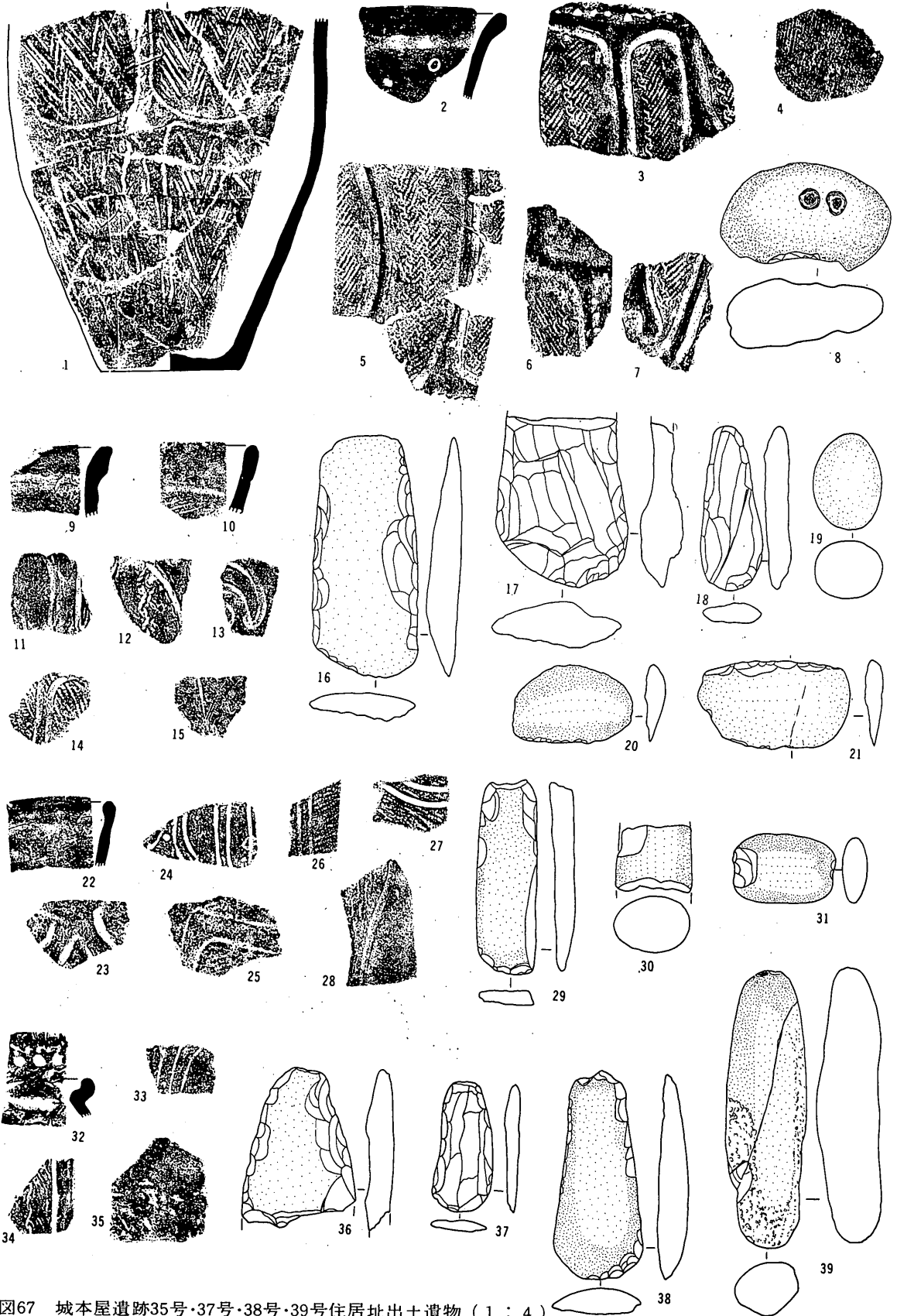


图67 城本屋遺跡35号·37号·38号·39号住居址出土遺物 (1 : 4)

1~8...35住, 9~21...37住, 22~31...38住, 32~39...39住

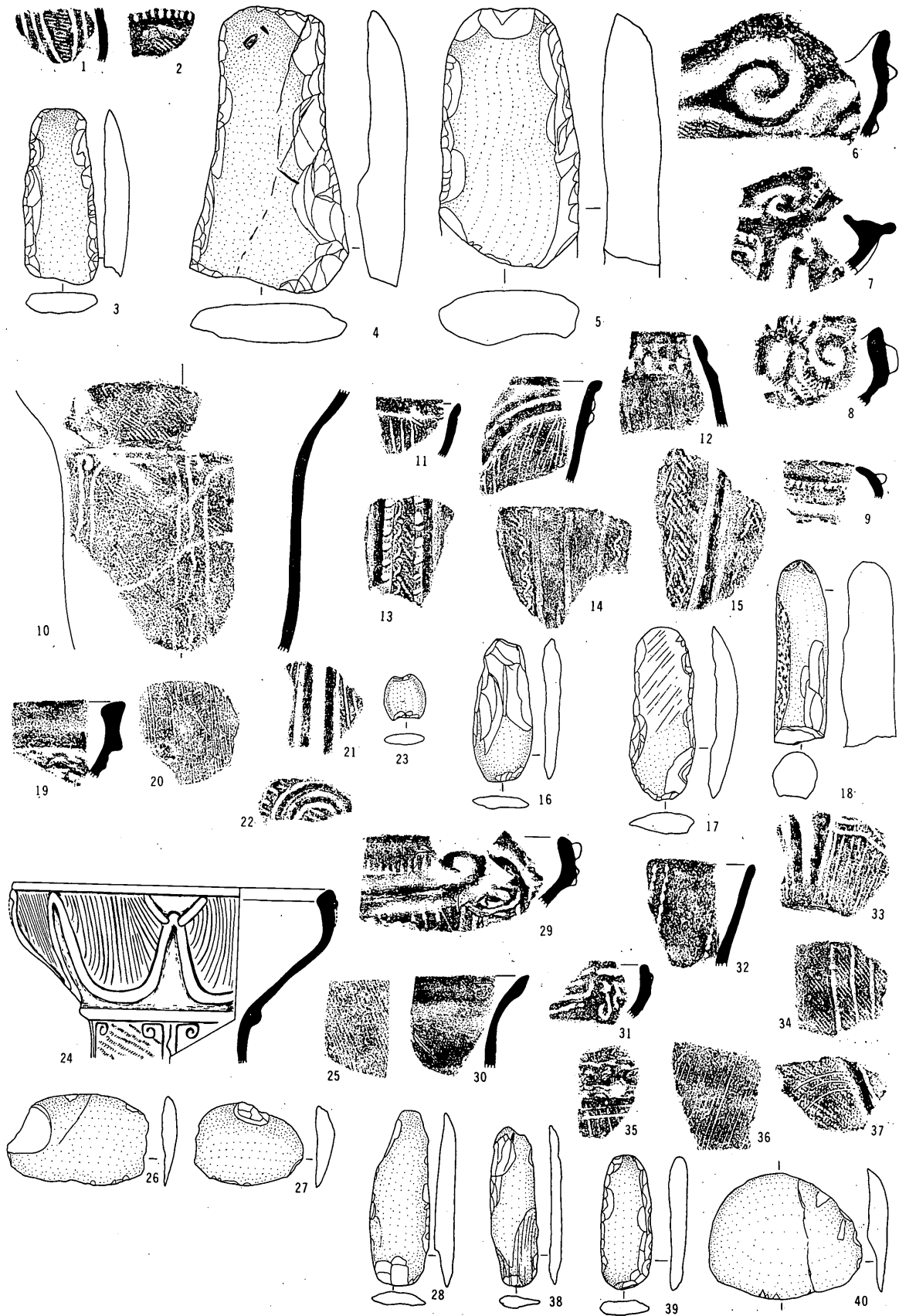


图68 城本屋遺跡40号·41号·43号·50号·51号住居址出土遺物(1:4)

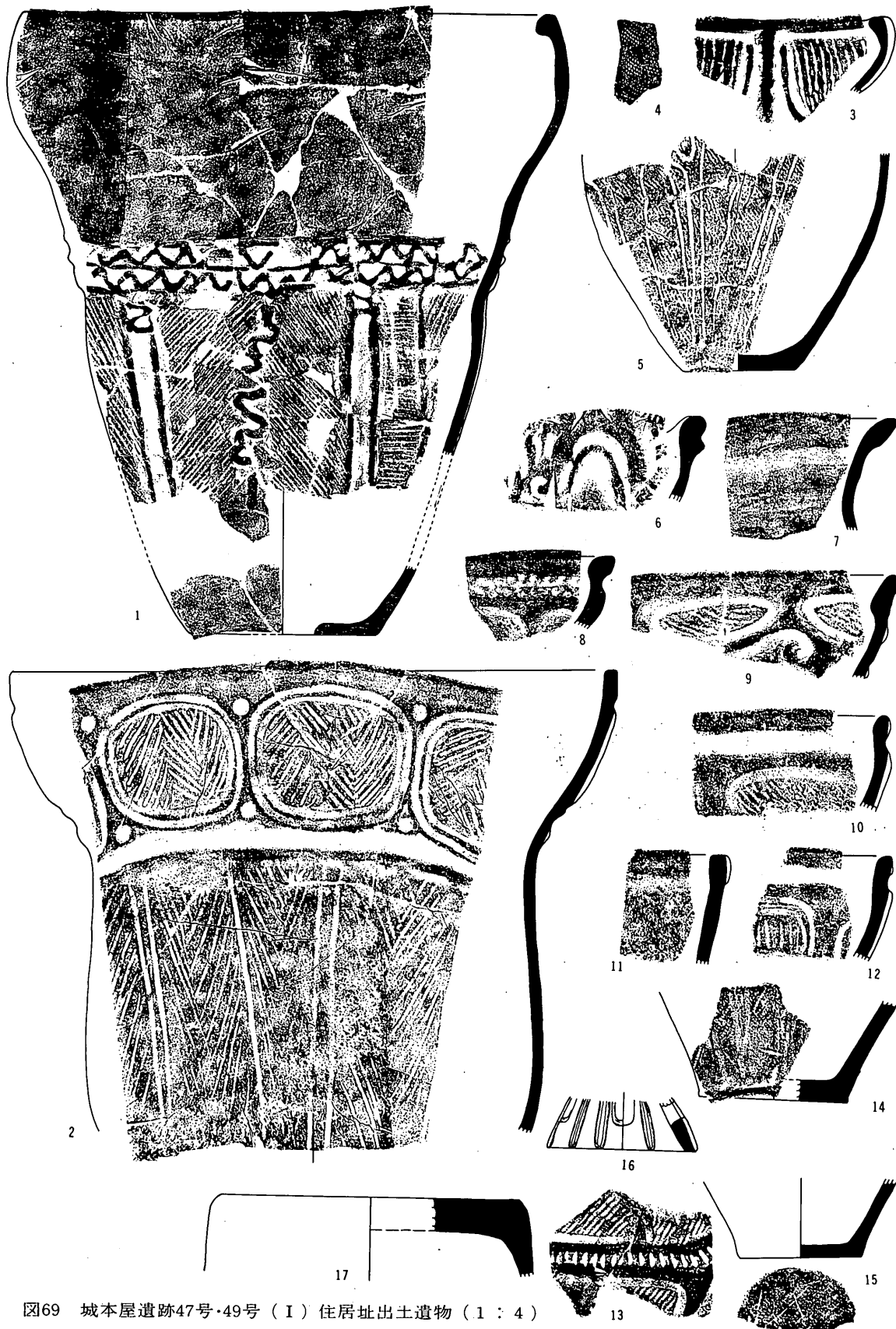


图69 城本屋遺跡47号·49号 (I) 住居址出土遺物 (1 : 4)

1~5...47住(2...埋葬), 6~17...49住床·炉

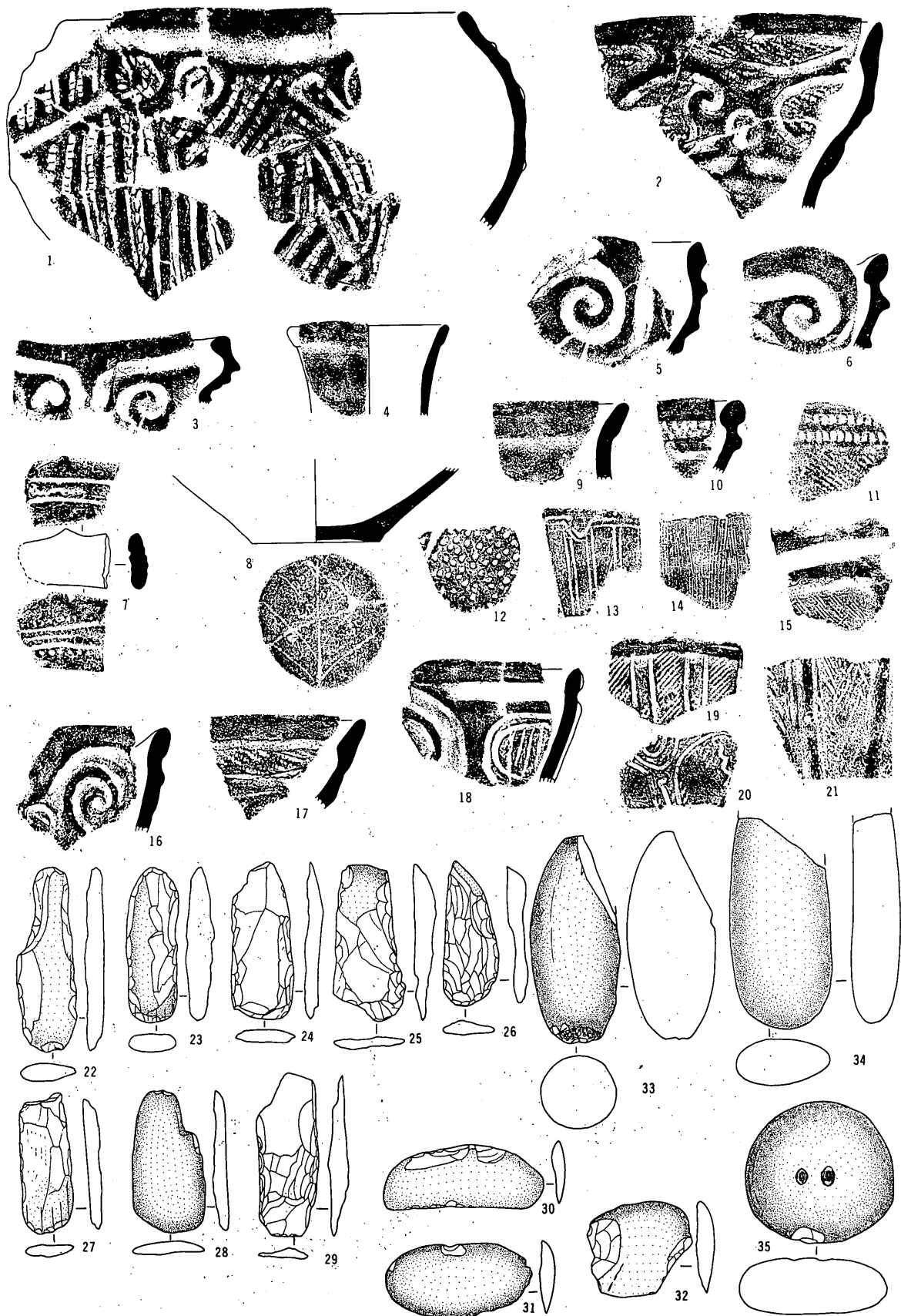


图70 城本屋遺跡49号住居址出土遺物Ⅱ (1 : 4)

1 ~ 15…上部集石, 16 ~ 21…覆土土器, 22 ~ 35…床·炉出土石器

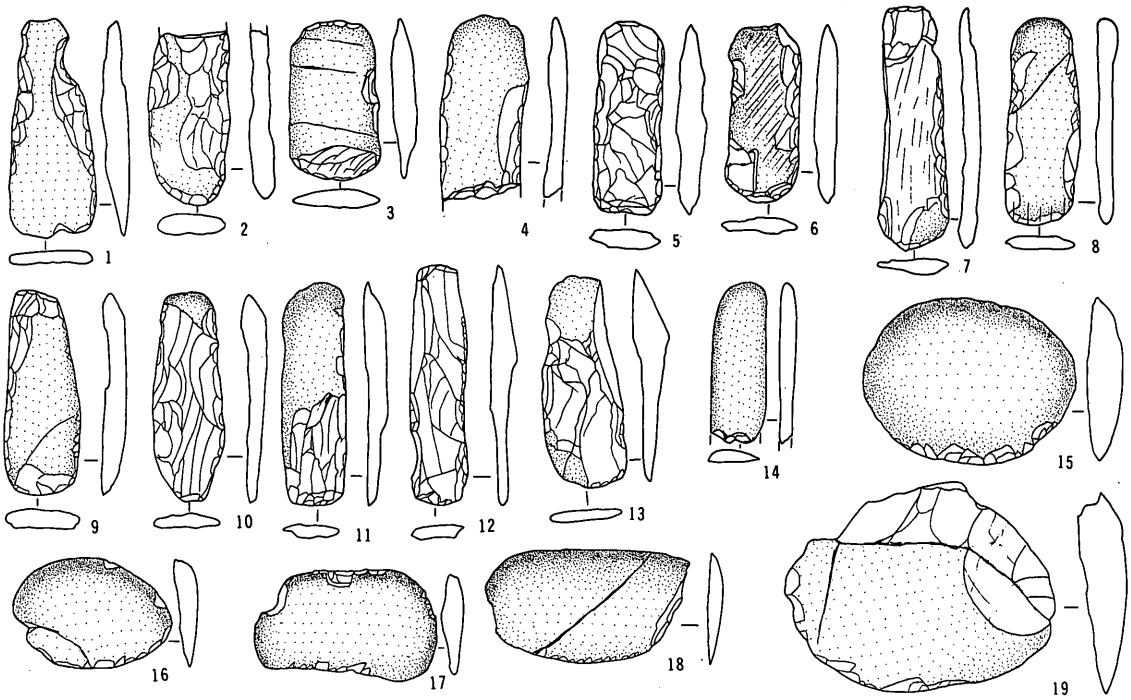


图71 城本屋遺跡49号住居址出土遺物Ⅲ (1:4)
1~19 上部集石

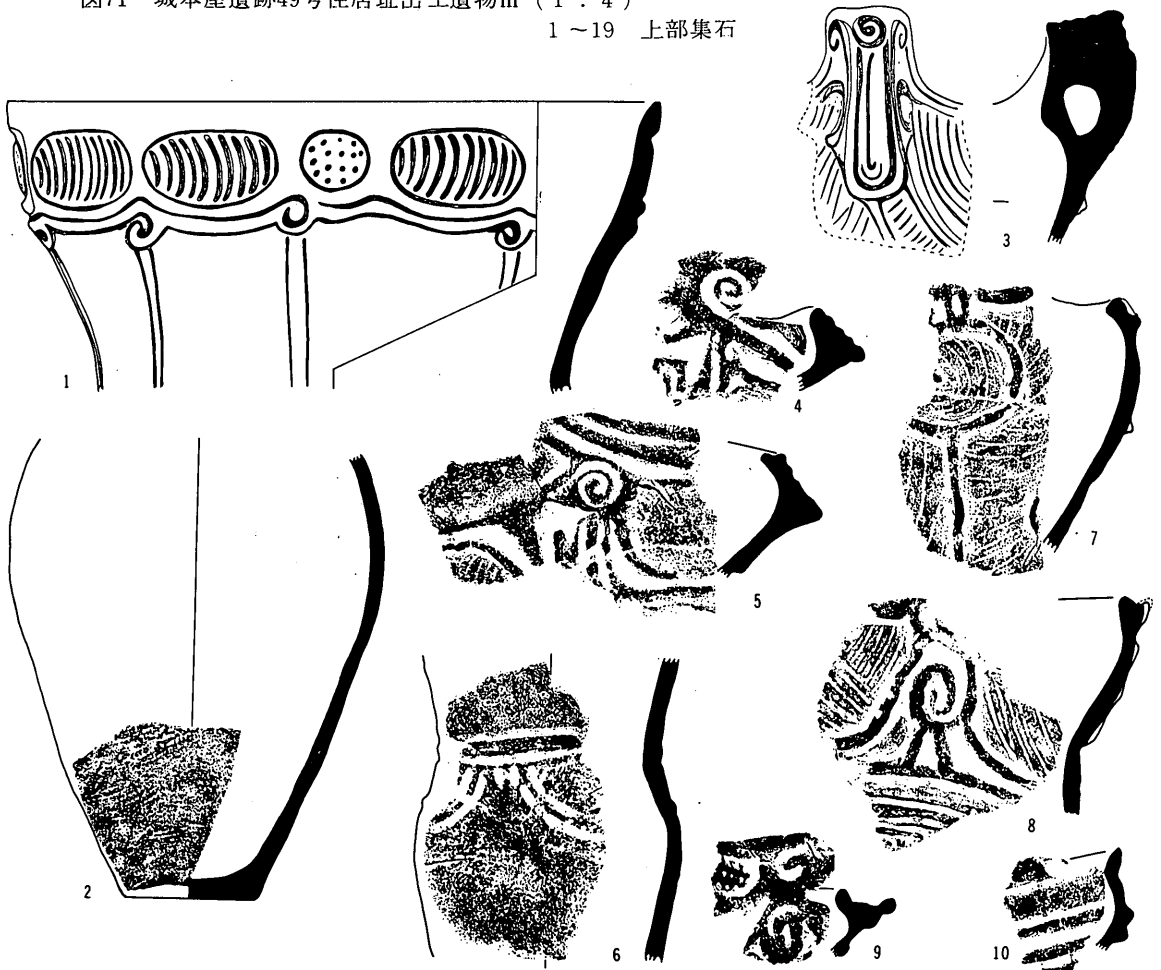


图72 城本屋遺跡52号住居址出土遺物Ⅰ (1:4)
2...埋葬, 6~9...床・炉, 1・3~5・10...覆土及び集石

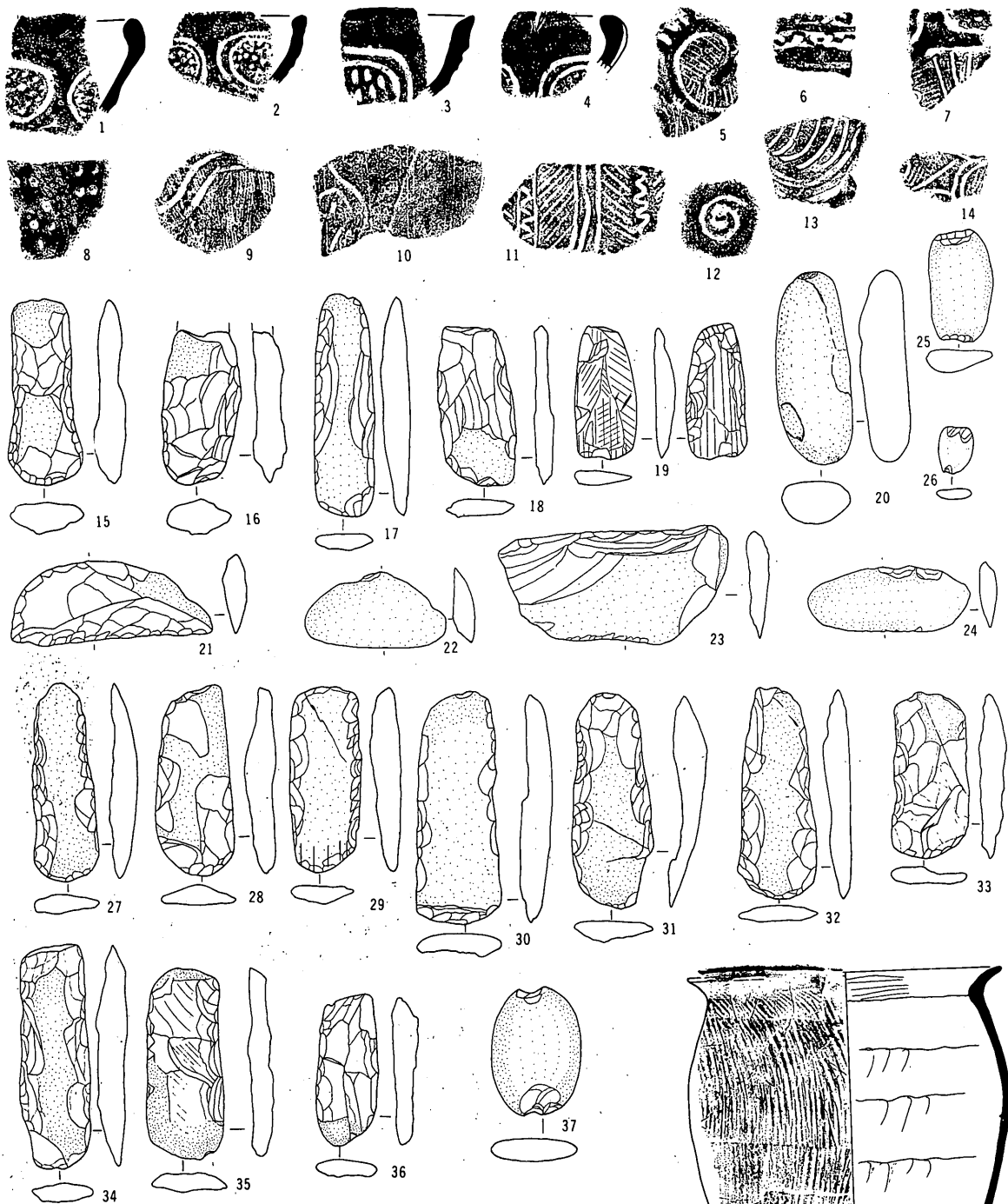


图73 城本屋遺跡52号住居址出土遺物II (1:4)

1~14...覆土, 15~24...床, 27~29...覆土, 30~37...上部集石

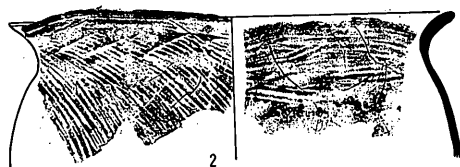


图74 城本屋遺跡48号住居址出土遺物 (1:4)

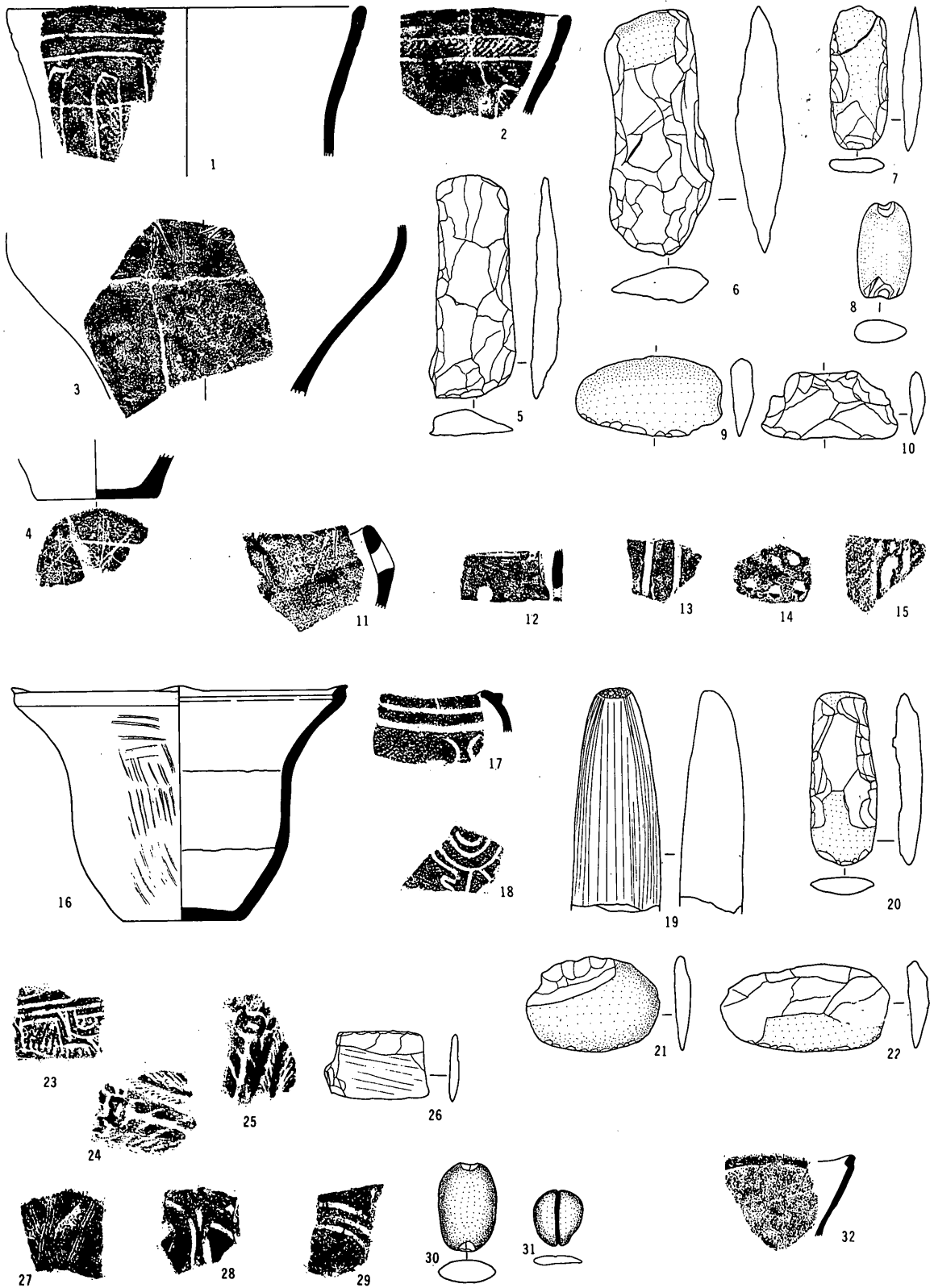


图75 城本屋遺跡土坑1号·3号·7号·11号，貯藏穴，祭祀址？出土遺物（1：4）

1~10…土1, 11~15…土3, 16~22…土11, 23~26…土7,
27~31…貯藏穴, 32…祭祀址？

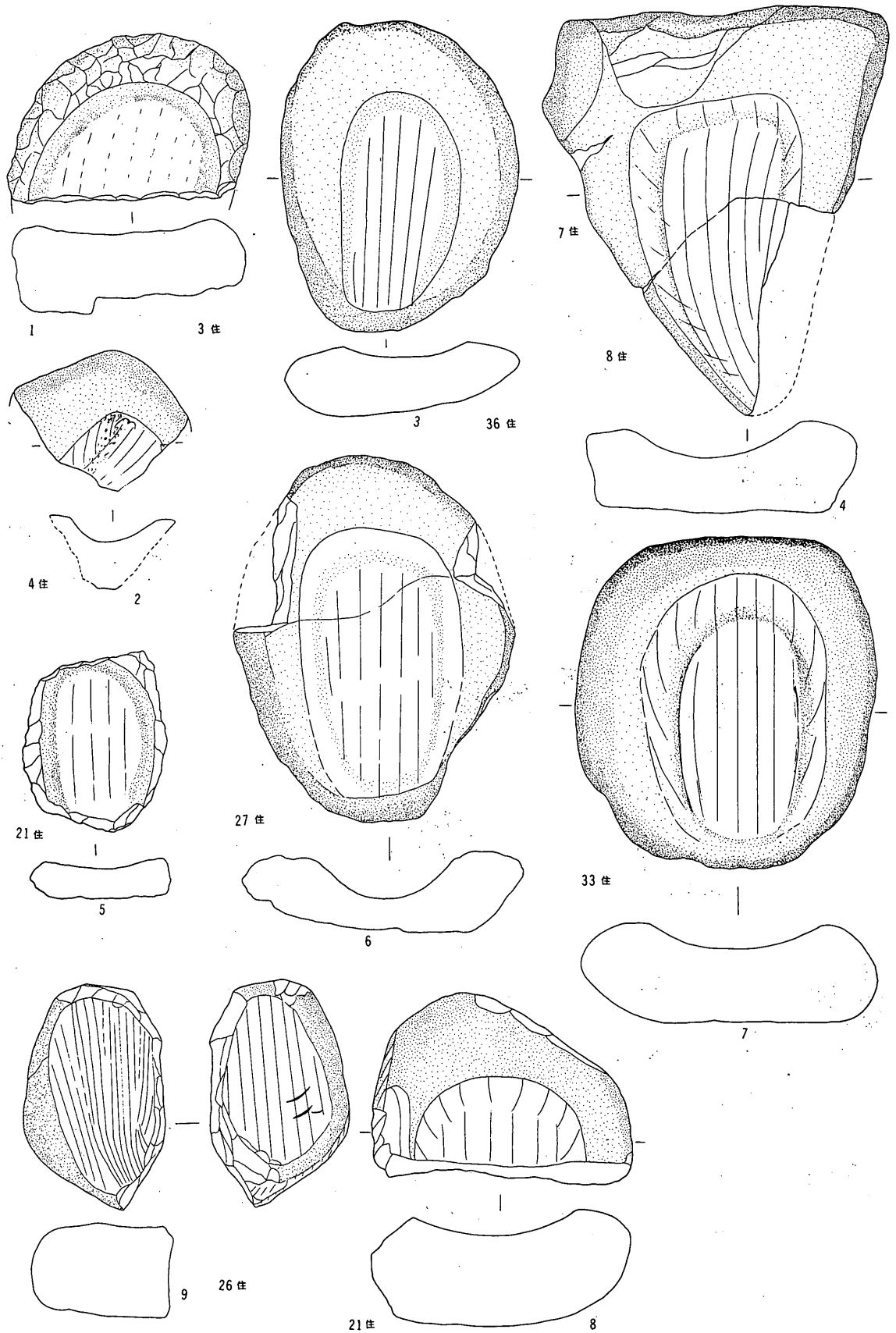
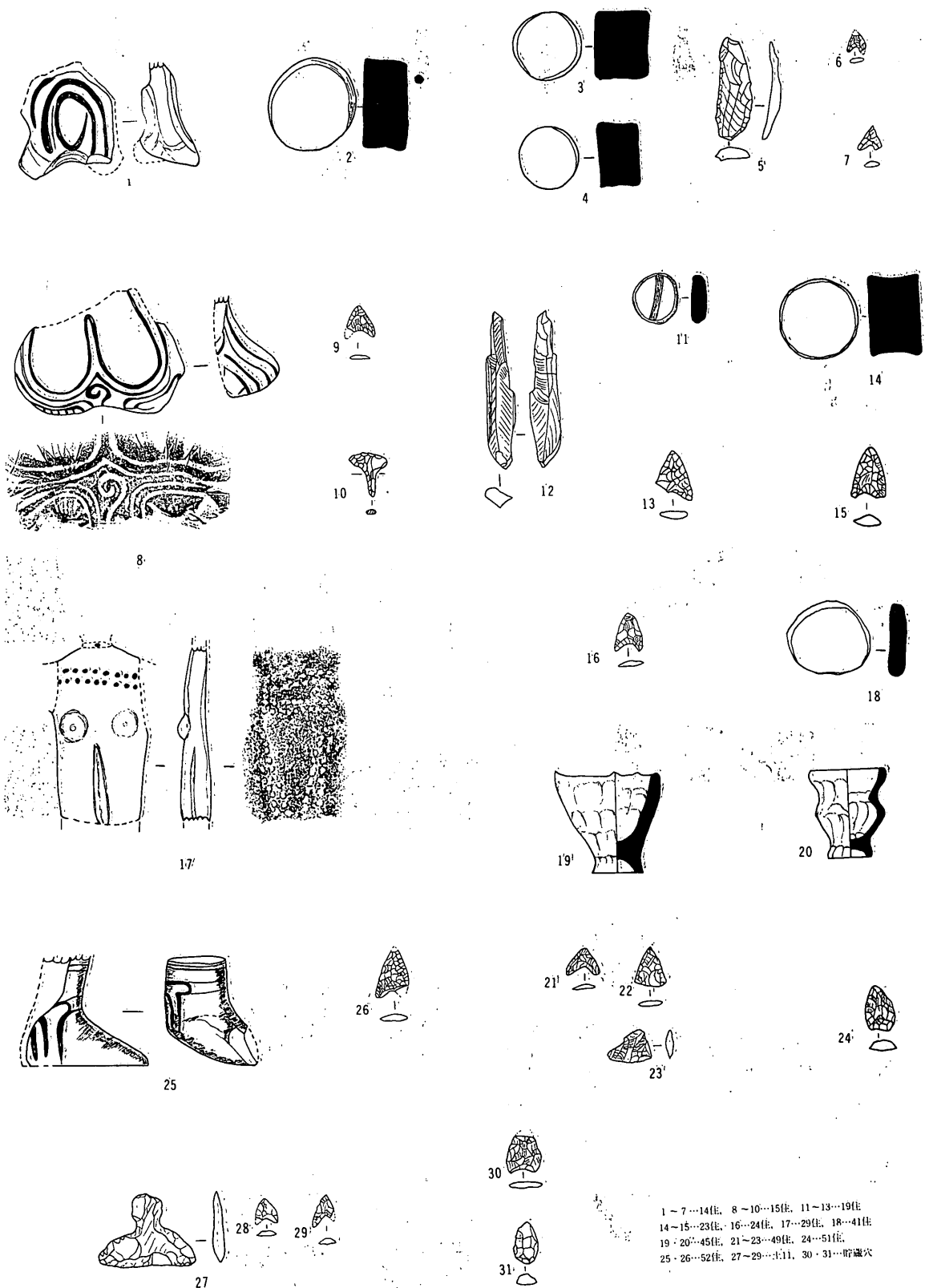


图76 城本屋遺跡出土石皿 (1 : 6)



1~7...14(E), 8~10...15(E), 11~13...19(E)
 14~15...23(E), 16...24(E), 17...29(E), 18...41(E)
 19~20...45(E), 21~23...49(E), 24...51(E)
 25~26...52(E), 27~29...1.11, 30~31...貯藏穴

图78 城本屋遺跡出土土製品，小形石器類Ⅱ（1：3）

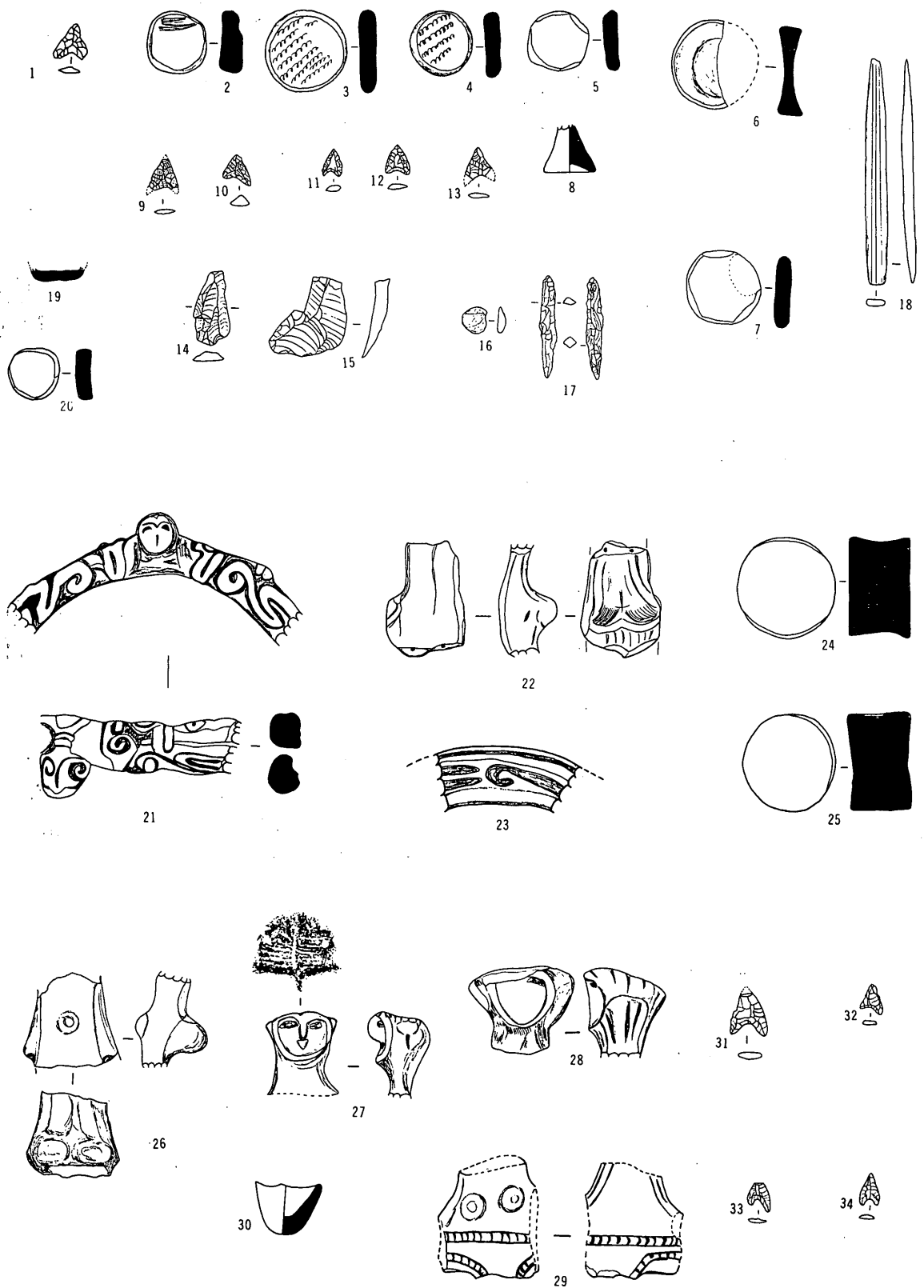


图77 城本屋遺跡出土土製品，小形石器類 I (1 : 3)

1...1 1枚, 2-18...2 枚, 19-20...3 枚, 21-25...7 枚, 26-34...8 枚

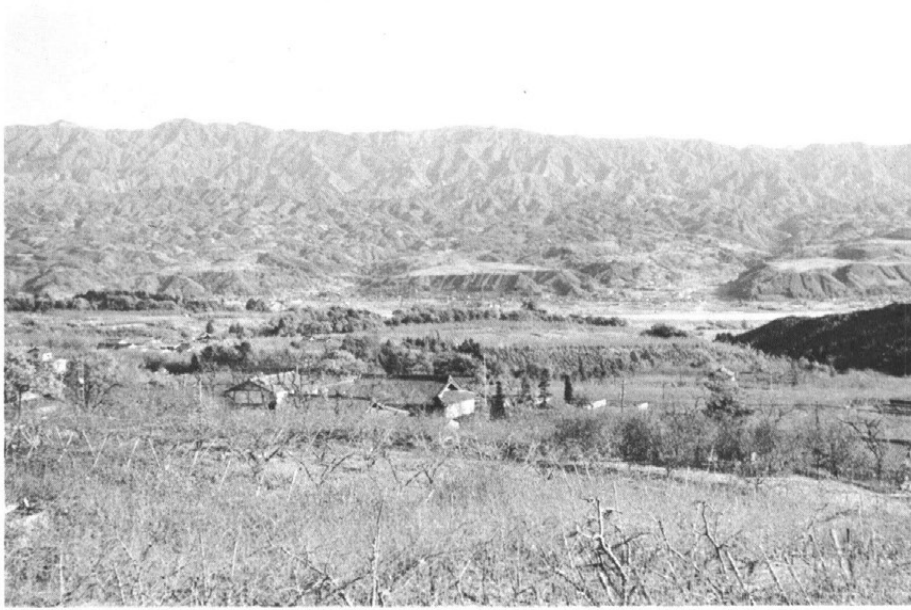
図版 1 遺 跡



遺跡近景 — 南東から



遺跡近景 — 東から



遺跡全景 — 中央を流れるが天竜川、天竜川を隔てた中央の台地が犂牛原



I 調査区遺構群 — 東から



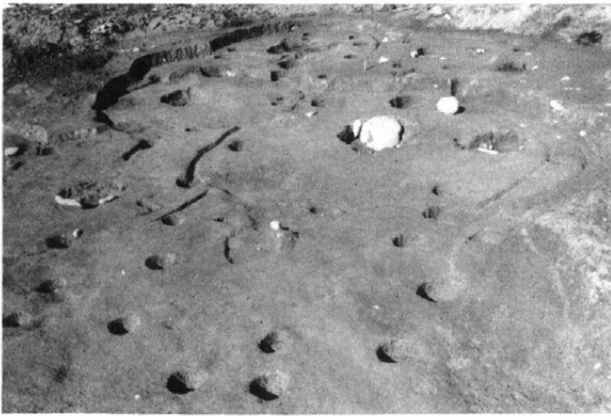
I 調査区遺構群 — 西から



II・V調査区遺構群 — 南から



II・V調査区遺構群 — 北から



II・V調査区遺構群 — 東から



II調査区中心部の遺構群 — 西から
手前が29号住居址

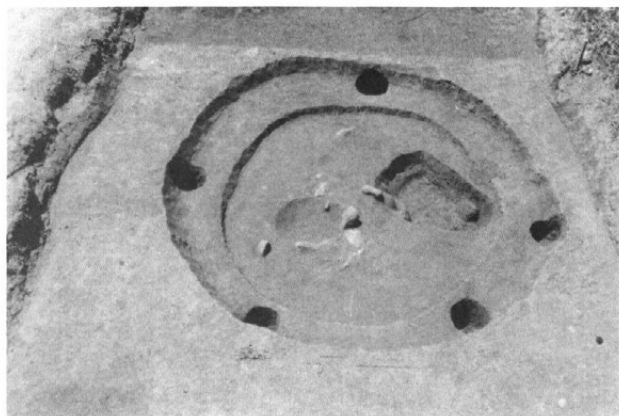


II調査区中心部の遺構群 — 東から
手前が45号住居址



III調査区の遺構
左が40号, 手前から39・38・37号住居址

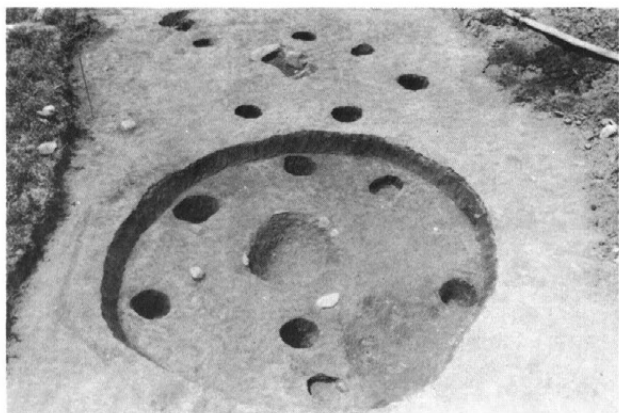
図版 2 遺 構



1号住居址



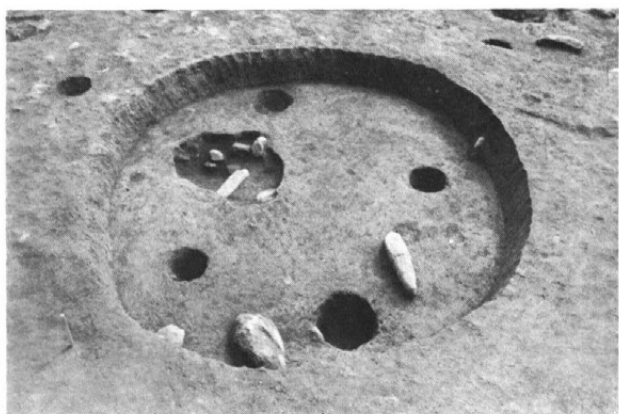
2号住居址



3号住居址



19号住居址



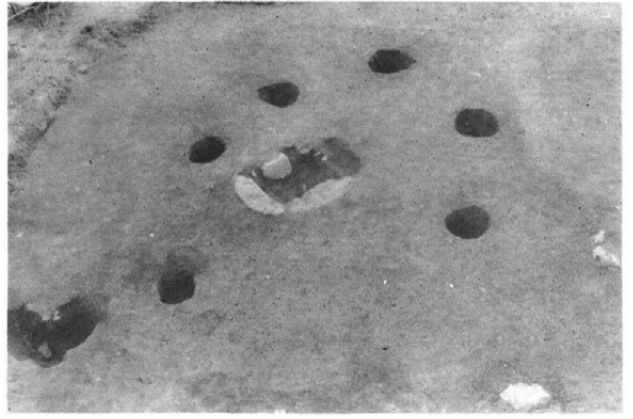
21号住居址



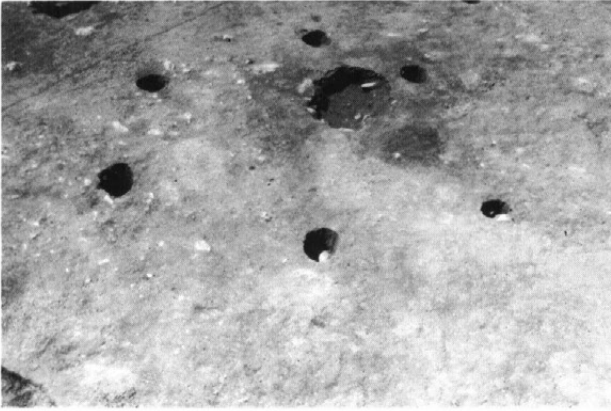
45号住居址



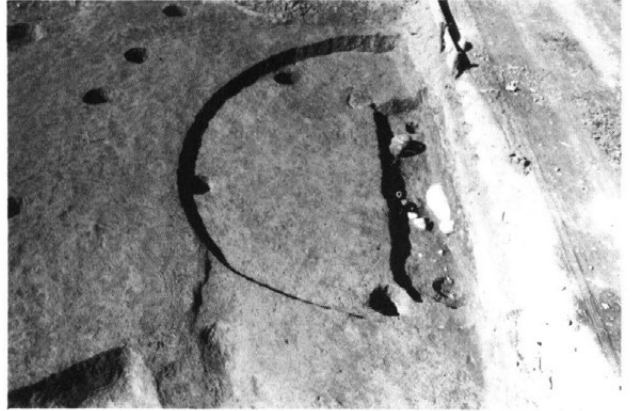
4号住居址，土坑9,10号 -
手前中央が土坑9号，右が土坑10号，上が4号住居址



4号住居址



39号住居址



46号・47号住居址（中に切りこむが46住）



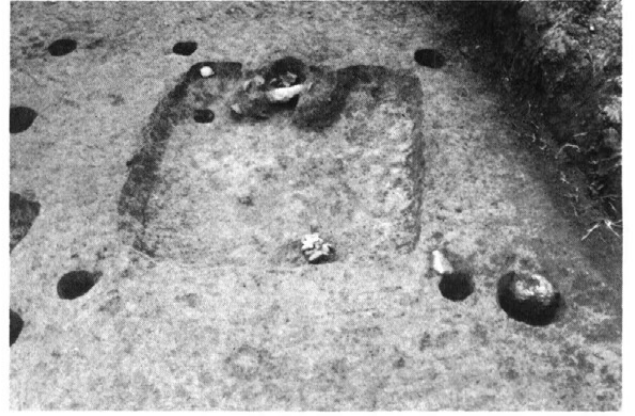
9号住居址 炉址



49号住居址 炉址



49号(左)・51号(右)住居址上部集石



48号住居址



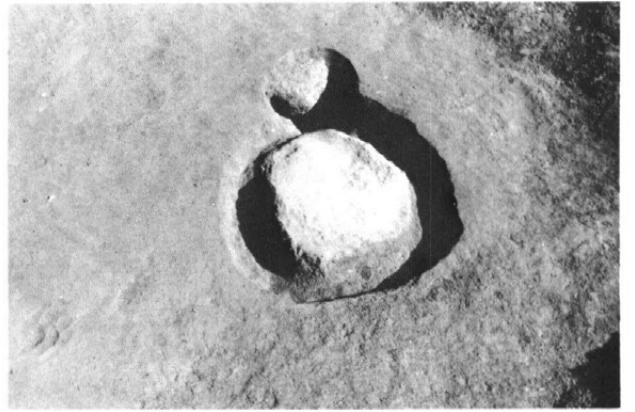
土壇1号



土壇13号



貯藏穴・柱列址 I



祭祀址状遺構

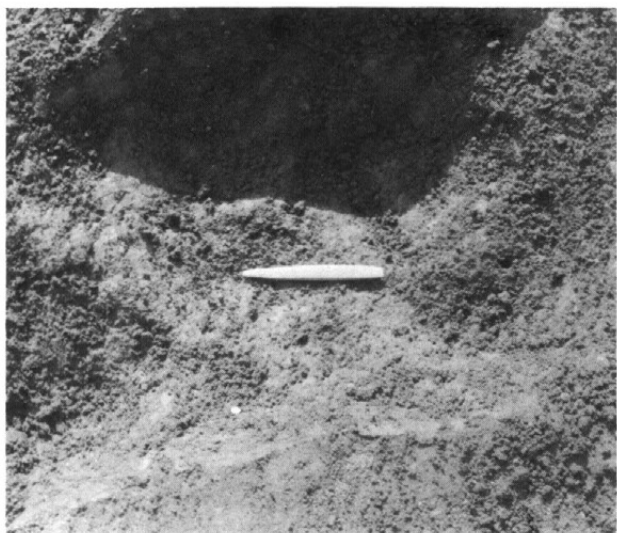
図版 3 遺 物



2号住居址土器の出土



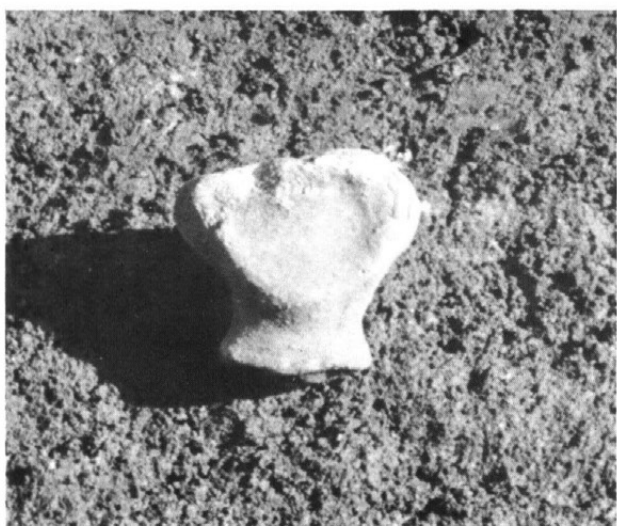
2号住居址石器の出土



2号住居址小形磨石斧出土



8号住居址浅鉢の出土



8号住居址土偶の出土



3号住居址土器の出土



31号住居址伏甕



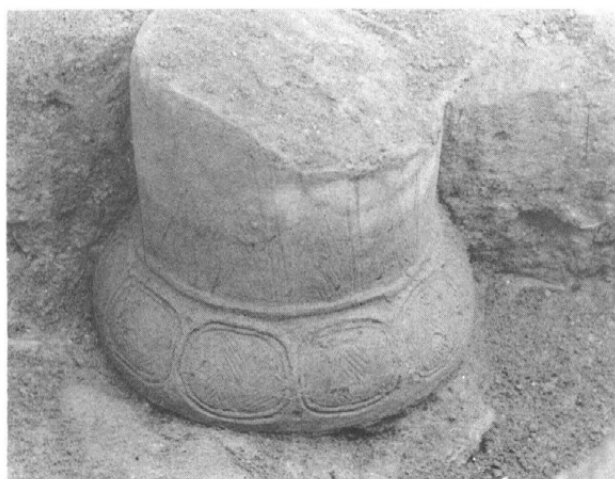
31号住居址伏甕



36号住居址埋甕



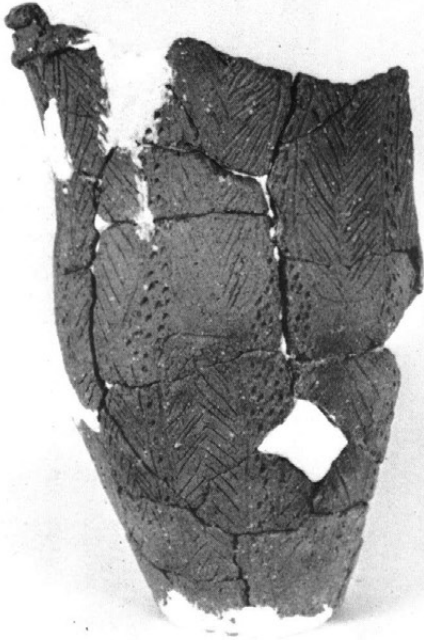
36号住居址埋甕



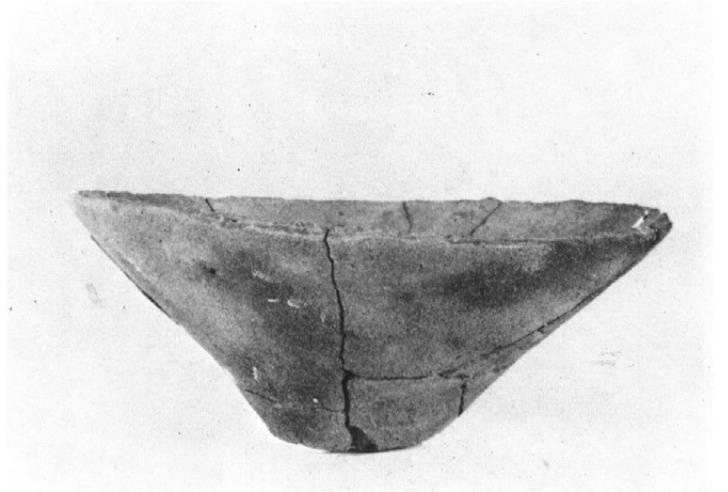
47号住居址伏甕



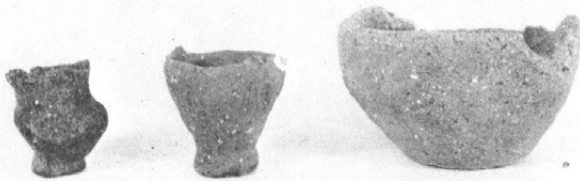
47号住居址伏甕



18号住居址出土深鉢



8号住居址出土浅鉢



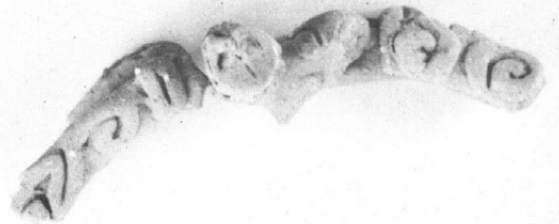
45号住居址出土ミニチア土器



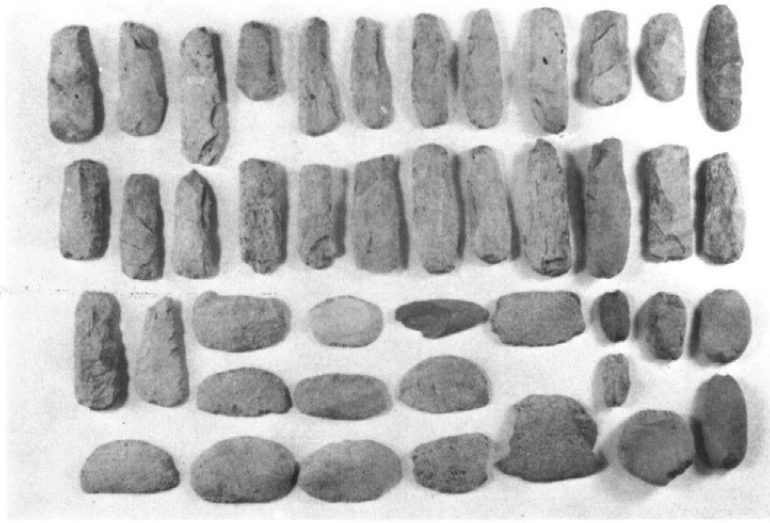
35号住居址出土深鉢



城本屋遺跡出土土偶



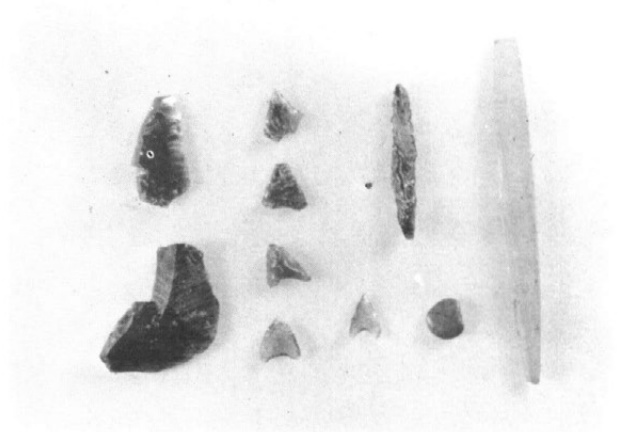
7号住居址出土吊手土器の吊手部



2号住居址出土石器 1



2号住居址出土石器 2



2号住居址出土石器 3



土坑11号出土縄文後期土器



48号住居址出土土師器甕形土器

図版4 発掘スナップ



1号・2号住居址の調査



3号住居址の調査



II調査区にかかる



II調査区の調査をすすめる



III調査区にかかる



複雑な住居址の切りあいの調査

お わ り に

農業の近代化を目指す第2次農業構造改善事業が、昭和51年52年度に亘り埴牛原地区で実施されることになったので、事前に担当課である産業課、並に南信土地改良事業所下伊那支所と協議、県教委文化課の指導を受けて発掘計画を立案し、昭和51年5月26日文化庁に対し、埋蔵文化財発掘届を提出、7月22日より発掘作業に着手した。

城本屋遺跡は埴牛原の西北突端の位置にあり、かねてから縄文弥生時代の豊富な埋蔵文化財の包蔵地として注目されていたところである為、慎重綿密な発掘調査を行なった。

調査事業費は総額344万円で、その70%を農業構造改善事業費の中から負担金として喬木村教育委員会が受け、残り30%は文化庁及び県の補助金と一般財源で補った。

今回の調査で予想以上の住居址、土器、石器の出土を見ることができ、本村の埋蔵文化財調査記録保存のため大きな成果を取ることができた。

この発掘調査は水田があったため、構造改善事業着手時期との関係で、土地所有者には土地提供について非常に大きな理解と協力を頂いたため、調査が順調にできた訳で有難く感謝に耐えない。

調査作業については酷暑の中で団長佐藤甦信先生、調査員今村正次先生を始め作業員が真黒に日焼して調査を進め、県考古学会長大沢和夫先生、県地理学会長矢亀勝俊先生、県教委文化課指導主事今村善興先生の適切なる御指導等により調査が順調にできた次第であり、特に出土品整理、復元、報告書作製については終始熱心に当られた佐藤先生ご夫妻のご努力の賜であり調査完了にあたり各位に衷心より敬意を表する次第である。

出土品については関係各官庁に届出を終り、現在喬木村資料館（旧中央保育園）に保管中である。

昭和52年3月

喬木村教育委員会

帰牛原城本屋

— 縄文中期末葉の集落を中心とした —

昭和51年度喬木村帰牛原地区農業構造改善事業
埋蔵文化財発掘調査報告書

1977.3

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

印刷 株式会社 秀文社
